高松市埋蔵文化財調査報告　第 245集

複合商業施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

まつ　の　うち　い　せき
松ノ内遺跡 2

2023年 3 月

株式会社ハローズ
高松市教育委員会

松ノ内遺跡2

二〇二三年三月

株式会社ハローズ・高松市教育委員会

例　　言

1　本書は高松市多肥下町に所在する松ノ内遺跡の調査報告を収録した。
2　発掘調査地及び調査期間、調査面積は、次のとおりである。
　調 査 地　高松市多肥上町 973 － 1 ほか
　調査期間　令和３年６月 24 日～９月 16 日、令和４年９月 12 ～ 15 日
　調査面積　約 1,600㎡
3　本調査を実施するに当たり、高松市、高松市教育委員会、株式会社ハローズは「複合商業施設建設工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する協定書を締結した。
4　発掘調査及び整理作業は、高松市教育委員会が実施した。調査及び整理に係る費用は、全額を株式会社ハローズが負担した。
5　発掘調査及び整理作業は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 梶原 慎司、同課会計年度任用職員 中西 克也が担当した。
6　本報告書の執筆は第１章第１節を同課文化財専門員 香川 将慶が、それ以外は中西が担当し、編集は中西が行った。
7　以下の業務については、委託業務として行った。
　掘削業務委託：株式会社 山根建設
　遺物写真撮影業務委託：西大寺フォト
8　発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会で保管している。

凡　　例

1　本報告の挿図として、高松市都市計画図２千５百分の１「高松市街地」を５千分の１に改変して使用した。
2　標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第Ⅳ系 (世界測地系)、方位は座標北を表す。
3　本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
　ＳＡ：柵　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＩ：竪穴建物
　ＳＫ：土坑　　ＳＰ：柱穴　　ＳＸ：性格不明遺構
4　挿図の縮尺は各挿図に明記する。写真図版における遺物の縮尺はすべて任意である。
5　土層及び土器観察表の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に拠る。
6　報告書は図化した遺物が出土した遺構を中心に記述しており、その他の遺構は文末に記載した表１ 遺構一覧表に規模等を表記する。直径・幅において、［ ］は検出値を表す。
7　表２ 遺物観察表の法量において、（ ）は推定値、［ ］は残存値を表す。

本　文　目　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1
第２章　地理的・歴史的環境 …… 2
第１節　地理的環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　発掘調査の成果 …… 5
第１節　調査の方法 …… 5
第２節　遺構・遺物 …… 6
１．A1 調査区 …… 6
２．A2・B1 調査区 …… 6
（１）竪穴建物 …… 6
（２）掘立柱建物 …… 9
（３）溝 …… 14
（４）土坑 …… 18
（５）ピット …… 18
（６）性格不明遺構 …… 19
３．B2 調査区 …… 20
（１）掘立柱建物 …… 21
（２）溝 …… 22
（３）ピット …… 23
４．B3 調査区 …… 24
５．C1・2 調査区 …… 26
（１）柵 …… 26
（２）溝 …… 26
（３）土坑 …… 28
６．D1 調査区 …… 29
（１）溝 …… 29
７．D2 調査区 …… 34
８．E1 調査区 …… 34
（１）溝 …… 34
（２）ピット …… 34
９．F1・2 調査区 …… 37
（１）竪穴建物 …… 37
（２）溝 …… 37
（３）ピット …… 41
（４）包含層出土遺物 …… 42
第４章　まとめ …… 43
第１節　遺構の変遷 …… 43

挿　図　目　次

第 1 図　高松市域における位置図 …… 1
第 2 図　周辺の遺跡分布図 …… 3
第 3 図　調査区の設定 …… 5
第 4 図　A1・2、B1 ～ 3 調査区 平面図 …… 7
第 5 図　B1-SI01 平・断面図 …… 9
第 6 図　B1-SB01 平・断面図及び出土遺物実測図 ……10
第 7 図　B1-SB02 平・断面図及び出土遺物実測図 ……11
第 8 図　B1-SB03 平・断面図 ……12
第 9 図　B1-SB04 平・断面図及び出土遺物実測図 ……12
第 10 図 A2・B1-SB05 平・断面図 ……13
第 11 図 A2-SD01 平・断面図 ……15
第 12 図 A2-SD01 出土遺物実測図 ……16
第 13 図 B1-SD01 平・断面図 ……16
第 14 図 B1-SD02 平・断面図及び出土遺物実測図 ……17
第 15 図 A2-SK01・03、B1-SK58 平・断面図 ……18
第 16 図 B1-SP37 平・断面図及び出土遺物実測図 ……19
第 17 図 A2-SX02・03 平・断面図 ……19
第 18 図 A2-SX04・06 平・断面図及び出土遺物実測図 ……20
第 19 図 B2-SB06 平・断面図及び出土遺物実測図 ……21
第 20 図 B2-SB07 平・断面図 ……22
第 21 図 B2-SD03 平・断面図 ……23
第 22 図 B2-SD04 平・断面図及び出土遺物実測図 ……23
第 23 図 B2-SP60・61・64・68 平・断面図及び出土遺物実測図 ……25
第 24 図 C1・2 調査区 平面図 ……27
第 25 図 C1-SA01 平・断面図 ……28
第 26 図 C1-SD01 平・断面図及び出土遺物実測図 ……28
第 27 図 C1-SD02 平・断面図 ……29
第 28 図 C1-SK09 平・断面図及び出土遺物実測図 ……29
第 29 図 D1・2、E1 調査区 平面図 ……31
第 30 図 D1-SD01 平・断面図及び出土遺物実測図 ……33
第 31 図 D1-SD02 平・断面図 ……34
第 32 図 D1-SD03 平・断面図 ……35
第 33 図 D1-SD04 平・断面図及び出土遺物実測図 ……36
第 34 図 E1-SP01 出土遺物実測図 ……37
第 35 図 F1・2 調査区 平面図 ……37
第 36 図 F2-SI01 平・断面図及び出土遺物実測図 ……38
第 37 図 F1・2-SD01・02 平・断面図 ……39
第 38 図 F1・2-SD01 出土遺物実測図 ……40
第 39 図 F1・2-SD02 出土遺物実測図 ……40
第 40 図 F1・2-SD03 平・断面図 ……41
第 41 図 F1-SP01 ～ 03、F2-SP04 平・断面図 ……42
第 42 図 F1・2 包含層 出土遺物実測図 ……42
第 43 図 遺構変遷図① ……44
第 44 図 遺構変遷図② ……45

挿　表　目　次

表 1　遺構一覧表 …… 46　表 2　遺物観察表 …… 48

写　真　図　版　目　次

1-1　A2・B1 調査区 完掘
1-2　B2・3 調査区 完掘 (西から)
2-1　A2 調査区 完掘 (東から)
2-2　A2-SD01 完掘 東端 (東から)
2-3　A2-SD01 完掘 西端 (東から)
2-4　A2-SD01 土層 (東から)
2-5　A2-SD01 完掘 中央 (東から)
2-6　A2-SD01 土層 (東から)
2-7　A2-SK03 完掘 (北から)
2-8　A2-SX04 完掘 (南西から)
3-1　A2、B1 調査区 完掘 (東から)
3-2　B1-SI01 完掘 (南から)
3-3　B1-SI01 P1 土層断面 (南から)
3-4　B1-SI01 掘り方 (西から)
3-5　B1-SB02 ～ 04 完掘
3-6　B1-SB04 完掘 (北から)
3-7　B1-SB04 SP56 完掘
3-8　B1-SD01 完掘 (南から)
4-1　B2 調査区 完掘
4-2　B2-SB06、B2-SD03・04 完掘
4-3　B2-SB06 SP51 完掘
4-4　B2-SB06 SP56 完掘
4-5　B2-SD03・04 完掘 (南から)
4-6　B2-SD04 土層断面 (南から)
4-7　C1 調査区 完掘
4-8　C2 調査区 完掘
5-1　D1 調査区 完掘 (南から)
5-2　D2 調査区 完掘 (西から)
5-3　E1 調査区 完掘 (東から)
6-1　F1 調査区 完掘 (南から)
6-2　F2 調査区 完掘 (南から)
6-3　F2-SI01 完掘 (南から)
6-4　F2-SI01 土層断面 (南から)
6-5　F1・2-SD01 土層断面 (南から)
6-6　F1・2-SD02 土層断面 (南から)
6-7　F2-SD03 完掘 (西から)
6-8　F2-SD03 土層断面 (東から)
7-1　出土遺物
8-1　出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

事業者である株式会社ハローズ（以下、事業者）より当該地における複合商業施設建設工事の計画に伴い、高松市教育委員会（以下、市教委）へ周知の埋蔵文化財包蔵地の照会があった。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「多肥平塚遺跡」「松ノ内遺跡」に隣接し、試掘調査が必要である。そのため試掘依頼がなされ、令和２年10月14日～11月６日に市教委が試掘調査を実施した。事業地の一部に埋蔵文化財の包蔵状況を確認し、香川県教育委員会（以下、県教委）に報告した。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「多肥平塚遺跡」「松ノ内遺跡」として新たに追加登録され、事業施工前に周知の埋蔵文化財における保護措置が必要であることが事業者に伝達された。その後、事業者から工事全般にかかる文化財保護法第93条に基づく発掘の届出が令和３年３月23日付けで市教委を通じて県教委に提出され、同日付けで建物建設・浄化槽設置、排水路各工事については「発掘調査」、擁壁・水道管布設等の工事については「工事立会」という行政指導がなされた。また、令和３年６月29日付けで擁壁工事等の付帯工事についても文化財保護法第93条に基づく届出があり、同日付けで「工事立会」の行政指導があった。これに伴い、事業者と市教委は協議を行い、遺跡に影響を及ぼす範囲について事前の発掘調査と工事立会を行うことで双方合意し、事業者（発注者）、高松市（管理者）、市教委（監督者）の三者協定を結び、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の経過

発掘調査は令和３年６月24日～９月16日に実施し、令和４年４月12日～５月24日に工事立会を実施した。

さらに、事業者から事業計画の変更があり、令和４年７月20日付けで文化財保護法第93条に基づく発掘届出があり、市教委は県教委に進達した。その後、県教委から７月20日付けで「発掘調査」の行政指導があり、協定書の一部を変更し、令和４年９月12日～15日にかけて発掘調査を実施した。

整理作業は令和３年12月～令和５年２月にかけて随時実施した。令和３年12月と令和４年９月に出土遺物の洗浄・接合を行い、10月に遺物の実測を終了した。同年４～10月に遺構・遺物の図版を作成した。令和４年８月～令和５年２月にかけて原稿の執筆・編集を行った。

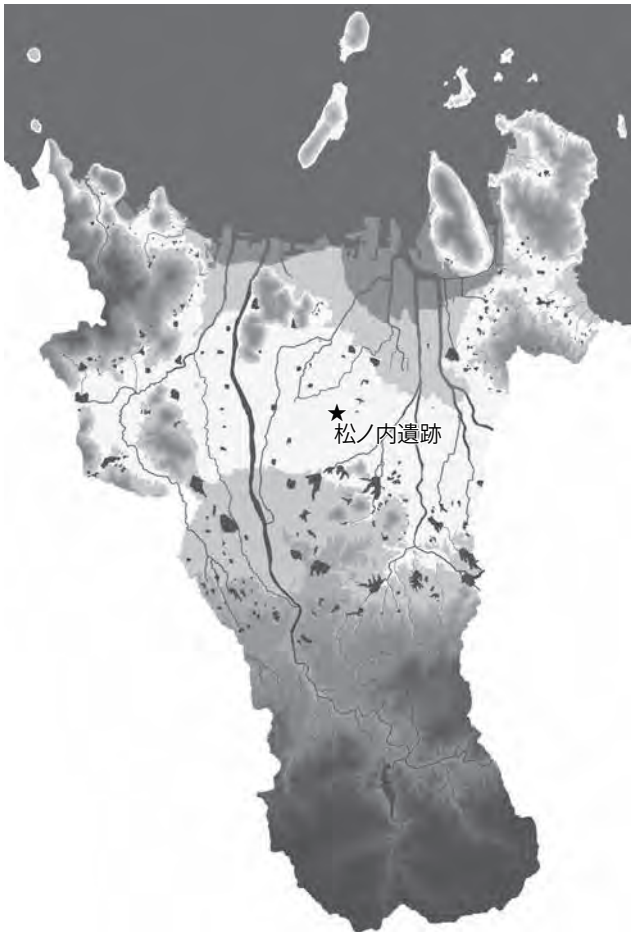


図１　　高松市域における位置図

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に位置する高松平野は、西を五色台・勝賀山、南を阿讃山脈、東を立石山塊により取り囲まれており、その規模は東西約 20km、南北約 16 km である。高松平野は香東川をはじめ本津川・春日川・新川等の河川活動により形成された河成堆積平野であり、沖積低地と低位段丘から構成されている。平坦と思われる平野であるが、主要な河川の本流から派生した複数の自然流路や旧河道、それらの埋没が進んだ低地帯、自然堤防をはじめとする微高地等の存在により比較的起伏に富んだ地形であったことが、微地形分析や最近の発掘調査の成果から判明している。

松ノ内遺跡が所在する高松市多肥上町は、高松平野の南部に位置し、現在ではほぼ平坦な地形ののどかな田園風景が広がり、規則的な地割である条里地割が明瞭に残っている。しかし、微地形分析によれば、現在の溜池である大池、長池、下池を繋ぐラインに流れていた旧河道が本遺跡の東側付近で分岐し、南西付近で再び合流して南西方向に延びていたと考えられる。つまり、本遺跡周辺の地形は埋没旧中洲である。

第２節　歴史的環境

松ノ内遺跡が所在する多肥上町周辺では、県道の建設や高等学校の新設、民間開発等により、大規模な発掘調査が実施されている。その結果として各時代にわたる遺跡が確認され、周辺地域の歴史を解明するのに必要な資料が蓄積されてきた。

【縄文時代】　縄文時代の遺構・遺物はほとんど確認されておらず、多肥松林遺跡、多肥宮尻遺跡の旧河道から出土した縄文晩期の土器が知られる程度である。

【弥生時代】　弥生時代前期には、多肥松林遺跡で溝、松林遺跡で集石遺構、汲仏遺跡と凹原遺跡で環濠や竪穴建物が検出された。

弥生時代中期には、日暮・松林遺跡や多肥松林遺跡で集落が広がり、多肥松林遺跡の旧河道から木製農具や祭祀道具等が出土した。松林遺跡では竪穴建物の他に噴礫が確認された。太田原高州遺跡では区画墓群が検出された。

弥生時代後期には、汲仏遺跡と凹原遺跡で竪穴建物、日暮・松林遺跡と多肥松林遺跡で多数の竪穴建物や灌漑水路跡が検出された。

【古墳時代】　多肥宮尻遺跡で中期から後期の竪穴建物が検出され、多肥北原遺跡や多肥北原西遺跡で後期から終末期にかけての竪穴建物が検出された。

【古代】　多肥廃寺が建立され、その北約 200 m に位置する多肥北原西遺跡では溝の中から鬼瓦等の古代瓦や多口瓶、鉄製品等が出土し、多肥廃寺建立に伴う諸施設の存在が想定される。平安時代前半には、多肥松林遺跡で灌漑水路や流路から斎串や人形、墨書土器などの祭祀道具が出土した。

高松平野のほぼ全域に南北線が東に約 9 ～ 11°傾く条里地割が分布しており、本遺跡周辺では弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地における学際的な調査が実施され、当地の土地利用の変遷や条里地割について重要な成果が得られている。本遺跡は高松平野の条里地割では香川郡二条 13 里 26 坪にあたると推定される。

【中世】 中世前半には、多肥松林遺跡で複数の掘立柱建物や耕作跡などから構成される屋敷跡があり、日暮・松林遺跡では 13 世紀初めの旧河道から瓦器椀が出土した。平成 30 年・令和元年に調査した松ノ内遺跡では、古代から中世にかけての溝と 13 ～ 14 世紀の建物跡が検出された。中世後半から近世にかけての遺跡は非常に少ない。

なお、本遺跡周辺の調査の詳細と刊行された報告書に関しては、高松市教育委員会が 2022 年に刊行した『平塚１号塚』の３～４頁を参照されたい。

1 松ノ内遺跡２　2 松ノ内遺跡　3 多肥北原西遺跡　4 多肥廃寺　5 多肥北原遺跡　6 多肥平塚遺跡(県道太田志度線道路改築)　7 多肥平塚遺跡(朝日町仏生山線整備)　8 多肥平塚遺跡Ⅱ(店舗新築)　9 平塚1号塚　10 お茶荒神　11 出口遺跡　12 松林遺跡　13 松林遺跡(第2次調査)　14 多肥松林遺跡(高校新設)　15 多肥松林遺跡(高松土木事務所新設)　16 多肥松林遺跡(県道太田志度線道路改築)　17 多肥松林遺跡(高松南警察署新設)　18 多肥松林遺跡(電器店)　19 多肥宮尻遺跡(衣料品販売店舗)　20 多肥宮尻遺跡(県道太田志度線道路改築)　21 多肥宮尻遺跡(宅地造成)　22 日暮・松林遺跡(都市計画道路)　23 日暮・松林遺跡(済生会)　24 日暮・松林遺跡(農道)　25 日暮・松林遺跡(フィットネスクラブ)　26 日暮・松林遺跡(共同住宅)　27 日暮・松林遺跡(済生会特養ホーム)　28 日暮・松林遺跡(事務所)　29 日暮・松林遺跡(共同住宅)　30 日暮・松林遺跡(フィットネス増築)　31 日暮・松林遺跡(店舗建設)　32 日暮・松林遺跡(店舗建設)

図２　　周辺の遺跡分布図

【松林遺跡】

１．高松市教育委員会 1996『松林遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 31 集

２．高松市教育委員会 2004『松林遺跡（第 2 次調査）』高松市埋蔵文化財調査報告第 77 集

【多肥松林遺跡】

３．香川県教育委員会 1999『多肥松林遺跡』高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 1 冊

４．香川県教育委員会 2016『多肥松林遺跡』高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

５．香川県教育委員会 2017『県道太田志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』

６．香川県教育委員会 2005『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 15 年度』

７．高松市教育員会会 2006『多肥松林遺跡（電器店）』高松市埋蔵文化財調査報告第 91 集

【日暮・松林遺跡】

８．高松市教育委員会 1997『日暮・松林遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 34 集

９．高松市教育委員会 2003『日暮・松林遺跡（済生会）』高松市埋蔵文化財調査報告第 66 集

10. 高松市教育委員会 2005『高松市内遺跡発掘調査概報』高松市埋蔵文化財調査報告第 72 集

11. 高松市教育委員会 2005『日暮・松林遺跡（フィットネスクラブ）』高松市埋蔵文化財調査報告第 87 集

12. 高松市教育委員会 2005『日暮・松林遺跡（済生会特養ホーム）』高松市埋蔵文化財調査報告第 86 集

13. 高松市教育委員会 2007『高松市内遺跡発掘調査概報』高松市埋蔵文化財調査報告第 101 集

14. 高松市教育委員会 2007『日暮・松林遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 105 集

15. 香川県教育委員会 2008『香川県文化財年報　平成 18 年度』

16. 高松市教育委員会 2016『日暮・松林遺跡－第 10 次調査－』高松市埋蔵文化財調査報告第 173 集

17. 高松市教育委員会 2018『日暮・松林遺跡（第 11 次調査）』高松市埋蔵文化財調査報告第 194 集

【多肥宮尻遺跡】

18. 香川県教育委員会 2018『多肥宮尻遺跡』県道太田志度線道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

19. 高松市教育委員会 2004『多肥宮尻遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 78 集

20. 高松市教育委員会 2006『多肥宮尻遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 90 集

【多肥平塚遺跡】

21. 香川県教育委員会 2013『多肥平塚遺跡』県道太田志度線道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

22. 高松市教育委員会 2017『多肥平塚遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 180 集

23. 高松市教育委員会 2020『多肥平塚遺跡Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告第 226 集

【松ノ内遺跡】

24. 高松市教育委員会 2020『松ノ内遺跡』高松市埋蔵文化財報告第 208 集

【多肥北原遺跡】

25. 香川県教育委員会 2012『多肥北原遺跡』県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

【多肥北原西遺跡】

26. 香川県教育委員会 2015『多肥北原西遺跡』県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の方法

調査の方法

調査区は調査を実施した順番で、Ａ１・２、Ｂ１・２・３、Ｃ１・２、Ｄ１・２、Ｅ１、Ｆ１・２調査区の 12 調査区を設定した。Ａ２調査区とＢ１調査区は隣接する調査区であるが、調査工程の関係で期間が異なって調査したため別の調査区名を付した。Ｃ１・２調査区も同様である。ただし、報告書作成において遺構が隣接する調査区に延びる場合があるため、異なる調査区名であるが、隣接する調査区は一緒に報告する。具体的にはＡ２・Ｂ１調査区とＣ１・２調査区である。また、Ｆ１・２調査区は調査の要因である工事が異なるために別の調査区名を付けたが、近接しており同一の遺構が検出されたことから、一緒に報告する。

遺構番号は基本的には調査区ごとに付けることとし、遺構の種類別に検出した順番で１から番号を与える。ただし、Ｂ１・２調査区とＣ１・２調査区とＦ１・２調査区は通し番号を付ける。本報告書の遺構番号は最初に調査区、次に凡例で表記した遺構記号、最後に番号を付けて表記する。例えば、Ｂ１調査区の掘立柱建物０１はＢ１－ＳＢ０１と表記する。遺構の種類は、現地での調査所見をもとに性格を判断した。竪穴建物に付属する支柱穴は竪穴建物内で１から番号を与え、掘立柱建物を構成する柱穴の番号は調査時に付けた番号とする。

記録作成

遺構の平面図と断面図は、世界測地系第Ⅳ系・４級基準点である基準点と水準点を用いて手測りで記録を作成した。

写真撮影

遺跡の空中写真はドローンによる写真撮影を実施し、個々の遺構の写真撮影はデジタルカメラでの記録とし、コンパクトカメラとデジタル一眼カメラを用い、主要な写真は紙に印刷したうえで保管するハイブリッド保存の手法を採用した。

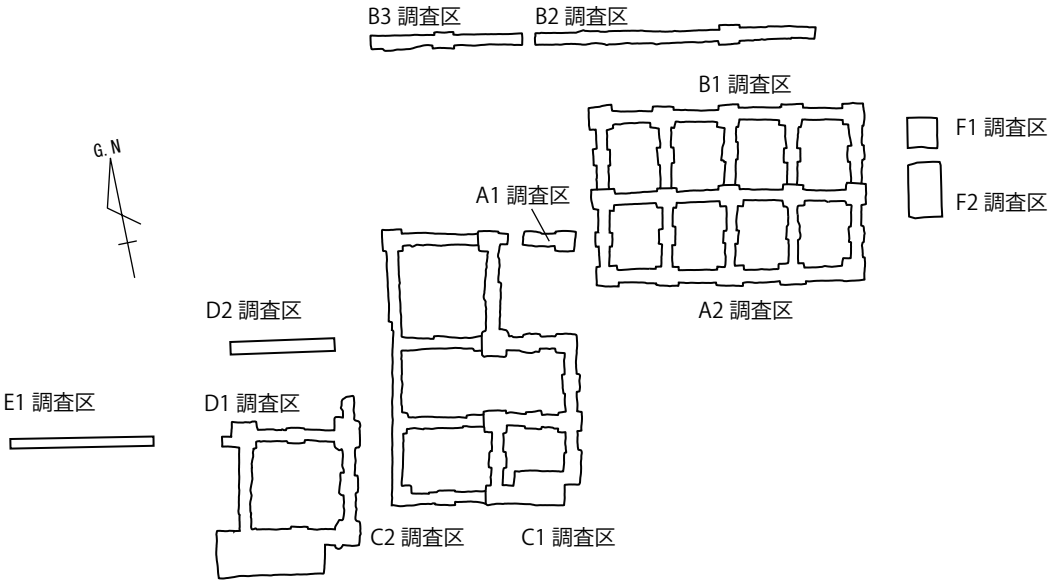


図３　　調査区の設定

第２節　遺構・遺物

１．A1 調査区（第４図）

Ａ１調査区はＡ２・Ｂ１調査区の西側に位置する。平面形は東側が拡張する長方形を呈し、その規模は北辺約 8.20 m、西辺約 2.20 m、東辺約 3.10 mである。調査区全体の土層は、上層から現水田耕作土と床土（第１層）、近世の水田耕作土（第２層）、その直下が砂礫層（第３層）となっている。この砂礫層が地山であり、ほぼ平坦であり、その標高は約 23.55 mである。この砂礫層は後述するＣ１・２調査区において検出した砂礫層と同一である。

調査区中央に近代の攪乱を認めるが、遺構は全く検出できず、遺物の出土もなかった。

２．A2・B1 調査区（第４図）

Ａ２･Ｂ１調査区はＡ１調査区の東側で、Ｂ２調査区の南側に位置する。範囲は南北約 29.00 m、東西約 43.00 mであるが、調査を実施したのは建物の基礎部分であり、南北方向に５本と東西方向に３本のトレンチ状の調査区である。東西方向の中央トレンチを含む南側がＡ２調査区、北側がＢ１調査区である。調査区の基本土層は上層から現水田耕作土と床土（第１層）、近世の水田耕作土（第２層）、若干色調の異なる２層のにぶい黄褐シルト質極細砂（第３・４層）、にぶい黄褐＋灰黄褐シルト（第５層）、地山である黄橙シルト（第６層）である。遺構検出面は調査区東側で地山直上に堆積する第５層上面、西側では第６層上面であり、その標高は 23.50 ～ 23.60 mである。調査区西側では第２層直下が第６層となっているが、東側になるにしたがって緩やかに第６層が下がっており、第３～５層が堆積している。

遺構は調査区のほぼ全域において検出し、竪穴建物と掘立柱建物・ピットは北側のＢ１調査区に集中している。遺構ではないが調査区中央から西部にかけて噴礫が 11 カ所確認できた。

（１）竪穴建物

B1-SI01（第５図）

Ｂ１調査区の北東側において検出した竪穴建物である。東側は調査区外に延び、検出できたのは全体の１/３弱である。平面形状は方形を呈する。主軸方位はＮ－４°－Ｗである。規模は、南北方向の長さは 3.56m、東西方向の検出できた長さは 1.38 m、深さ 0.08 mを測る。

埋土は黒褐＋灰黄褐シルトの単一層である。遺物は土師器甕・須恵器甕の小片が出土したが、図化できるものはない。

貼床はにぶい黄褐＋黒褐シルトの単一層である。最深部で約 0.10 mの深さである。

周壁溝は南壁沿を除き検出され、幅は約 0.16 m、深さ 0.07 mを測る。埋土は黒褐＋褐灰シルトの単一層である。

支柱穴は２基確認する。Ｐ１は竪穴建物北西隅で検出した不整な円形を呈し、直径 0.33 ～ 0.40 m、深さ 0.10 mを測る。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロックを若干含む褐＋灰黄褐シルト、掘方が地山ブロックを含む褐シルトである。Ｐ２は竪穴建物南西隅で検出したが、柱穴の一部の検出であり、平面形・規模は不明である。

カマドは検出されなかった。東側の調査区外にあると思われる。

時期は、出土遺物から古代と判断できる。

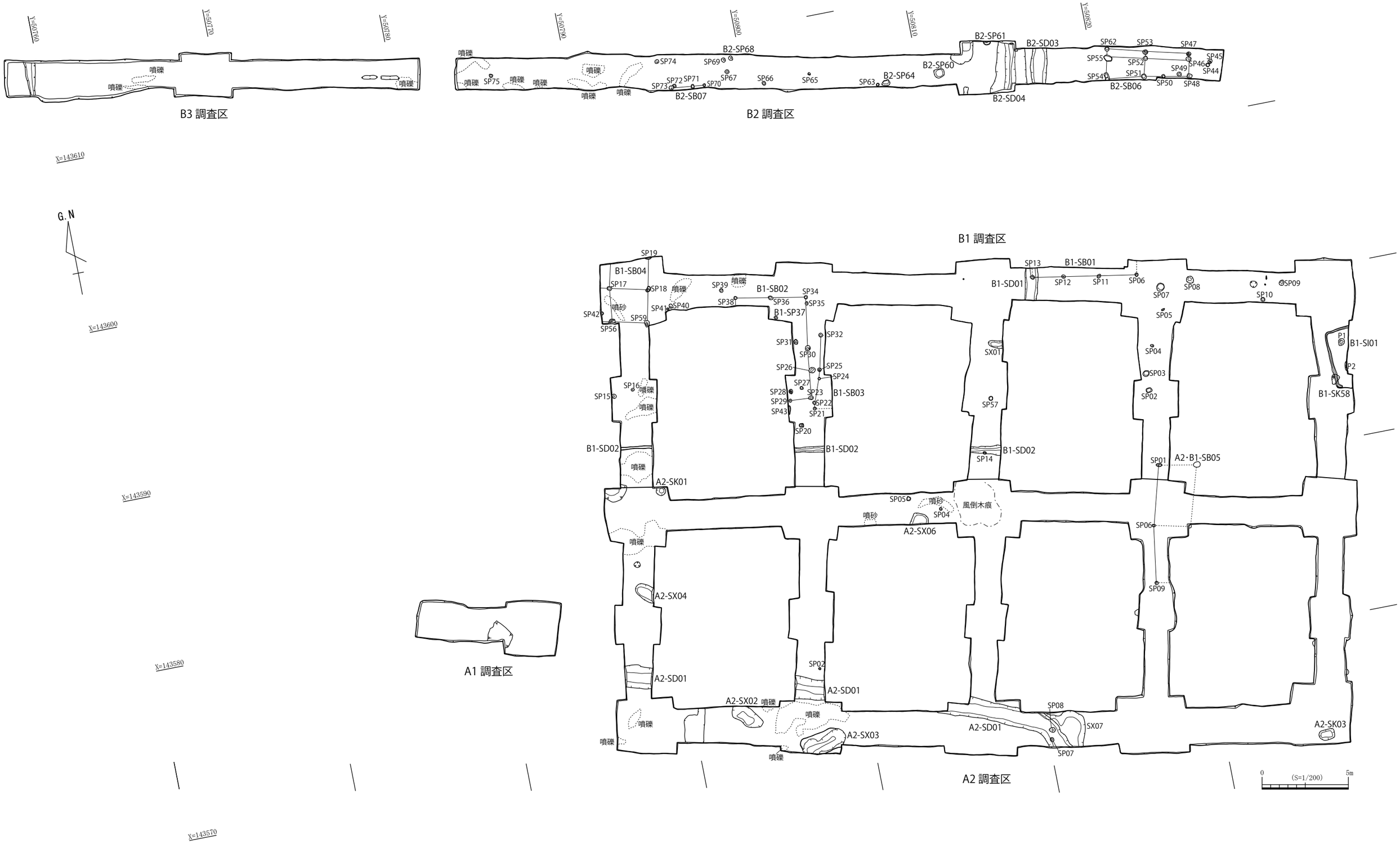


図４　　A1・2、B1 ～ 3 調査区 平面図

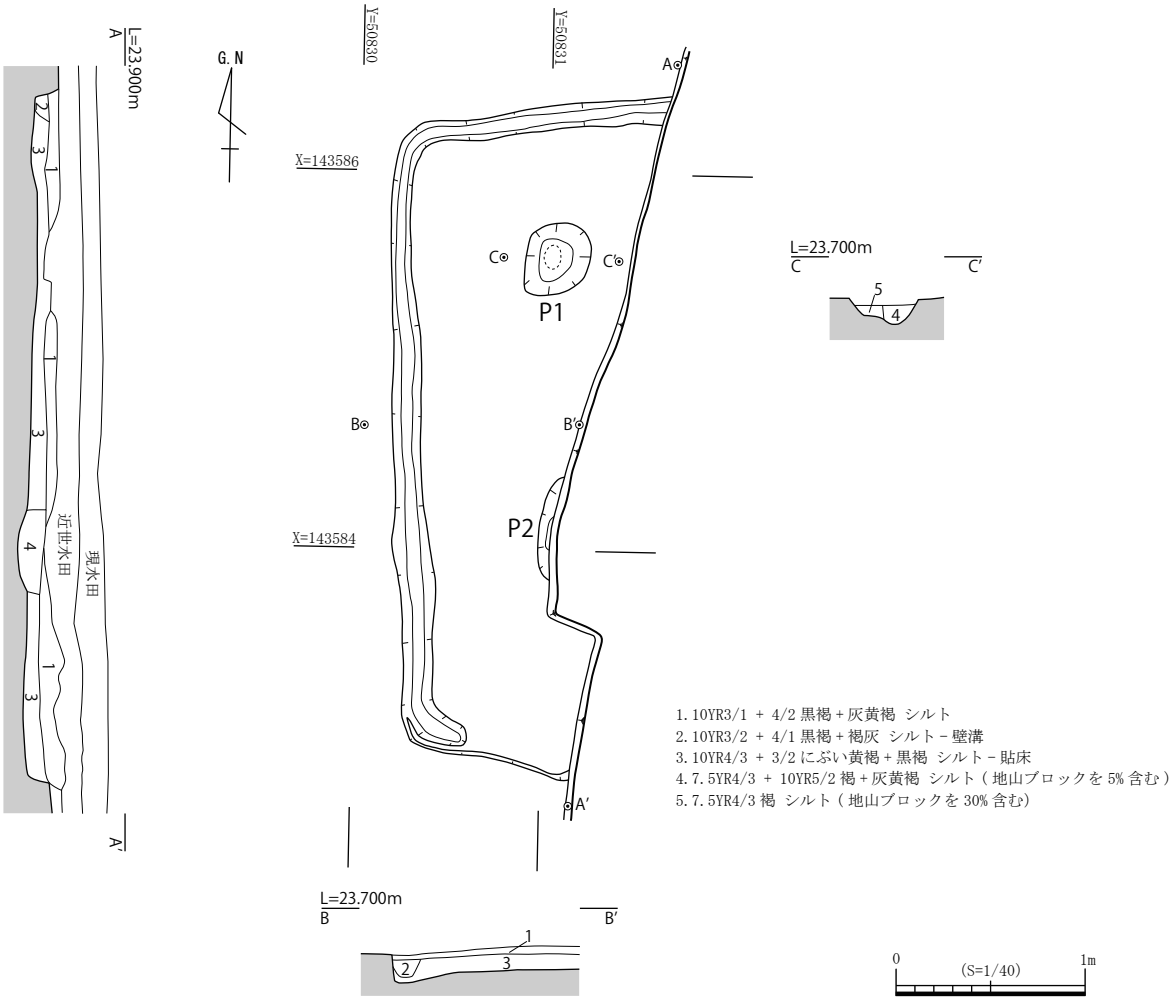


図５　　B1-SI01 平・断面図

（２）掘立柱建物

B1-SB01（第６図）

Ｂ１調査区の北側中央やや東寄りにおいて検出した掘立柱建物である。南側側柱のみの検出であり、北側の調査区域外に展開すると思われる。全長は 6.00 ｍを測り、３間である。芯芯間距離は 1.80 ～ 2.20 ｍである。方位はＮ－ 80°－Ｗである。柱穴はＳＰ 06・11 ～ 13 の４基である。ＳＰ 06 は円形を呈し、直径 0.20 × 0.19 ｍ、深さ 0.17 ｍを測る。ＳＰ 11 は楕円形を呈し、直径 0.26 × 0.20 ｍ、深さ 0.15 ｍを測る。ＳＰ 12 は円形を呈し、直径 0.21 ｍ、深さ 0.14 ｍを測る。ＳＰ 13 は楕円形を呈し、直径 0.26 × 0.20 ｍ、深さ 0.08 ｍを測り、Ｂ１－ＳＤ 01 に切られる。すべての柱穴の断面はＵ字形であり、ＳＰ 06・11・12 の埋土は炭化材を含む褐灰シルト、ＳＰ 13 はにぶい黄褐シルトである。

遺物はＳＰ 11 から土師器甕（１）､黒色土器Ａ類椀（２）が出土した。図示した遺物のほかに、ＳＰ 06 から須恵器杯蓋、ＳＰ 12 から須恵器杯が出土した。

１は口縁部破片であり、内外面に赤色顔料が部分的に残存する。２は若干内湾気味の体部から口縁部に至る。外面に重ね焼き痕が残る。

時期は、出土遺物から中世前半と判断できる。

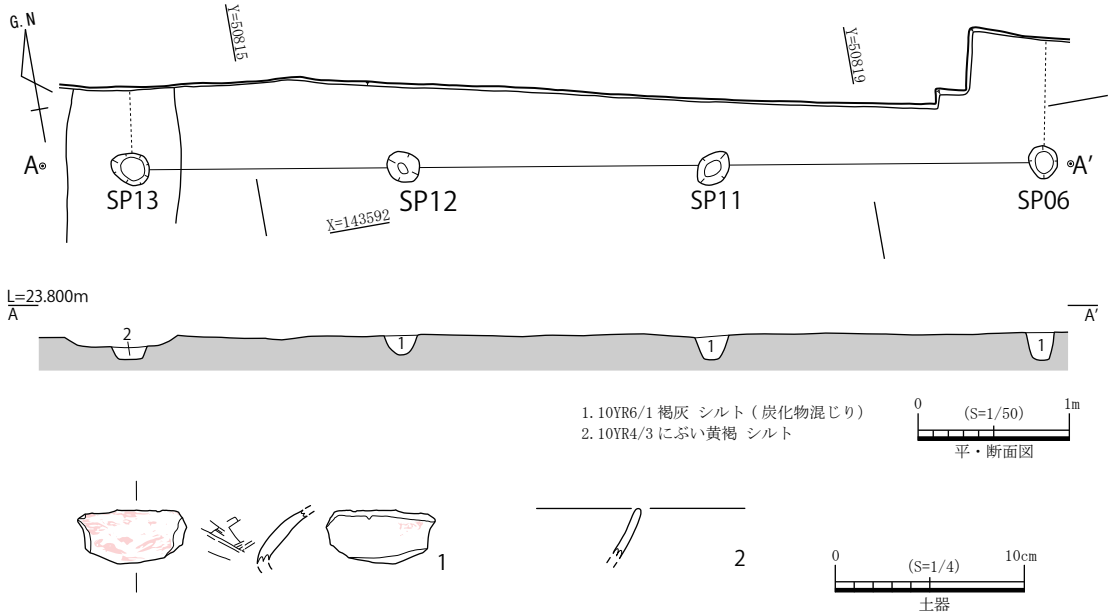


図６　B1-SB01 平・断面図及び出土遺物実測図

B1-SB02（第７図）

Ｂ１調査区の北西側において検出した掘立柱建物であり、北側側柱と東側側柱、南側側柱の一部を検出した。梁行全長は 4.05 m、桁行全長 5.85 mを測り、２×２間の建物である。方位はＮ－８°－Ｅである。北側側柱の芯芯間距離は約 2.00 m、東側側柱は約 3.00 mである。柱穴はＳＰ 23・29・30・34・36・38 の６基である。ＳＰ 23 は楕円形を呈し、直径 0.28 × 0.20 m、深さ 0.35 mを測る。ＳＰ 29 は円形を呈し、直径 0.17 m、深さ 0.21 mを測る。ＳＰ 30 は円形を呈し、直径 0.30 m、深さ 0.42 mを測る。ＳＰ 34 は円形を呈し、直径 0.18 m、深さ 0.22 mを測る。ＳＰ 36 は楕円形を呈し、直径 0.30 × 0.21 m、深さ 0.18 mを測る。ＳＰ 38 は不整な円形を呈し、直径 0.19 m、深さ 0.30 mを測る。すべての柱穴の断面はＵ字形であり、ＳＰ 30 は僅かな段を有する。埋土はすべて褐灰シルトの単一層である。

遺物はＳＰ 23 から土師質土器足釜の脚部（３）が出土した。図示した遺物のほかに、ＳＰ 29 から土師質土器片、ＳＰ 30 から土師質土器小皿・鍋、粘土塊、ＳＰ 38 から土師質土器杯が出土した。

時期は、出土遺物から中世前半と考えられ、主軸方位がＢ１－ＳＢ 01 とほぼ同じであり、同時期のものと考えられる。

B1-SB03（第８図）

Ｂ１調査区の北西側において検出した掘立柱建物であり、Ｂ１－ＳＢ 02 の東側に隣接する。西側側柱のみの検出であり、東側の調査区域外に展開すると思われる。全長は 4.25 mを測り、２間である。方位はＮ－ 16°－Ｅである。芯芯間距離は約 2.00 mである。柱穴はＳＰ 21・22・24・25・32 の５基であり、ＳＰ 21・22 とＳＰ 24・25 は共に近接しており、建物の建て替えあるいは拡張の可能性がある。ＳＰ 21 は円形を呈し、直径 0.19 m、深さ 0.08 mを測る。ＳＰ 22 は円形を呈し、 直径 0.21 × 0.18 m、深さ 0.17 mを測る。ＳＰ 24 は円形を呈し、直径 0.15 m、深さ 0.08 mを測る。ＳＰ 25 は円形を呈し、直径 0.21 m、深さ 0.30 mを測る。ＳＰ 32 は円形を呈し、直径 0.22 m、深さ 0.15 mを測る。断面形状はＵ字形であり、ＳＰ 25 は僅かな段を有する。ＳＰ 21・22・24・25 の埋土は褐灰シルト、ＳＰ 32 は褐灰シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。柱穴の規模や埋土は他の掘立柱建物とほぼ同

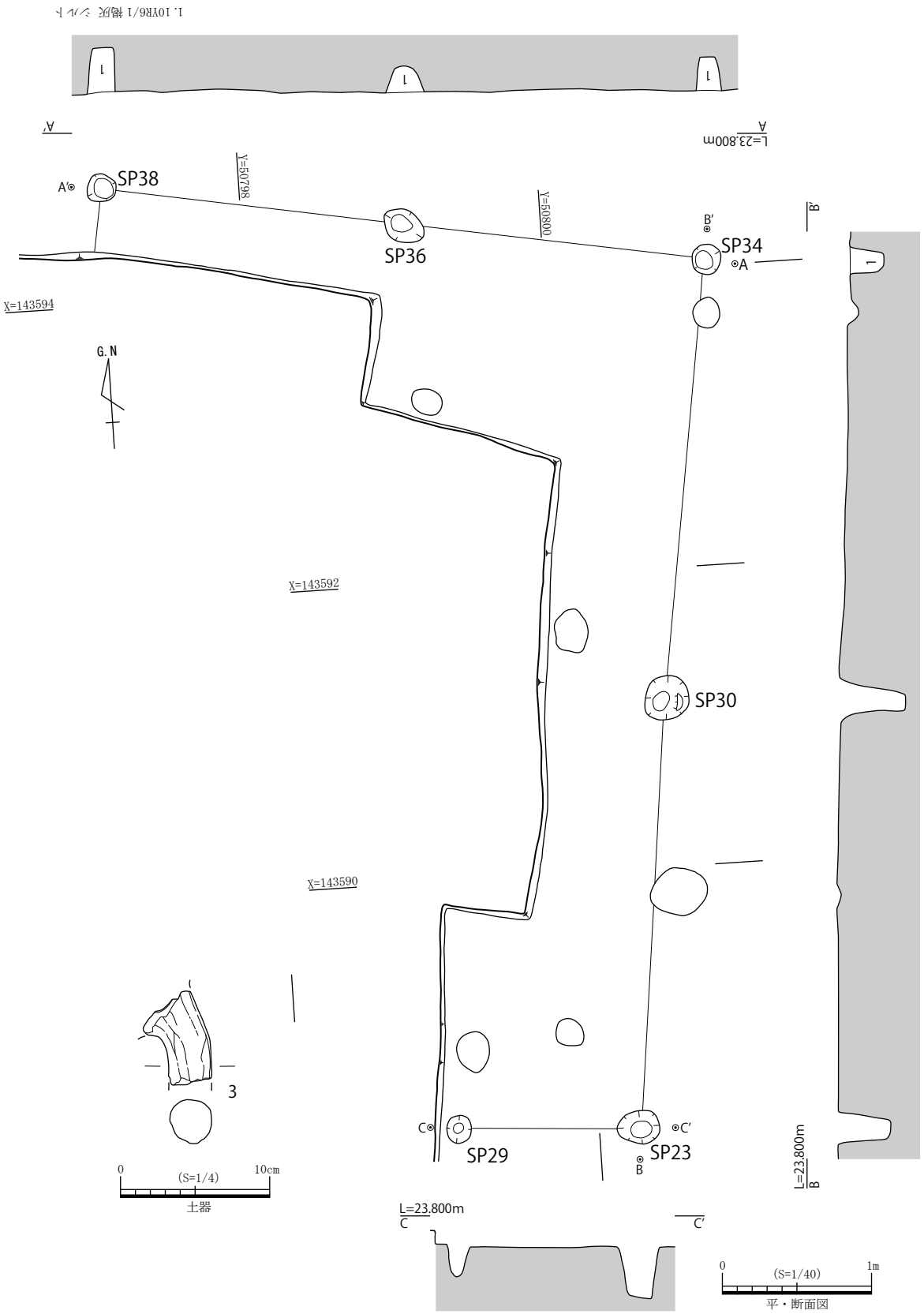


図７　　B1-SB02 平・断面図及び出土遺物実測図

一であるが、掘立柱建物で主軸方位が東に 16°振っているのは本遺構のみであり、若干の時間差が考えられる。

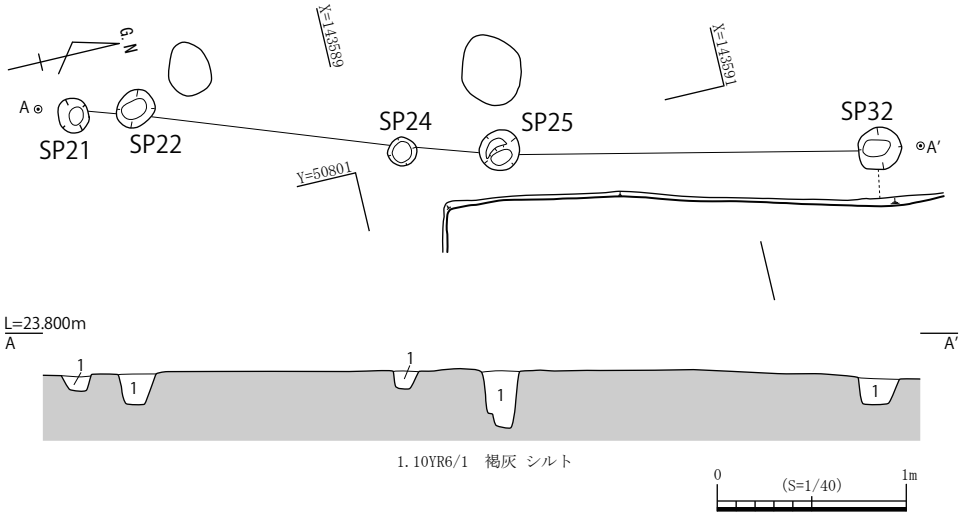


図 8　　B1-SB03 平・断面図

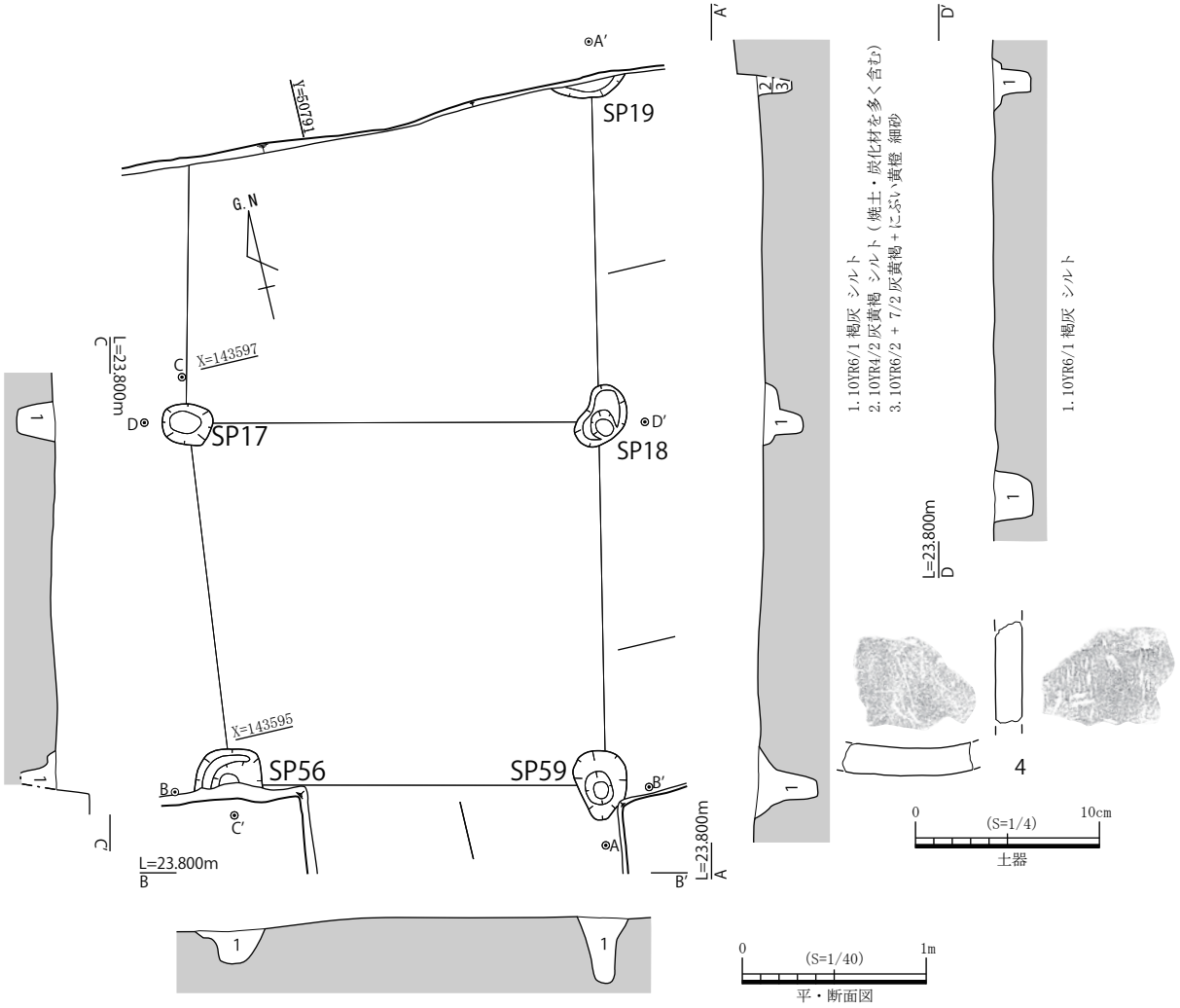


図 9　　B1-SB04 平・断面図及び出土遺物実測図

B1-SB04（第９図）

Ｂ１調査区の北西隅において検出した総柱の掘立柱建物であり、東側側柱・南側側柱の一部を検出した。北側と西側の調査区域外に展開すると思われる。東側側柱は２間以上であり、検出した長さは約 3.85 m、芯芯間距離は 2.00 m を測る。南側側柱は１間以上であり、検出した長さは約 2.00 m を測る。東側側柱の方位はＮ－ 12°－Ｅである。検出した柱穴はＳＰ 17 ～ 19・56・59 の５基であり、ＳＰ 19・56 は調査区外に延びる。ＳＰ 17 は不整な円形を呈し、直径 0.27 × 0.22 m、深さ 0.21 m を測る。ＳＰ 18 は不整な楕円形を呈し、直径 0.35 × 0.20 m、深さ 0.20 m を測る。ＳＰ 19 は円形を呈し、直径 0.40 m 以上、深さ 0.38 m を測る。ＳＰ 56 は隅丸方形を呈し、一辺 0.36 m、深さ 0.19 m を測る。ＳＰ 59 は不整な楕円形を呈し、直径 0.38 × 0.29 m、深さ 0.33 m を測る。断面形状はＵ字形を呈し、ＳＰ 18・56・59 は段を有する。ＳＰ 17・18・56・59 の埋土は褐灰シルト、ＳＰ 19 は上層が焼土・炭化材を多く含む灰黄褐シルト、下層が灰黄褐＋にぶい黄橙細砂である。

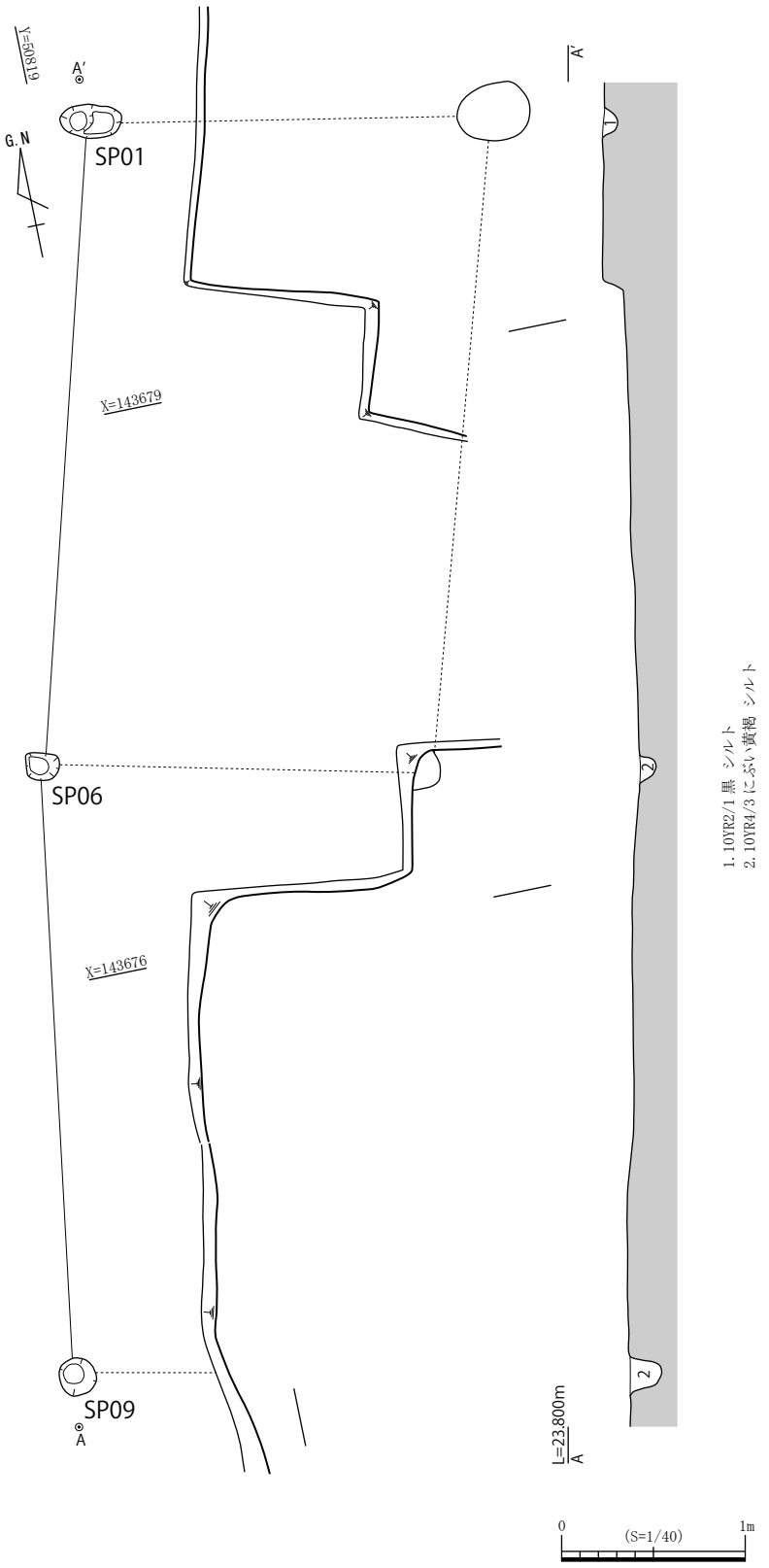


図 10　A2・B1-SB05 平・断面図

遺物はＳＰ 56 から平瓦（４）が出土した。図示した遺物のほかに、ＳＰ 19 から粘土塊、ＳＰ 56 から須恵器杯、ＳＰ 59 から土師器片が出土した。

４は凹面にナデ、凸面に平行タタキとナデが施される。

時期は、主軸方位や埋土が他の掘立柱建物とほぼ同様であることから、中世前半と考えられる。

A2・B1-SB05（第10図）

Ａ２・Ｂ１調査区の東側中央において検出した総柱の掘立柱建物であり、Ａ２－ＳＰ06・09とＢ１－ＳＰ01の３基から成る西側側柱のみの検出であるが、Ａ２－ＳＰ06とＢ１－ＳＰ01の東側の調査区壁面と調査区外に２基の柱穴を確認したことから東側に展開する総柱建物と考える。西側側柱は２間であり、全長は約6.80 m、芯芯間距離は3.30 mと3.50 mを測る。方位はＮ－12°－Ｅである。東側で確認した柱穴との距離は約2.25 mである。Ａ２－ＳＰ06・09の平面形が円形で、規模は直径0.20 m、深さ0.10 mと0.17 mである。断面形状はＵ字形を呈し、埋土はにぶい黄褐シルトである。Ｂ１－ＳＰ01は楕円形を呈し、規模は直径0.34 × 0.17 m、深さ0.07 mである。断面形状は底面東側に段を有し、埋土は黒シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、埋土が他の掘立柱建物とほぼ同一であることから中世前半である可能性が高い。

（３）溝

A2-SD01（第11・12図）

Ａ２調査区の南端中央から南西隅にかけて検出した東西方向に延びる溝である。Ｃ１調査区の北東隅で検出したＣ１－ＳＤ01と同一遺構であるが、調査区が異なることと未検出の距離が長いことから別にして報告する。方向はＮ－75°－Ｗであるが、東端は南方向に緩やかに曲がり、Ａ２調査区のＳＰ07・08、ＳＸ07を切る。検出できた長さは約27.00 m、幅は1.15 ～ 1.35 m、深さは0.20 ～ 0.38 mを測る。底面の標高は東から西に向かって僅かに低くなっており、その比高差は10㎝である。断面形状はＵ字形を呈する。

埋土の観察は４ヶ所で行い、土層図を作成し、西から①②③④と仮称する。①は６層に分層でき、上層は褐灰シルト、中層は灰黄褐＋にぶい黄褐細砂混じりシルトと灰褐シルト＋灰黄褐細砂、下層は灰黄褐細砂＋にぶい黄褐シルトと褐灰細～中砂である。②は５層に分層でき、上層は灰黄褐＋にぶい黄褐細砂混じりシルトと褐灰シルト、中層は灰黄褐＋にぶい黄褐細砂混じりシルト、下層は灰黄褐細砂＋にぶい黄褐シルトと地山粒子を含むにぶい黄褐細砂混じりシルトである。③・④は２層に分層でき、上層は褐灰＋暗褐細砂混じりシルト、下層は暗褐細砂混じりシルトである。溝の東側と西側で埋土の堆積状態が大きく異なっている。

遺物は、土師器杯（５～７）、同甕（８）、土師質土器鍋（９）、同足釜（10 ～ 17）、同羽釜（18）が出土した。図化した以外に須恵器杯、同杯蓋、同甕、土師質土器鍋、同小皿がある。

５は内面に僅かな凹凸を有し、底面の調整は回転ヘラ切り後にナデが施される。６は口縁部がやや肥厚し、内面に僅かな凹凸を有する。底面は回転ナデが施される。７は直線的な体部である。

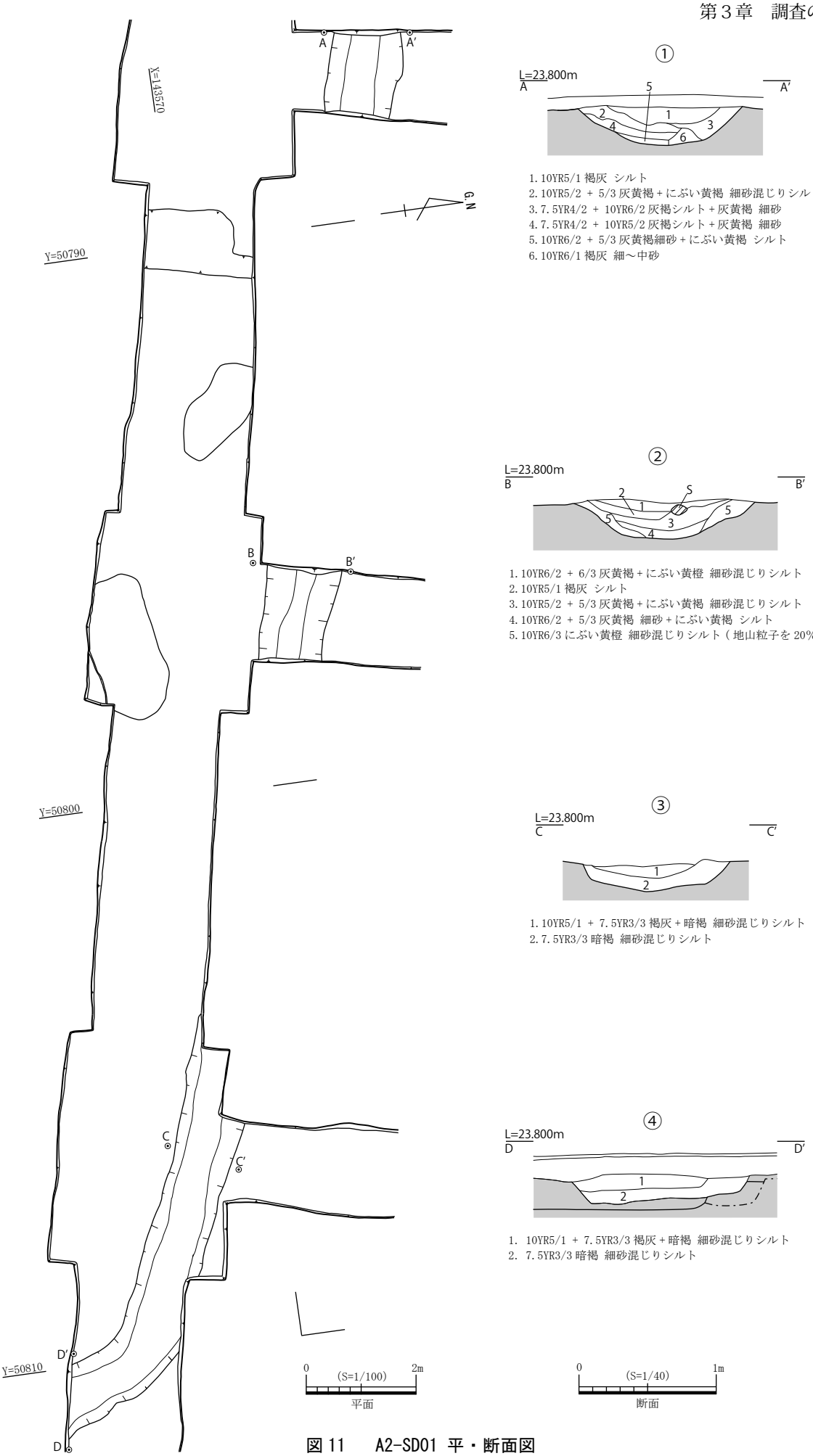
８は口縁端部が上方に拡張し、外面は熱を受けている。

９は口縁部が内湾し、体部外面はハケ・指オサエが施される。鍋ＢⅢ形式である。

10 ～ 16は内傾する口縁部の下に短い鰐が付き、鍔部下位に指オサエが施される。11・13 ～ 16は指オサエに爪圧痕が残る。12・15は体部外面にハケが施され、16は鍔先端部にハケが施される。17は脚部である。

18は口縁部と鍔部長がほぼ同じで、両端部に明確な平坦面をもつ。羽釜Ｃ１－１型式である。

時期は、出土遺物から13世紀末葉～ 14世紀前葉と判断できる。



①

1. 10YR5/1 褐灰 シルト
2. 10YR5/2 + 5/3 灰黄褐＋にぶい黄褐 細砂混じりシルト
3. 7.5YR4/2 + 10YR6/2 灰褐シルト＋灰黄褐 細砂
4. 7.5YR4/2 + 10YR5/2 灰褐シルト＋灰黄褐 細砂
5. 10YR6/2 + 5/3 灰黄褐細砂＋にぶい黄褐 シルト
6. 10YR6/1 褐灰 細～中砂

②

1. 10YR6/2 + 6/3 灰黄褐＋にぶい黄橙 細砂混じりシルト
2. 10YR5/1 褐灰 シルト
3. 10YR5/2 + 5/3 灰黄褐＋にぶい黄褐 細砂混じりシルト
4. 10YR6/2 + 5/3 灰黄褐 細砂＋にぶい黄褐 シルト
5. 10YR6/3 にぶい黄橙 細砂混じりシルト（地山粒子を 20%含む）

③

1. 10YR5/1 + 7.5YR3/3 褐灰＋暗褐 細砂混じりシルト
2. 7.5YR3/3 暗褐 細砂混じりシルト

④

1. 10YR5/1 + 7.5YR3/3 褐灰＋暗褐 細砂混じりシルト
2. 7.5YR3/3 暗褐 細砂混じりシルト

図 11　A2-SD01 平・断面図

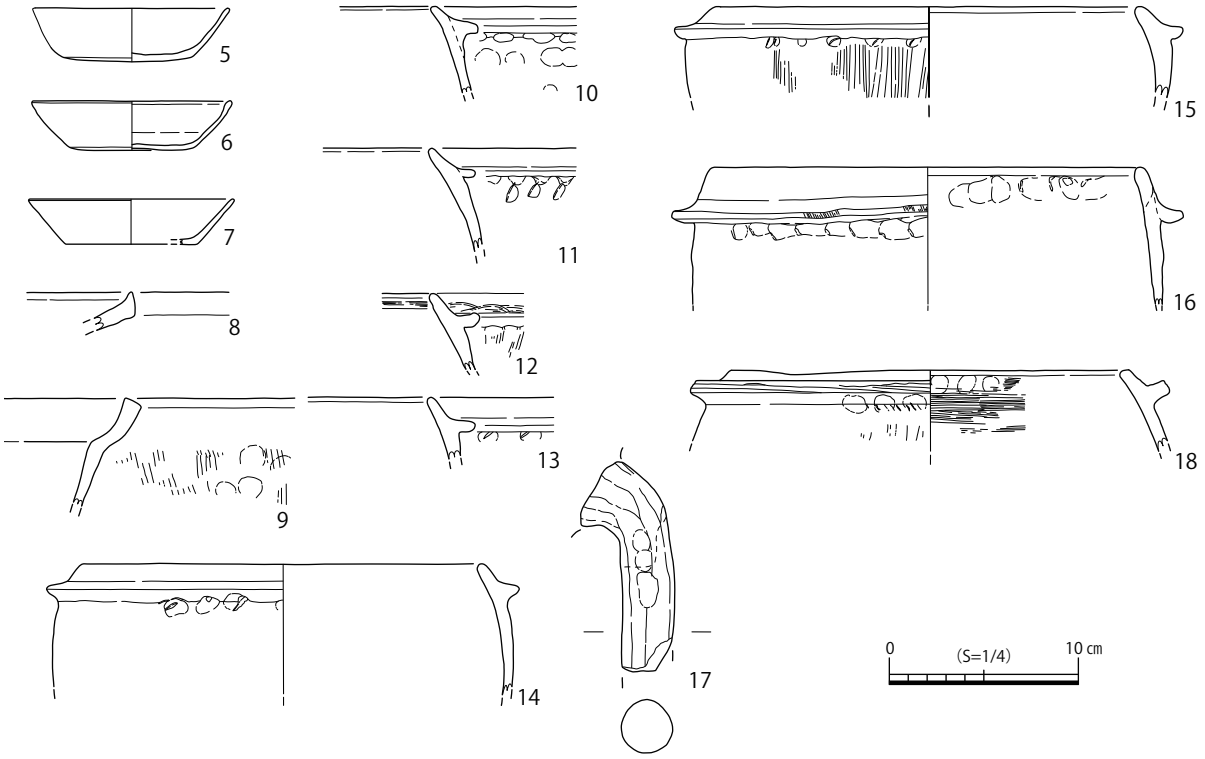


図 12　A2-SD01 出土遺物実測図

B1-SD01（第 13 図）

Ｂ１調査区北端中央において検出した南北方向に延びる溝である。方向はＮ－ 15°－Ｅである。北方向に延伸するとＢ２調査区のＢ２－ＳＤ 03 とＢ２－ＳＤ 04 の２本の溝があるが、規模から考えるとＢ２－ＳＤ 03 が妥当であろう。また、南方向に延伸するとＢ１－ＳＤ 02 があり、同一遺構の可能性が高い。しかし、未検出の範囲が広いので単独の遺構として検出した部分のみ報告する。検出できた長さは 1.87 m、幅は 0.67 m、深さ 0.16 mを測る。断面形状はＵ字形を呈する。

埋土は上層が黒褐＋暗褐シルト、下層が地山を 20％含む暗褐シルトの２層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

B1-SD02（第 14 図）

Ｂ１調査区の中央から西側にかけて検出した東西方向に延びる溝である。方向はＮ－ 80°－Ｗであり、僅かに蛇行する。調査区東側では検出されない要因としては、後世の削平により消滅した可能性もあるが、北方向に直角に屈曲しＢ１－ＳＤ 01 となる可能性が高いと考えられる。検出できた長さは約 22.00 m、幅は 0.12 ～ 0.60 m、深さ 0.01 ～ 0.10 mを測る。底面の標高は西から東に向かって僅かに低くなっており、その比高差は７㎝である。西側になるにしたがって幅が狭くなることから、溝の西側は後世の削平を大きく受けている。断面形状はＵ字形を呈する。

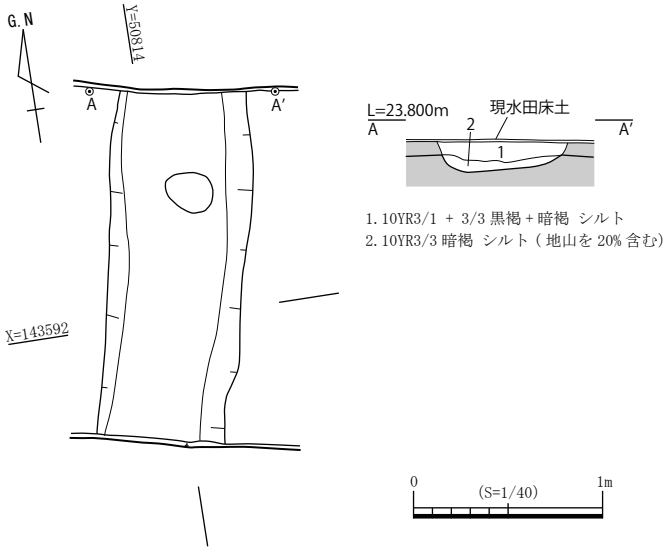


図 13　B1-SD01 平・断面図

埋土は２層に分層でき、上層が灰黄褐＋にぶい黄褐シルト、下層が灰黄褐＋にぶい黄褐シルトと褐灰細砂であり、下層は底面直上に薄く堆積する。

遺物は土師器杯（19 ～ 22）、須恵器高杯（23）、土師質土器足釜（24）が出土した。

19 は口径 7.2cm を測り、直線的な体部である。20 は口径 10.6cm で、体部内外面に僅かな凹凸を有する。21 は口径 11.0cm で、体部は緩やかな傾斜で立ち上がる。口縁部がやや肥厚し、内面にロクロによる凹凸が顕著に残る。底面は回転ヘラ切り後に板目痕が残る。22 は口径 11.2cm を測り、器高は少し低い。体部の立ち上がりはやや急である。

23 は脚部であり、沈線が２条廻る。

24 は内傾する口縁部の下に短い鰐が付き、鍔部下位に指オサエが施される。

時期は、出土遺物から 13 世紀末葉～ 14 世紀前葉と判断できる。

図 14　B1-SD02 平・断面図及び出土遺物実測図

（４）土坑

A2-SK01（第 15 図）

Ａ２調査区の西端中央において検出した土坑である。平面形は円形である。直径は 0.55 m、深さは 0.26 mを測る。埋土は灰黄褐シルトの単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

A2-SK03（第 15 図）

Ａ２調査区の南東隅において検出した土坑である。平面形は楕円形であるが、東側はやや角張る。規模は長軸 0.91 m、短軸 0.60 m、深さ 0.24 mを測る。埋土は３層に分層でき、上層中央にある１層は炭化材粒を含む。

遺物は土師質土器片のみの出土であり、詳細な時期は不明である。

B1-SK58（第 15 図）

Ｂ１調査区の北東隅において検出した土坑であり、Ｂ１－ＳＩ０１に切られる。平面形は不整な楕円形である。規模は長軸 0.57 m、短軸 0.45 m、深さ 0.32 mを測る。底面は北側に片寄っており、掘り込みは非常に僅かな段を有する。

遺物が出土していないが、竪穴建物との切り合い関係から古代以前と考えられる。

（５）ピット

B1-SP37（第 16 図）

Ｂ１調査区の北西隅において検出したピットである。Ｂ２－ＳＢ 02 を構成するＳＰ 36 の南側に位置しており、Ｂ１－ＳＢ 02 の柱穴である可能性も考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は直径 0.21 × 0.17 m、深さ 0.27 mである。埋土は褐灰シルトの単一層である。

遺物は土師質土器鍋（25）が出土した。25 はほぼ水平に延びる口縁部である。図示した遺物の他に、土師質土器杯片と同足釜片が出土した。

出土土器が小片のため詳細な時期は不明であるが、中世と考えられる。

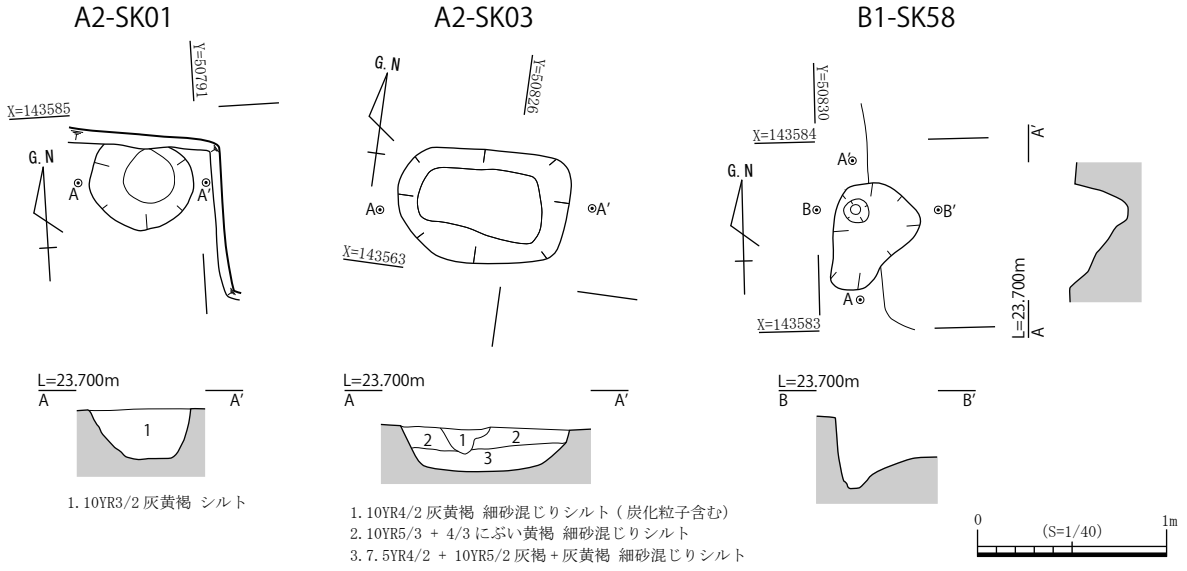


図 15　A2-SK01・03、B1-SK58 平・断面図

（６）性格不明遺構

A2-SX02（第 17 図）

Ａ２調査区の南西側において検出した性格不明遺構である。平面形は不整な楕円形であり、一部は調査区外にかかる。規模は長軸 2.00 m、短軸 0.90 m、深さ 0.16 mを測る。北西側と南東側の掘り込みは非常に緩やかである。埋土は暗褐シルトの単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

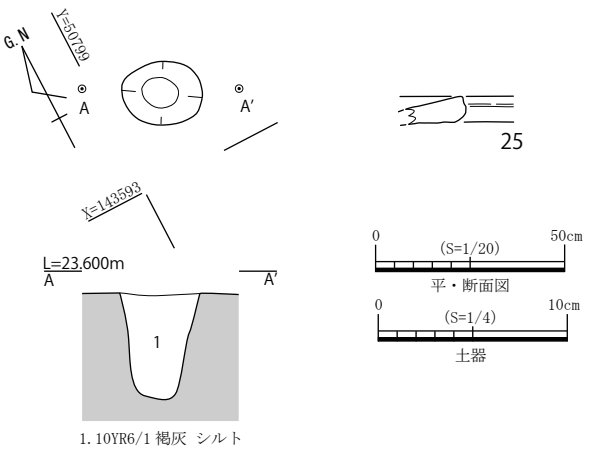


図 16　B1-SP37 平・断面図及び出土遺物実測図

A2-SX03（第 17 図）

Ａ２調査区の南西側において検出した性格不明遺構である。平面形は不整な楕円形であり、一部は調査区外にかかる。規模は長軸 2.63 m、短軸 1.22 m、最深部の深さ 0.30 mを測り、主軸方位はＮ－ 77°－Ｅである。掘り込みは非常に緩やかであり、北側と南側には非常に浅い段を有する。底面は細長く、東側に最深部がある。埋土は暗褐シルトの単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

A2-SX04（第 18 図）

Ａ２調査区の南西側において検出した性格不明遺構である。平面形は楕円形であり、東側は調査区外にかかる。検出できた長軸は 1.03 m、短軸 0.85 m、深さ 0.34 mを測り、主軸方位はＮ－ 50°－Ｗである。底面は東側に深くなる。埋土は２層に分層でき、上層は灰黄褐細砂混じりシルト、下層は黒褐中砂混じりシルトである。上層が厚く堆積する。

遺物は土師質土器足釜（26）、同鍋（27）が出土し、図示した遺物の他に須恵器甕と土師質土

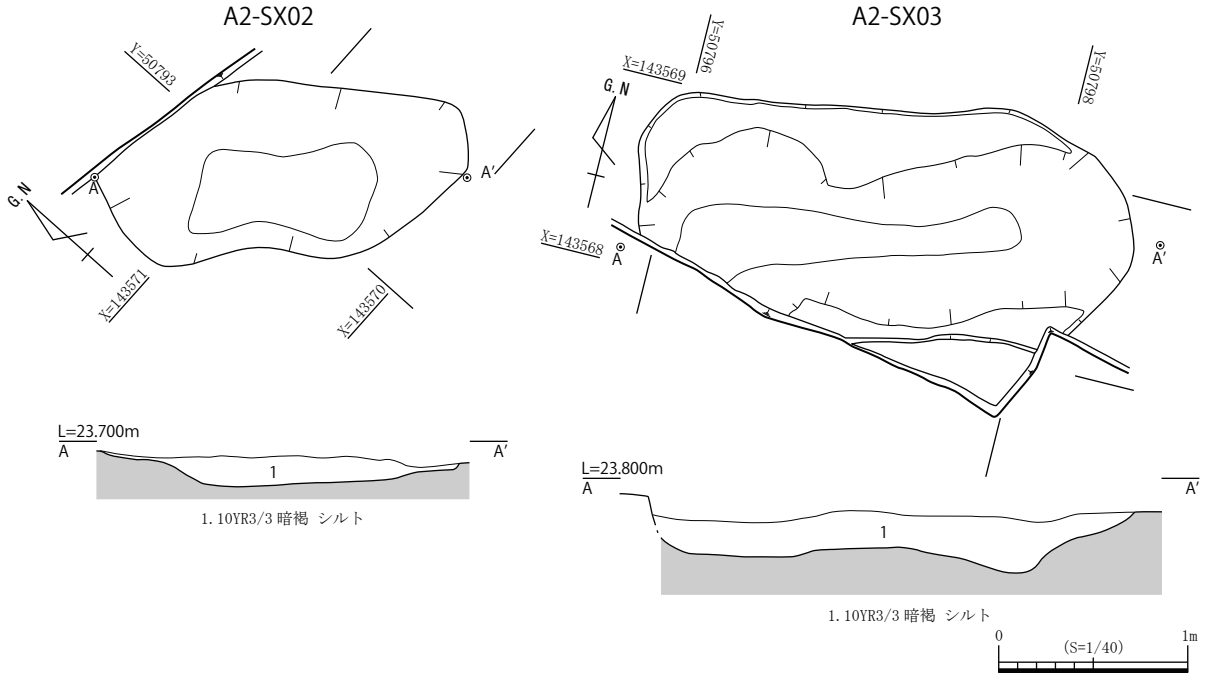


図 17　A2-SX02・03 平・断面図

器杯小片がある。26 は口縁部直下に短い鍔が付き、体部下半が大きく湾曲する。口縁部と体部内面はナデ、体部外面上半は指オサエ・ハケ、下半は格子状タタキが施される。鍔下位と体部外面には煤が付着する。27 は口縁部が内湾し、口縁部内面の調整はヨコナデ、体部外面はハケ、内面はナデが施される。鍋ＢⅢ形式である。

時期は出土遺物の年代から 13 世紀末葉～ 14 世紀前葉と判断できる。

A2-SX06（第 18 図）

Ａ２・Ｂ１調査区の中央において検出した性格不明遺構である。南側は調査区外にかかるため平面形は不明であるが、不整な円形と推測できる。直径は 0.99 m、深さ 0.14 mを測る。埋土は地山を 10％含む灰黄褐＋黒褐シルトの単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

３．B2 調査区（第４図）

Ｂ１調査区の北側に位置する東西方向に長い調査区であり、その間隔は約 10.00 mである。調査区の規模は、東西約 46.40 m、南北 2.10 mである。調査区の中央から東側において掘立柱建物、溝、土坑、ピットを検出した。西側は遺構が非常に希薄であるが、噴礫と思われる砂礫を７カ所確認した。土層は上層から現水田耕作土と床土（第１層）、近世の水田耕作土と床土（第２層）、にぶい黄橙＋にぶい黄褐シルト質極細砂（第３層）、地山である浅黄橙シルト（第４層）が堆積する。遺構検出面は第３層上面であり、土器小片を含む。その上面の標高は 23.60 m前後であり、地山までの深さは 0.10 ～ 0.20 mである。地山は西側から東側に向かって緩やかに下がっている。

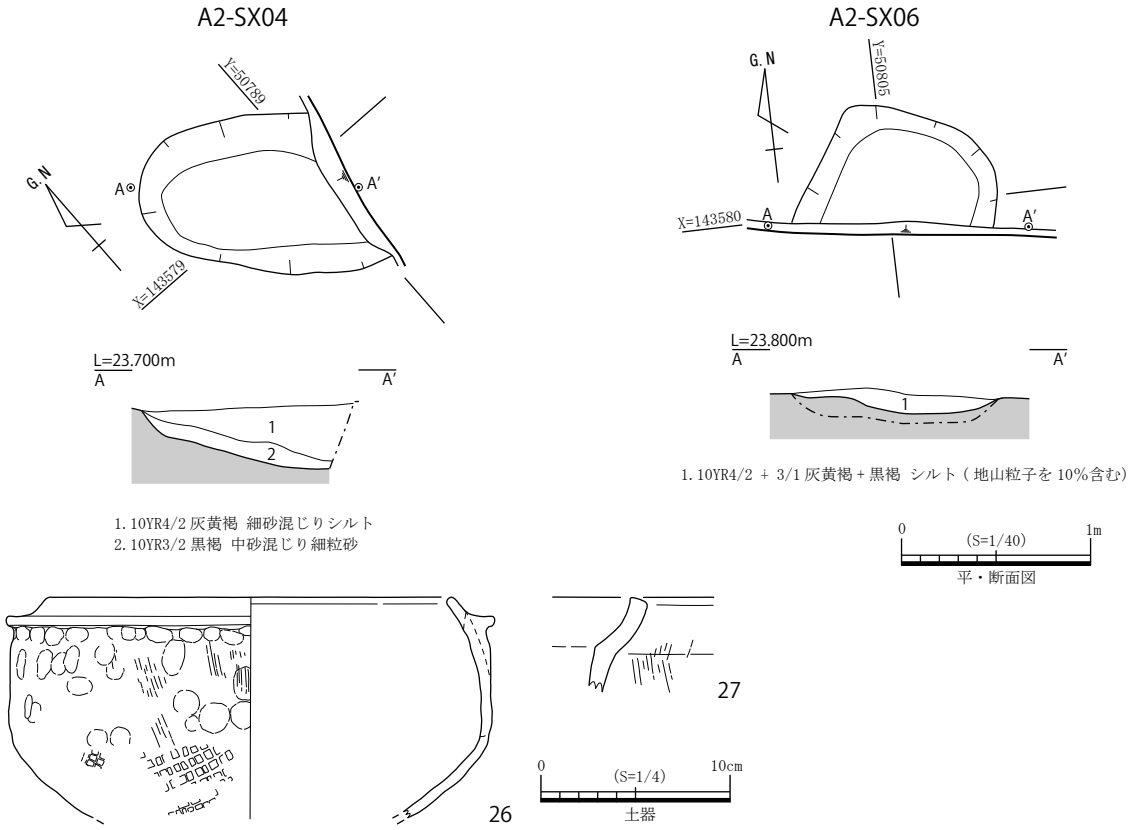


図 18　A2-SX04・06 平・断面図及び出土遺物実測図

（１）掘立柱建物

B2-SB06（第 19 図）

Ｂ２調査区の東端において検出した総柱の掘立柱建物である。調査範囲が狭いため全容は不明であるが、西側には展開しない。検出できた建物の規模は東西方向が２間、南北方向が１間であり、東西の長さは約 4.80 m、南北約 1.30 mを測る。方位はＮ－ 12°－Ｅである。柱穴はＳＰ 46 ～ 48・51 ～ 55・62 の９基確認され、東西方向の間隔は 2.25 mと 2.50 m、南北は 0.30 ～ 0.50 mと 1.10 mを測る。ＳＰ 46 と 47、52 と 53、55 と 62 は狭い間隔で位置しており、廂あるいは建替えに伴う柱穴と思われるが全容が明らかでないのでその性格は不明である。柱穴の平面形は円形と楕円形を呈し、規模は直径 0.25 ～ 0.50 m、深さ 0.04 ～ 0.32 mである。断面形状はＵ字形であり、ＳＰ 47・53 は僅かな段を有する。すべての柱穴の埋土はにぶい黄橙シルトの単一層であり、ＳＰ 46 には炭化材が含まれる。

遺物はＳＰ 46 から黒色土器椀(28)が出土した。図示した遺物のほかに、ＳＰ 46 から土師器杯、ＳＰ 47 から黒色土器Ａ類椀、土師質土器杯・鍋、ＳＰ 48 から土師質土器鍋、ＳＰ 51 から土師器杯、ＳＰ 52 から須恵器杯、ＳＰ 53 から須恵器杯、土師質土器小皿、ＳＰ 55 から土師質土器片が出土した。

28 は黒色土器Ａ類椀であり、口縁部内外面にヨコナデが施され、体部の回転ナデとの境に僅かな稜をもつ。体部内面にはヘラミガキガ施される。

時期は、出土遺物から中世と判断できる。

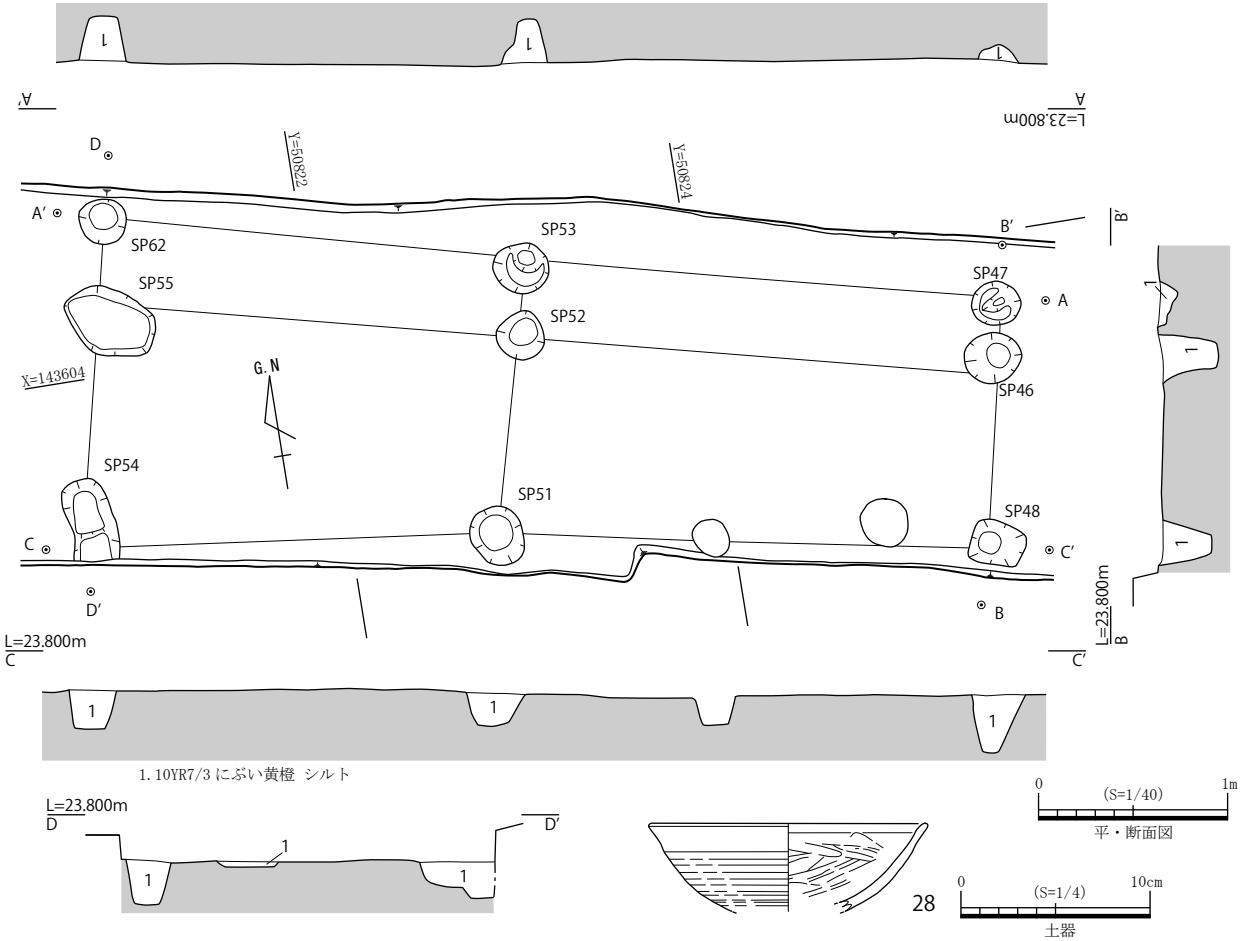


図 19　B2-SB06 平・断面図及び出土遺物実測図

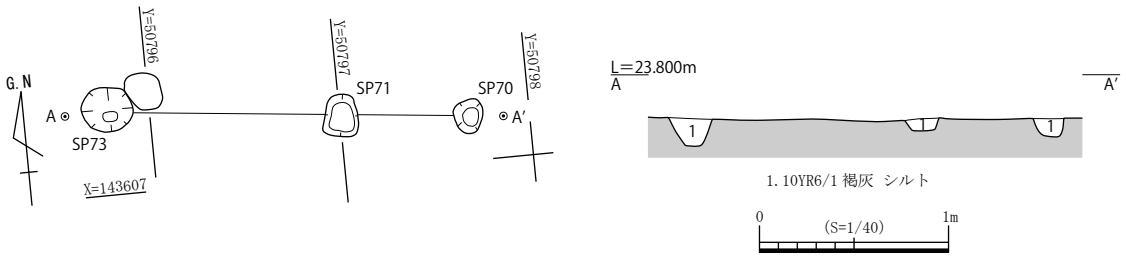


図 20　B2-SB07 平・断面図

B2-SB07（第 20 図）

Ｂ２調査区の中央西寄りにおいて検出した掘立柱建物である。北側側柱のみの検出であり、南側の調査区域外に展開すると思われる。全長は 1.90 ｍを測り、２間である。芯芯間距離は 0.70 ｍと 1.20 ｍである。方位はＮ－ 85°－Ｗである。柱穴はＳＰ 70・71・73 の３基である。平面形は円形を呈し、規模は直径 0.18 ～ 0.27 ｍ、深さ 0.06 ～ 0.13 ｍである。断面形状はＵ字形であり、埋土は褐灰シルトの単一層である。

遺物は、ＳＰ 73 から出土した土師器杯小片のみであり、詳細な時期は不明である。

（２）溝

B2-SD03（第 21 図）

Ｂ２調査区の東側において検出した南北方向に延びる溝であり、Ｂ２－ＳＤ 04 の東を並走する。Ｂ１調査区の北側において本溝と同規模で同方向に延びる溝（Ｂ１－ＳＤ 01）を検出したが、未確定な要素が多いので別遺構として報告する。溝の方向はＮ－ 10°－Ｅである。検出した長さは約 2.00 ｍ、幅は 0.96 ｍ、深さ約 0.20 ｍを測る。断面形状はＵ字形である。底面のレベルはほぼ平坦である。

埋土は２層に分層でき、上層が灰褐シルト、下層が暗褐シルトである。下層は底面直上に薄く堆積する。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

B2-SD04（第 22 図）

Ｂ２調査区の東側において検出した南北方向に延びる溝であり、Ｂ２－ＳＤ 03 の西を並走する。溝の方向はＮ－ 12°－Ｅである。検出した長さは約 3.00 ｍ、幅は 1.60 ～ 1.80 ｍ、深さ約 0.60 ｍを測る。断面形状はＶ字形を呈し、最深部の幅は 0.07 ～ 0.25 ｍと狭い。最深部の近くに僅かな段を有する。底面のレベルはほぼ平坦である。Ｂ１調査区の北側において本溝と同規模の溝は検出されていないことから、本遺構はＢ１調査区とＢ２調査区との間で東側か西側にほぼ直角に屈曲すると思われる。

埋土は５層に分層できる。上層よりにぶい褐＋灰白細砂混じりシルト（第１層）、にぶい黄橙細砂混じりシルト（第２層）、暗褐シルトをブロック状に含むにぶい黄褐細砂混じりシルト（第３層）、暗褐シルトをブロック状に含み細砂を第３層より多く含むにぶい黄褐細砂混じりシルト（第４層）、灰黄褐＋にぶい黄褐細砂混じりシルト（第５層）であり、第１層が厚く堆積する。第５層上面に数個の円礫が検出される。

遺物は須恵器椀（29・30）、土師質土器足釜（31 ～ 34）、陶器鉢（35）、平瓦（36）が出土した。図化した以外に土師器杯、須恵器杯・同杯蓋・同壺・同甕、土師質土器小皿、黒色土器Ａ類椀がある。

29 は口径 13.6cm で、口縁部が僅かに外反する。30 は低い高台が付く。

31・32 は内傾する口縁部の下に短い鍔が付く。鍔の下位には指オサエが施される。33･34 は脚部であり、33 は脚上部、34 は脚下部である。

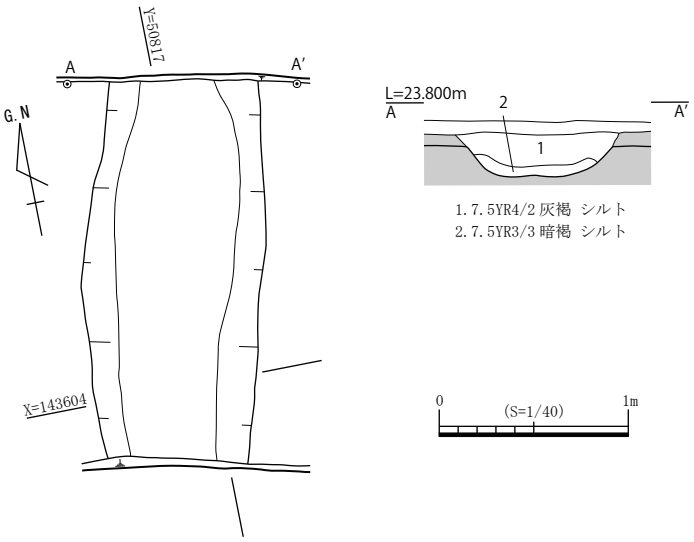


図 21　B2-SD03 平・断面図

35 は肥前系で、断面方形の高台が付き、高台と底面は無釉である。

36 は側端部と凹面端部にケズリが施され、凹面に布目･糸切り、凸面に平行縄目タタキが残る。

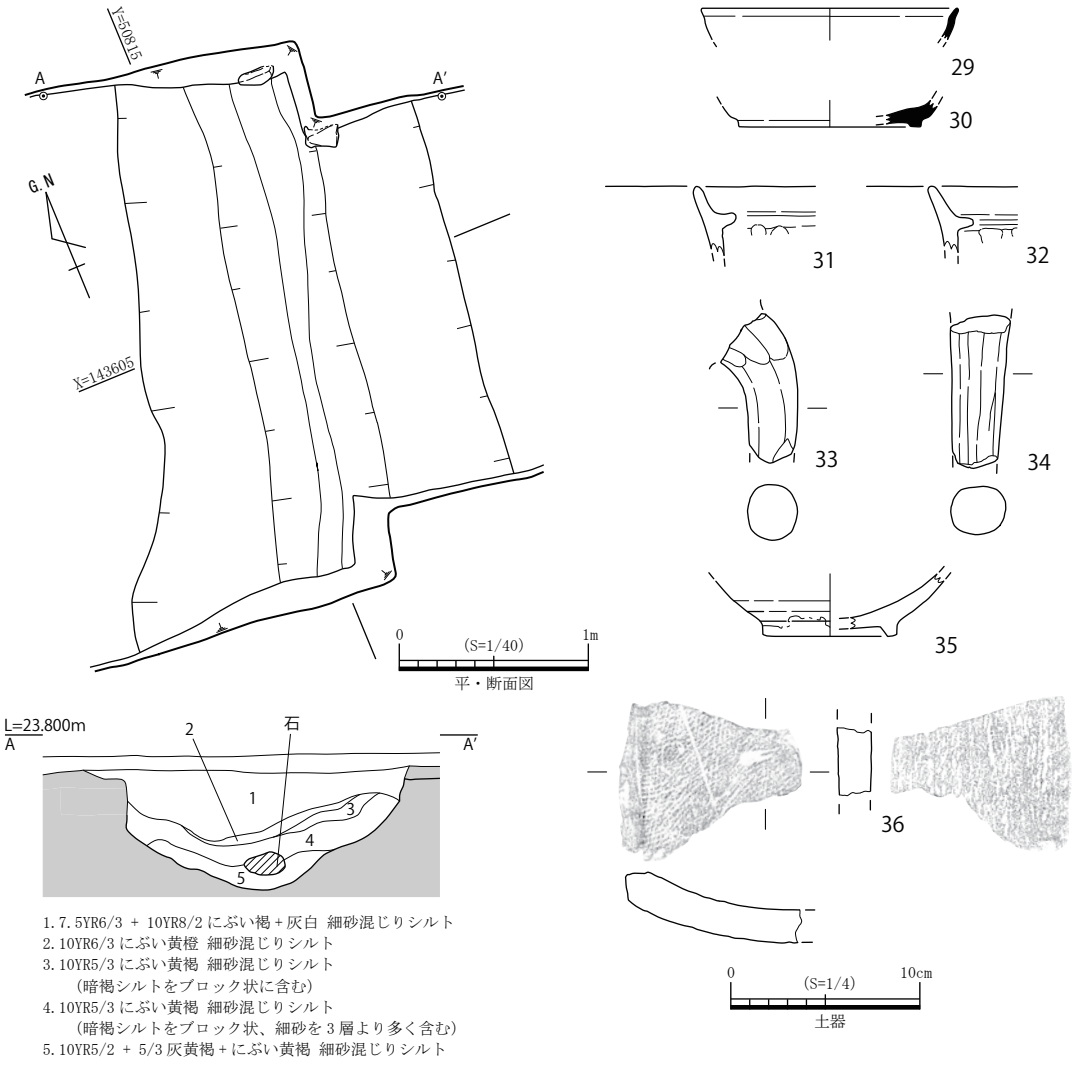


図 22　B2-SD04 平・断面図及び出土遺物実測図

出土遺物は古代から近世と考えられるものを含んでおり、本遺構は溝として長期間機能していたと考えられ、最終的な埋没時期は近世である。

（３）ピット

B2-SP60（第 23 図）

Ｂ２調査区の中央東寄りにおいて検出したピットである。平面形は不整な隅丸方形である。規模は 0.58 × 0.50 m、深さは 0.44 mを測る。掘り込みは急傾斜である。埋土は 4 層に分層でき、上層直下に地山ブロックを 30％含む黒褐シルトの柱痕が確認できる。

遺物は土師質土器甕の小片のみの出土であり、詳細な時期は不明である。

B2-SP61（第 23 図）

Ｂ２調査区の中央東寄りにおいて検出したピットであり、北側は調査区外にかかる。平面形は円形である。直径は 0.42 m、深さは 0.28 mを測る。掘り込みは急傾斜である。底面直上に根石と思われる 2 個の石を検出する。埋土は焼土粒・炭化材を含むにぶい黄褐＋灰黄褐細砂混じりシルトの単一層である。

遺物は土師質土器小皿（37）、黒色土器椀（38）が出土した。37 は口径 7.4cm であり、外形する短い口縁部をもつ。皿ＢⅢ－４形式である。38 はＡ類の椀であり、口縁部と体部の境に僅かな稜を有する。体部外面上位はヘラミガキ、下位はヘラケズリが施される。

時期は出土遺物の年代から 13 ～ 14 世紀と判断できる。

B2-SP64（第 23 図）

Ｂ２調査区のほぼ中央において検出したピットである。平面形は不整な隅丸方形である。規模は 0.51 × 0.30 m、深さは 0.19 mを測る。断面はＵ字形である。埋土は黒褐シルトの単一層である。

遺物は、黒色土器椀（39・40）、土師質土器杯（41）、同羽釜（42）、同火鉢（43）が出土し、その他に須恵器甕、瓦器椀、土師質土器甕が出土した。

39 は直線的な体部で、口縁部が先細り、内面に非常に僅かな沈線が巡る。体部内外面はヘラミガキが施される。40 はやや内弯する体部で、内外面にヘラミガキが施される。

41 は平底から緩やかな傾斜で体部が立ち上がり、内外面に僅かな凹凸がある。底面は回転ヘラ切り後にナデが施される。

42 は短く直立する頸部直下に水平に太く伸びる鍔が貼付する。羽釜Ｃ１－１型式である。43 は厚い器厚で、内面は被熱する。

時期は出土遺物の年代から 13 世紀末葉～ 14 世紀前葉と判断できる。

B2-SP68（第 23 図）

Ｂ２調査区の中央西寄りにおいて検出したピットである。平面形は円形である。直径は 0.25 m、深さは 0.22 mを測る。埋土は褐灰シルトの単一層であり、炭化材を少量含む。

遺物は土師質土器杯（44）が出土した。44 は僅かに内弯する体部で、底部の一部が残存する。外面にロクロ目が明瞭に残る。

時期は出土遺物の年代から中世と判断できる。

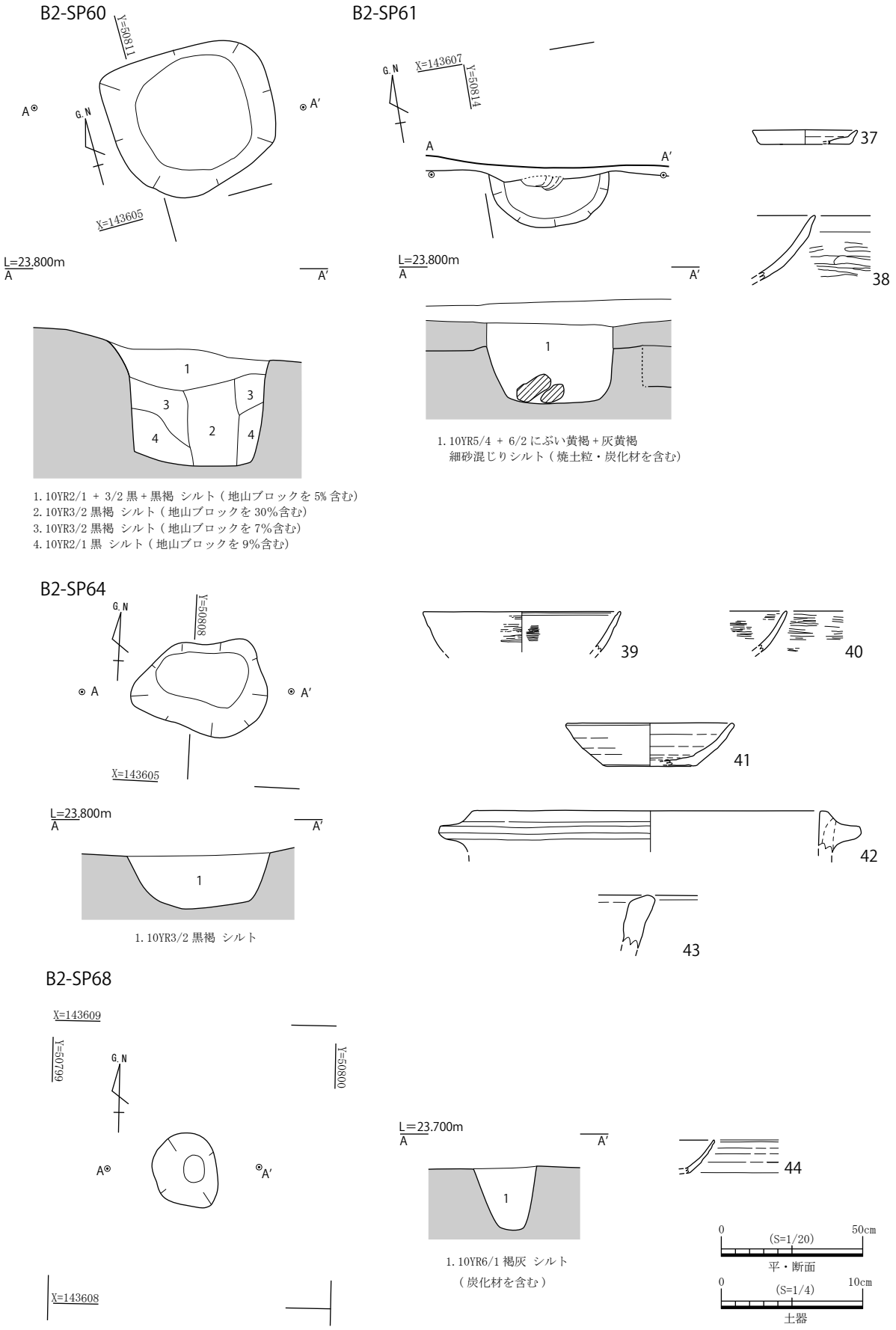


図 23　B2-SP60・61・64・68 平・断面図及び出土遺物実測図

４．B3 調査区（第４図）

Ｂ２調査区と用水路を挟んで西側に位置する調査区である。規模は、東西約 24.20 m、南北約 2.00 mである。東端と中央西寄りにおいて噴礫を３カ所確認する。土層は上層から現水田耕作土と床土（第１層）、近世の耕作土と床土（第２層）、土器片を含むにぶい黄橙＋にぶい黄褐シルト質極細砂（第３層）、地山の浅黄橙シルト（第４層）である。土層の堆積はＢ２調査区と同様であるが、地山が西方向に下がっているため第２層が厚く堆積する。遺構検出面は第３層上面であり、その標高は東端で 23.60 m、西端で 23.50 mである。

調査区西端において南北方向に延びる近世の溝１条を検出した以外に遺構の検出はなかった。

５．C1・2 調査区（第 24 図）

Ｃ１・２調査区はＤ１調査区・Ｄ２調査区の東側に位置する。範囲は南北約 44.00 m、東西約 30.00 mであるが、調査を実施したのは建物の基礎部分である。遺構の検出は調査区の南東部と北部に集中し、柵・溝・土坑・ピットを検出した。東部において噴礫が５カ所確認できた。土層は上方から現水田耕作土と床土（第１層）、近世の水田耕作土（第２層）、地山に類似するにぶい黄褐＋浅黄橙シルト（第３層）、地山の浅黄橙シルト（第４層）である。遺構検出面は第３層と第４層上面であり、その標高は 23.70 ～ 23.80 mであり、南側から北側に向かって緩やかに下がっている。調査区南西隅から北東隅にかけては砂礫層が帯状に検出され、Ａ１調査区に延びる。

（１）柵

C1-SA01（第 25 図）

Ｃ１調査区の南東隅において検出した柵である。ＳＰ 04 ～ 07 の４基の柱穴から構成される。全長は約 5.00 mを測る。方位はＮ－ 83°－Ｗである。柱穴の位置はほぼ直線上にあるが、芯芯間距離は均等でなく、東から 1.10 m、2.00 m、1.55 mである。ＳＰ 04 は楕円形を呈し、直径 0.24 × 0.17 m、深さ 0.07 mを測り、東側に段を有する。埋土は灰黄褐シルトである。ＳＰ 05 は円形を呈し、直径 0.39 × 0.32 m、深さ 0.17 mを測る。埋土は灰黄褐シルトである。ＳＰ 06 は円形を呈し、直径 0.25 m、深さ 0.03 mを測る。埋土は褐灰シルトである。ＳＰ 07 は円形を呈し、直径 0.20 × 0.13 m、深さ 0.12 mを測る。埋土は褐灰シルトである。

遺物はＳＰ 04 から土師質土器杯の小片が出土したのみであり、詳細な時期は不明である。

（２）溝

C1-SD01（第 26 図）

Ｃ２調査区の北東隅において検出した東西に延びる溝であり、その位置からＡ２調査区で検出したＡ２－ＳＤ 01 と同一遺構と考えられる。溝の方位はＮ－ 75°－Ｗである。調査区北西隅では溝は検出できなかった。検出した長さは約 1.45 mである。幅は 1.20 m、深さは 0.42 mを測り、断面形状はＵ字形である。埋土は５層に分層され、上層からにぶい黄橙細砂混じりシルト（第１層）、にぶい黄橙＋灰黄褐細砂混じりシルト（第２層）、灰黄褐細砂混じりシルト（第３層）、にぶい赤褐シルトを含むにぶい黄褐細砂混じりシルト（第４層）、にぶい黄褐細砂混じりシルト（第

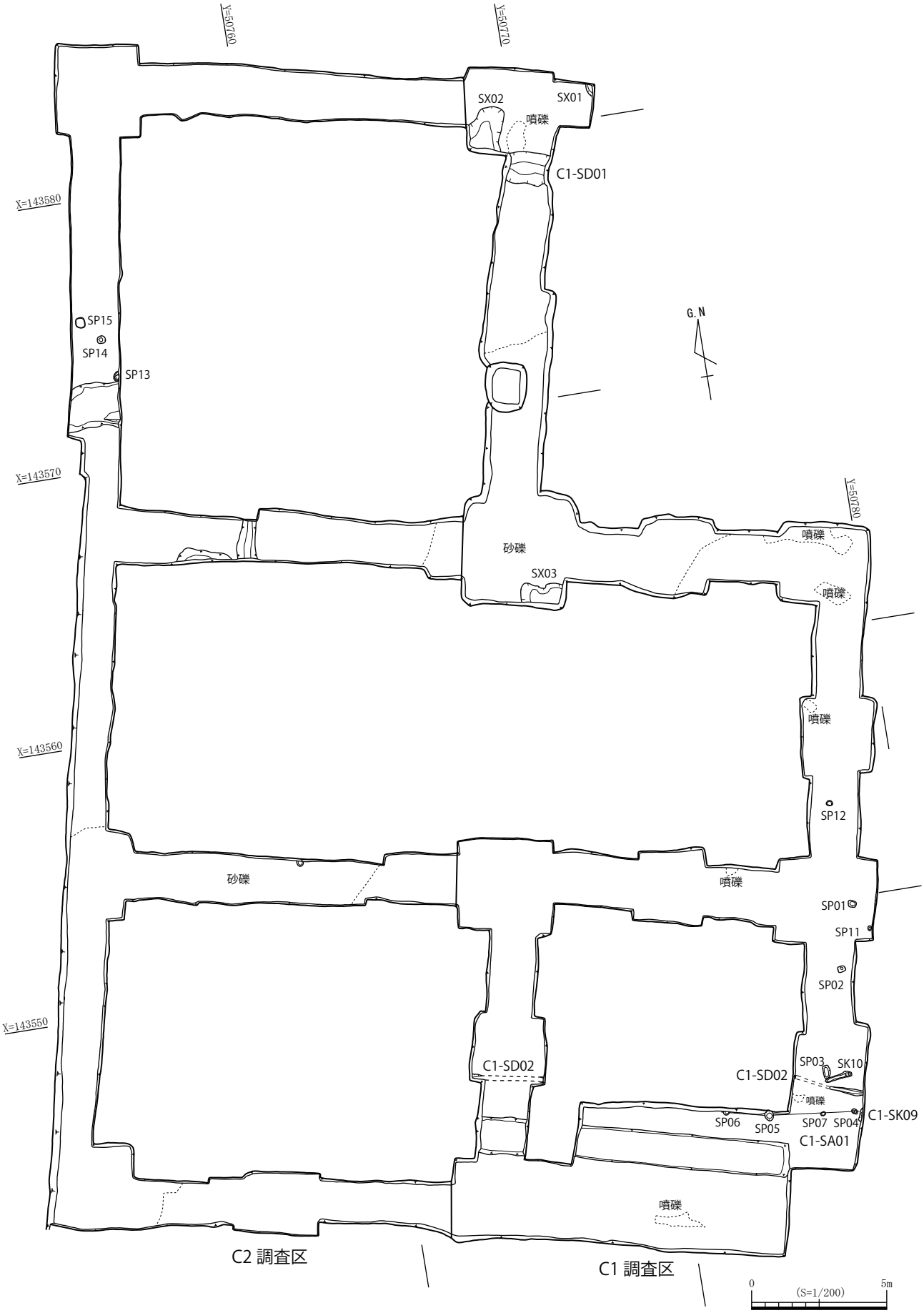


図 24　C1・2 調査区 平面図

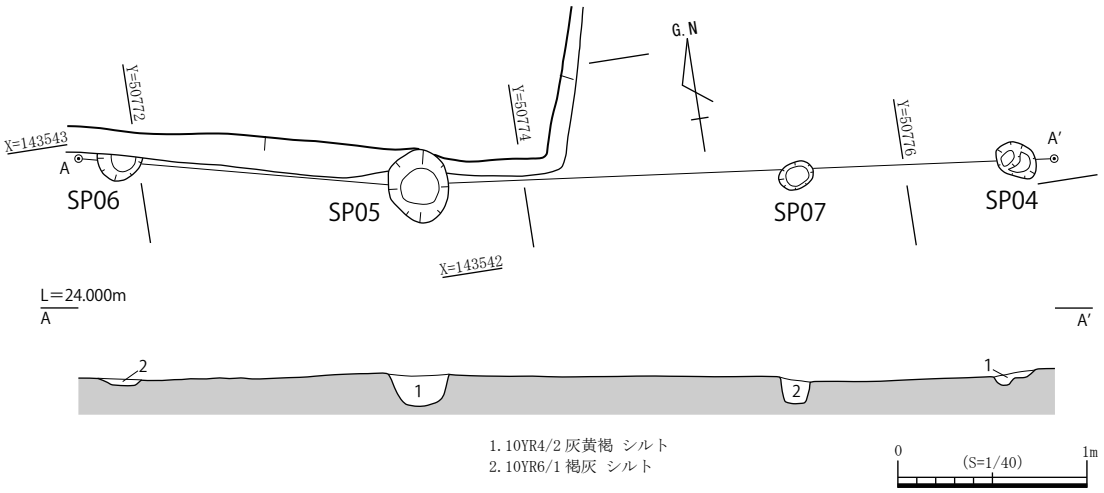


図 25　C1-SA01 平・断面図

５層）である。

遺物は土師質土器足釜（45）が出土し、図示した遺物の他に須恵器杯、土師器杯、土師質土器足釜、瓦の小片が出土した。

時期は、Ａ２－ＳＤ01と同一遺構であることから13世紀末葉～14世紀前葉と判断できる。

C1-SD02（第27図）

Ｃ１調査区の南東隅から南西側において検出した東西に延びる溝である。Ｃ１－ＳＡ01の北側に位置する。溝の方位はＮ－80°－Ｗである。検出した長さは約14.70ｍである。幅は0.23ｍ、深さは0.16ｍを測り、底面は非常にわずかだが東側に低くなる。断面形状はＵ字形である。埋土は炭化材粒を少量含む灰褐シルトである。

遺物が出土していないため、
詳細な時期は不明である。

（３）土坑

C1-SK09（第28図）

Ｃ１調査区の南東隅において検出した土坑である。土坑の大部分は東側の調査区外にかかっているため、検出した規模は0.57 × 0.09 ｍ、深さ0.19 ｍであり、正確な平面形や規模は不明である。埋土は２層であり、上層は炭化材を少量含む灰黄シルト質極細砂、下層は灰白細砂を含み、炭化材を少量含む黄灰シルト質極細砂である。

遺物は土人形（46）が出土した。46は頭部を欠損するが

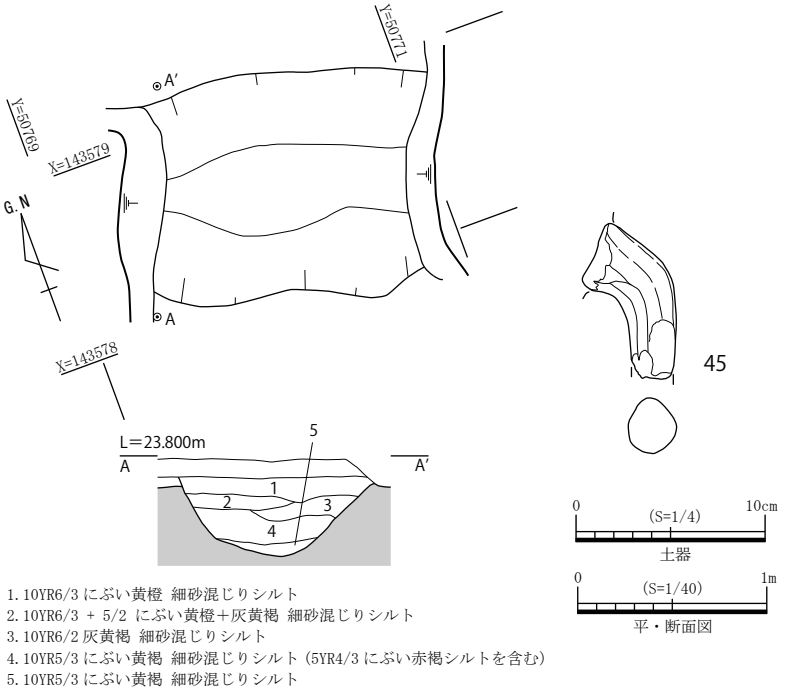


図 26　C1-SD01 平・断面図及び出土遺物実測図

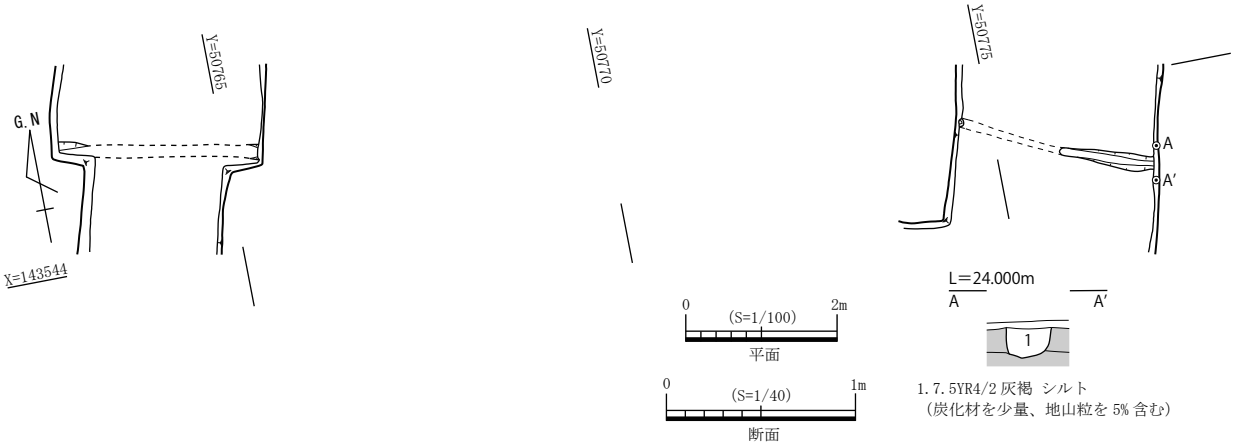


図 27　C1-SD02 平・断面図

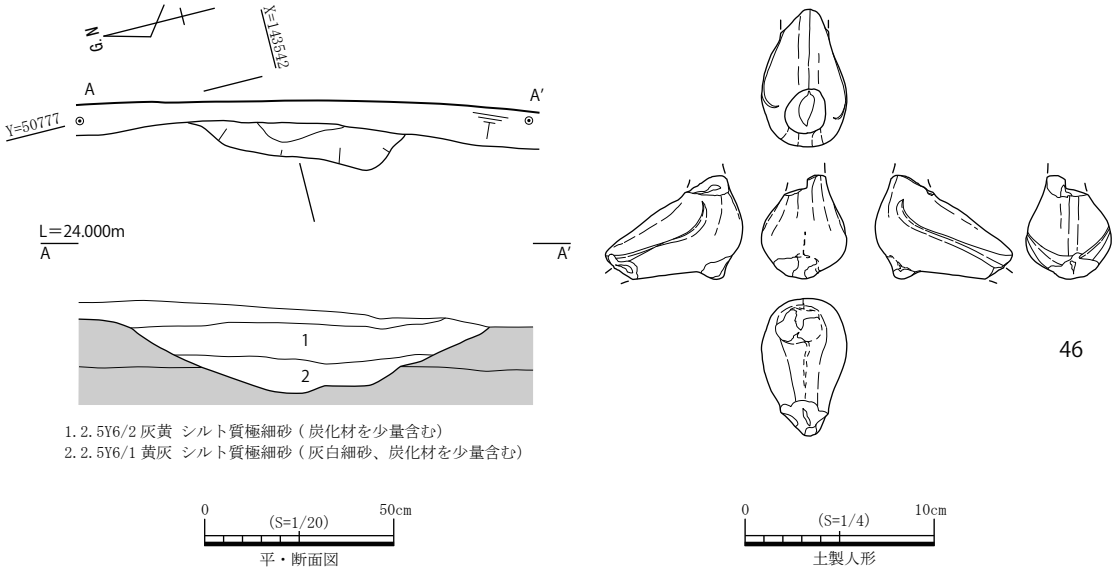


図 28　C1-SK09 平・断面図及び出土遺物実測図

鳩と思われる。成形技法は二枚の型を合わせる型合わせであり、中は空洞で、中に土製の球体があり振ると音がする。表面にはキラ粉が付着する。

遺物が 46 のみであるため詳細な時期は確定できないが、18 世紀前葉以降である。

６．D1 調査区

Ｄ１調査区はＣ１調査区の西側に位置する。範囲は南北約 28.00 m、東西約 23.00 mであるが、調査を実施したのは建物の基礎部分である。遺構の検出は調査区の東部と西部に集中し、溝・ピットを検出した。土層の堆積は上方から現水田耕作土と床土（第１層）、近世の水田（第２層）、地山に非常に類似するにぶい黄橙シルト（第３層）である。第３層上面が遺構検出面であり、その標高は 23.80 ～ 24.00 mであり、西側から東側に向かって緩やかに下がっている。

（１）溝

D1-SD01（第 30 図）

Ｄ１調査区の南西側において検出した南北方向に延びる溝である。本溝の北側延長線上にＤ１

－ＳＤ 03 があり、同一遺構の可能性も考えられるが、距離が離れていることと埋土が異なるため別の遺構として報告する。

溝の方位はＮ－ 10°－Ｅであり、ほぼ直線的に延びる。検出した長さは約 7.20 ｍである。幅は 0.40 ～ 0.73 ｍ、深さは 0.19 ｍを測り、底面は北方向に緩やかに低くなり、その比高差は 0.10 ｍである。断面形状は船底形である。埋土は黒褐＋灰褐シルトの単一層である。

遺物は土師器甕（47）が出土し、図示した遺物の他に土師器杯の小片が出土した。47 は口縁部がくの字状に大きく外反し､口縁端部が細く摘み出される。口縁部内面の調整は横方向のハケ、体部外面は縦方向のハケが施される。

時期は出土遺物や埋土から飛鳥・奈良時代と判断できる。

D1-SD02（第 31 図）

Ｄ１調査区の北西隅において検出した溝である。Ｅ１調査区のトレンチにおいて上面のみ確認した溝が本遺構の延伸方位に位置していることから同一遺構の可能性が考えられるが、距離が離れているため別遺構として報告する。

検出した部分は南北方向の溝と東西方向の溝との交差部分である。東西方向の溝の方位はＮ－ 76°－Ｗである。幅は 0.83 ｍ、深さ 0.20 ｍを測り、断面形状はＵ字形を呈する。埋土はにぶい黄褐シルトを７％含む黒褐シルトである。北に延びる溝は幅 0.87 ｍ、深さは 0.14 ｍを測り、断面形状はＵ字形を呈する。埋土は黒褐＋にぶい黄褐シルトの単一層である。Ｄ１－ＳＤ 03 との切り合い関係は不明である。

遺物は図示できなかったが、須恵器杯蓋・同甕の小片が出土した。埋土や出土遺物から古代と判断できる。

D1-SD03（第 32 図）

Ｄ１調査区の北西側において検出した溝である。南西側において検出したＤ１－ＳＤ 01 と規模・延伸方位から同一遺構の可能性があるが、不確定要素が多いため別遺構として報告する。

溝の方位はＮ－ 50°－Ｅである。検出した長さは約 8.20 ｍ、幅は 0.77 ｍ、深さは 0.18 ｍを測り､底面は南から北に向かって僅かに下がる。断面形状は船底形である。埋土は２層に分層でき、上層は灰黄褐シルトを 20％含む黒褐シルト、下層は地山を 30％含む灰黄褐シルトである。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、Ｄ１－ＳＤ 01 と同質な埋土であることから同時期のものであると考えられる。

D1-SD04（第 33 図）

Ｄ１調査区の南東部において検出した南北方向に延びる溝である。溝の方位はＮ－３°－Ｅである。溝の北側は試掘調査による削平と雨水による壁面の崩壊のため検出ができなかった。検出した長さは約 11.80 ｍ、幅 1.15 ｍ、深さ 0.25 ｍを測り、底面はほぼ平坦である。断面形状は船底形である。埋土は５層に分層でき、その土質から第１・２層の上層と第３～５層の下層に大別される。第１層は灰黄褐シルト、第２層は灰黄褐＋灰褐シルトであり、第３層は灰白細砂、第４層は灰白細～中砂、第５層はにぶい黄橙細～中砂である。つまり、上層はシルト、下層は細～中砂であり、上層が厚く堆積する。下層には径１㎝～人頭大の石が多量にみられる。溝の底面には褐鉄鉱の沈殿がみられる。

遺物は陶器碗（48)･同擂鉢（49)､土師質土器足釜（50･51)､土師器杯（52）須恵器杯蓋（53)･

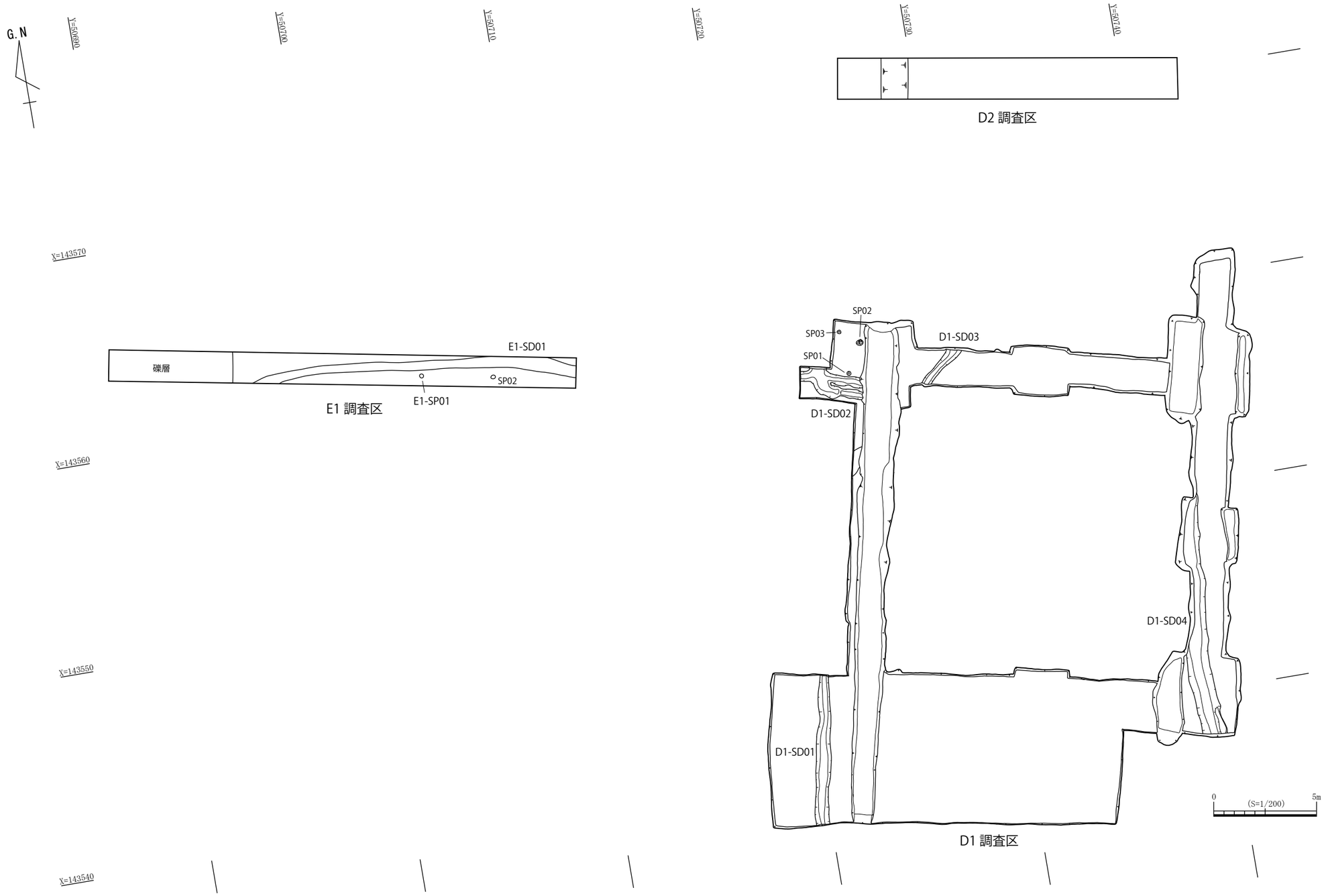


図 29　D1・2、E1 調査区 平面図

同鉢（54）・同甕（55）、石臼（56）、石核（57）が出土した。図示した遺物の他に磁器甕、黒色土器椀、土師質土器鉢、須恵器杯身、偶蹄類のものと考えられる骨片が出土した。

48 は口縁部が僅かに外反し、体部下位は無釉である。49 は備前焼の擂鉢で、直線的な体部内面に 8 本一単位の卸目が付く。

50 は脚部上半、51 は脚部下半であり、共にナデによる調整が施される。

52 はやや外向きの低い高台が付き、内外面ともに摩滅する。

53 は低い器高で、口縁部が非常に短い。奈良時代後期と考えられる。54 は口縁部が体部との

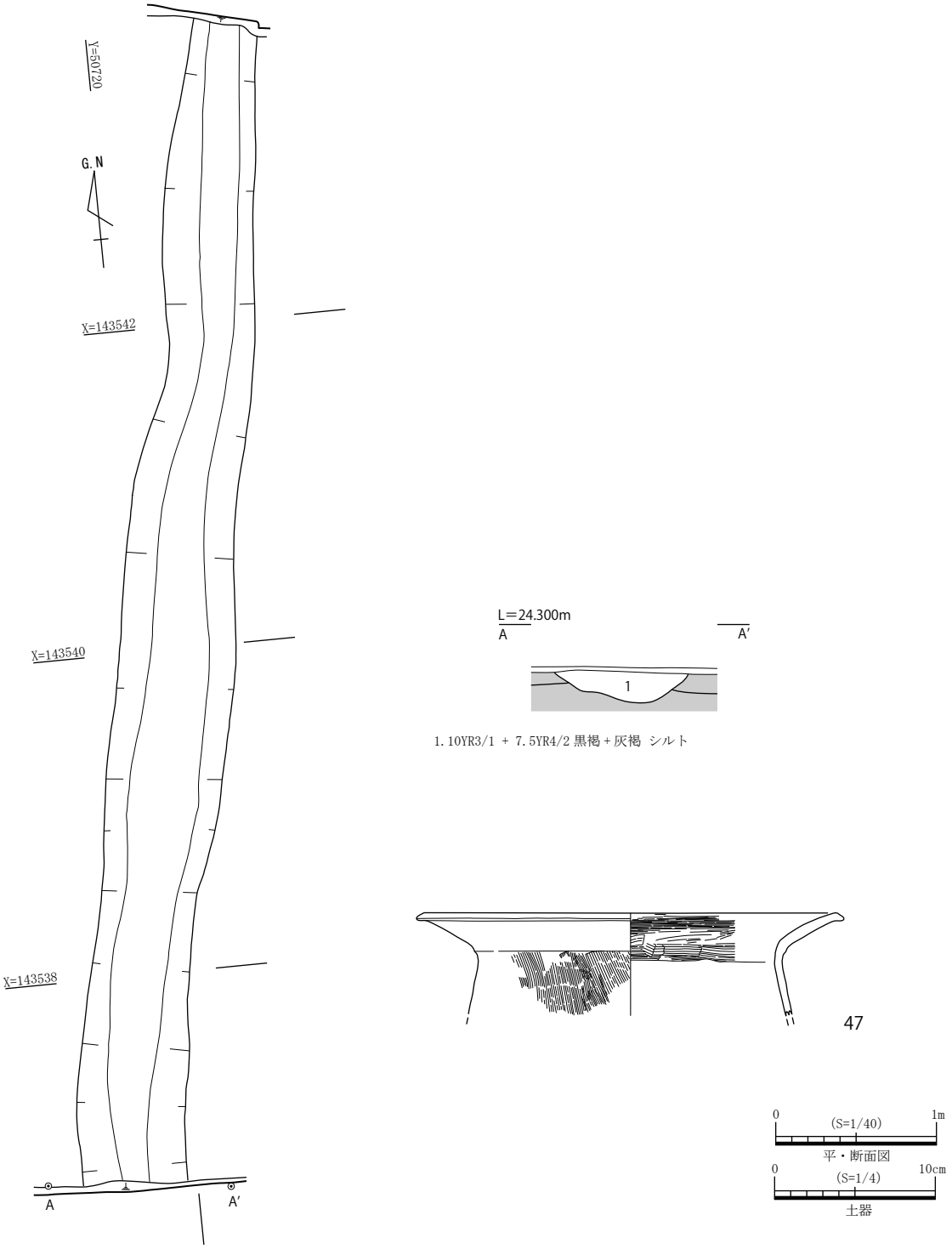


図 30　D1-SD01 平・断面図及び出土遺物実測図

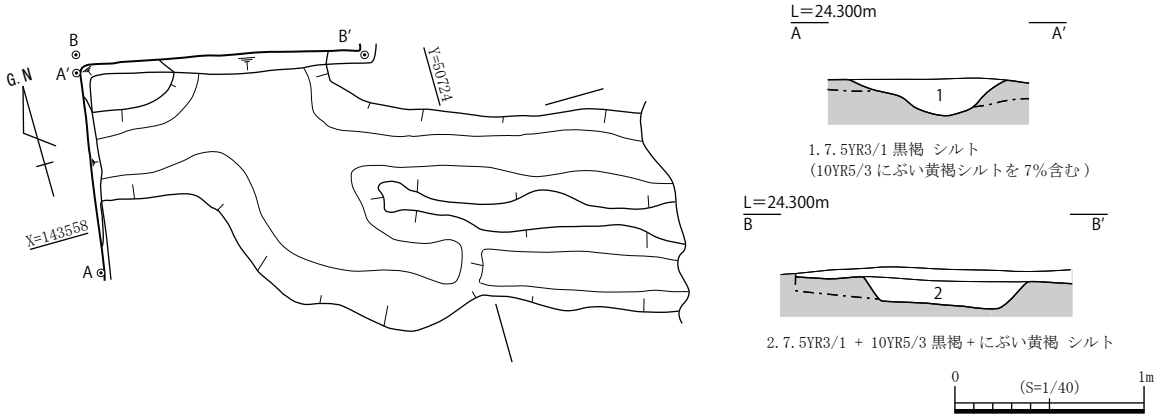


図 31　D1-SD02 平・断面図

境に明確な稜を有し内傾する。55 は口縁部が「く」の字状に強く屈曲し、肩部に浅い沈線が巡る。

56 は花崗岩製石臼の下臼であり、浅い副溝が掘られる。

57 は長方形を呈する石核であり、一部に二次的な加工がみられる。石材はサヌカイトである。

出土遺物は古代、中世、近世のものと推測される遺物があり、本遺構が溝として長期間機能していたと考えられ、溝の最終的な埋没時期は近世である。

７．D2 調査区（第 29 図）

Ｄ２調査区はＤ１調査区から約 7.50 ｍ北側に位置し、東西辺は約 16.50m、南北辺 2.00m を測る。遺構・遺物は全く検出できなかった。土層の堆積は上層から現水田耕作土（第１層）、近世の水田耕作土（第２層）、遺構検出面のにぶい黄褐シルト（第３層）である。

８．E1 調査区（第 29 図）

Ｅ１調査区はＤ１調査区北西隅から約 11.00 ｍ西側に位置し、東西辺は約 22.50 ｍ、南北辺は約 1.30 ｍを測る。遺構は溝とピットを検出した。土層の堆積は上層から現水田耕作土（第１層）、近世の水田耕作土（第２層）、遺構検出面のにぶい黄褐シルト（第３層）である。

（１）溝

E1-SD01（第 29 図）

やや湾曲しながら東西方向に延びる溝である。本遺構を東方に延伸するとＤ２調査区の北西隅において検出したＤ１－ＳＤ 02 があり、同一遺構の可能性が考えられるが、未検出の距離が長いため別遺構として報告する。

溝の方位はＮ－ 80°－ Ｗである。検出した長さは約 15.70 ｍ、幅は 0.40 ～ 0.70 ｍである。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。

（２）ピット

E1-SP01（第 29・34 図）

Ｅ１調査区のほぼ中央において検出したピットである。平面形は円形であり、直径約 0.20m を測る。埋土は明黄褐細粒砂である。

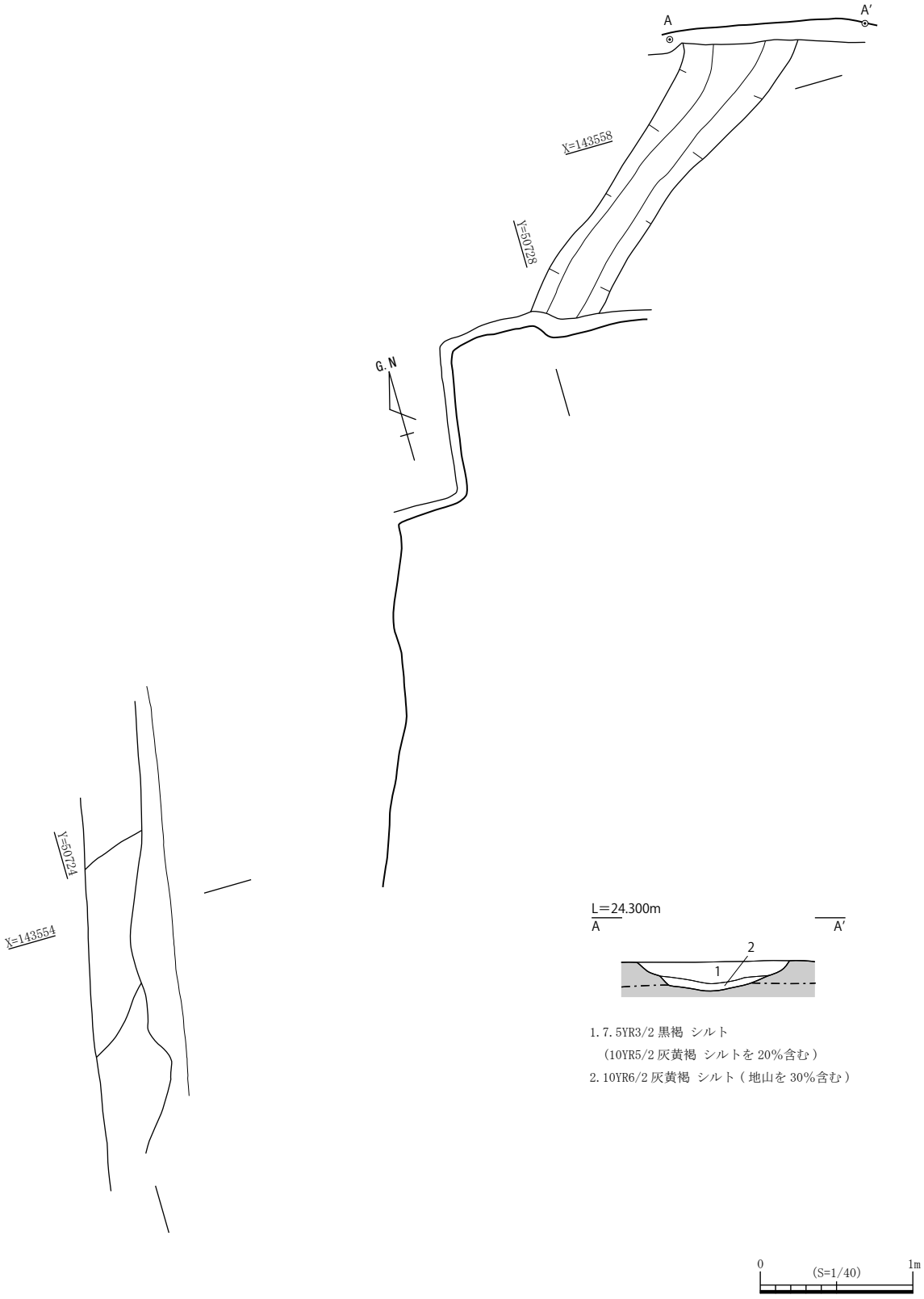


図 32　D1-SD03 平・断面図

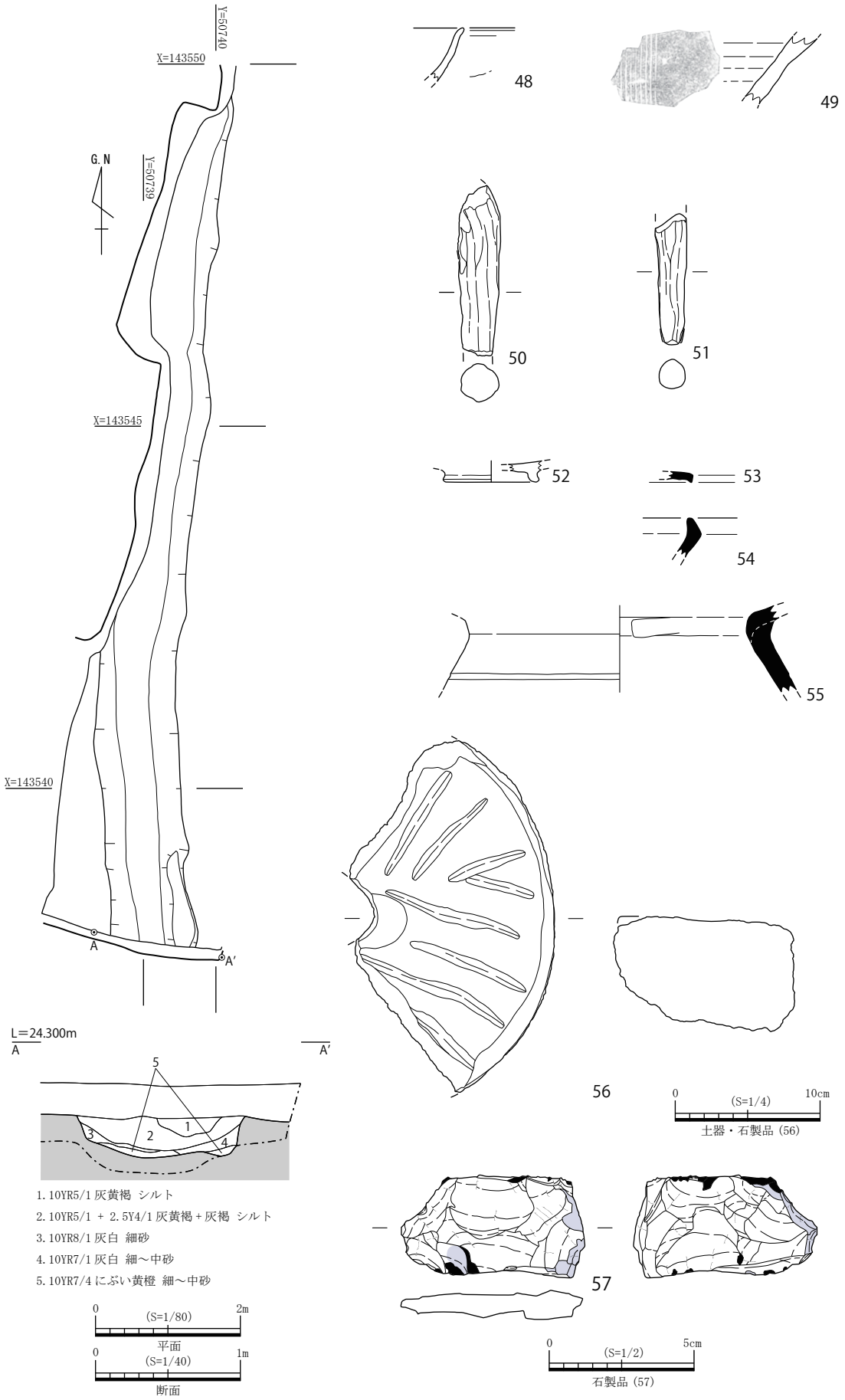


図 33　D1-SD04 平・断面図及び出土遺物実測図

遺物は土師器小型器台（58）であり、12 世紀頃のものと考えられる。

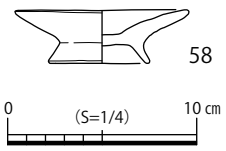


図 34　E1-SP01 出土遺物実測図

９．F1・2 調査区（第 35 図）

Ｆ１・２調査区はＡ２調査区･Ｂ１調査区東端から約 7.00 ｍ東側に位置し､約 2.50 ｍの間隔をもって南北方向に設定する。Ｆ１調査区は北側の調査区であり、東西約 4.00 ｍ、南北約 4.30 ｍの規模を測る方形である。Ｆ２調査区は南側の調査区であり、東西約 4.50 ｍ、南北約 8.00 ｍの規模を測る長方形である。遺構の検出は全面的にみられ、竪穴建物、溝、ピットを検出する。基本的な土層の堆積は上方から現水田耕作土、近世の水田耕作土、遺構検出面である地山の明黄橙シルトの３層であるが、Ｆ１調査区北東付近では地山の上ににぶい黄褐シルト質極細砂が堆積する。この層は土器小片と少量の焼土・炭化材を含んでおり、竪穴建物である可能性が考えられたために慎重に調査を行ったが、遺構は確認できなかった。地山は北方向に非常に緩やかに下がっており、Ｆ２調査区南端では標高 23.60 ｍ、Ｆ１調査区北端では標高 23.55 ｍである。

（１）竪穴建物

F2-SI01（第 36 図）

Ｆ２調査区の北西側において検出した竪穴建物であり、Ｆ２－ＳＤ 03 に切られる。西側は調査区外に延び、検出できたのは建物の南東隅付近のみであり、全体の 1/ 4 弱である。平面形状は方形を呈する。主軸方位はＮ－５°－Ｗである。検出できた南北長は 3.25 ｍ、東西長は 1.10 ｍ、深さ 0.03 ～ 0.08 ｍを測る。

埋土は褐灰＋にぶい黄褐シルトの単一層である。遺物は土師器甕（59・60）が出土した。59 は口縁部であり、口縁端部は方形で僅かに凹む。60 は頸部～肩部である。

貼床は地山ブロックを 20％含む褐灰シルトの単一層である。最深部で約 0.10 ｍの深さである。土師器甕の小片が出土した。

周壁溝は南東隅で一部途切れ、幅は約 0.16 ～ 0.20 ｍ、深さ 0.07 ｍを測る。埋土は褐灰シルトである。

支柱穴は１基確認する。Ｐ１は円形を呈し、直径 0.30 ｍ､深さ 0.17 ｍを測る。埋土は地山ブロックを 10％含む褐灰＋にぶい黄褐シルトの単一層である。

カマドは検出されなかったが、西側の調査区外にあると推測される。

時期は、出土遺物から古代と判断できる。

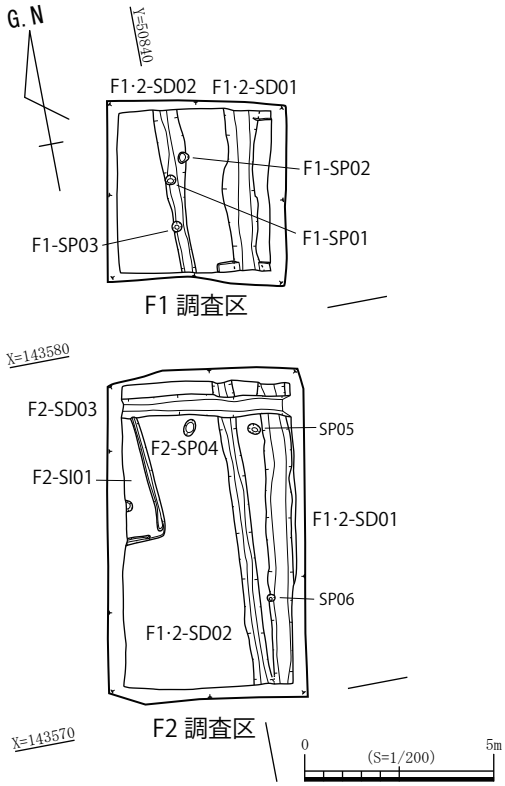


図 35　F1・2 調査区 平面図

（２）溝

F1・2-SD01（第 37・38 図）

Ｆ１・２調査区の東側において検出した南北方向に延びる溝であり、やや異なる方向に延びるＦ１・２－ＳＤ 02 の東に位置する。Ｆ２調査区の南端において２本の溝は重なり、断面観察により本溝が切られることが判明した。さらに、Ｆ２－ＳＤ 03 とＦ２－ＳＰ 06 にも切られる。溝の方向はＮ－８°－Ｅである。検出した長さは約 12.10 m、幅は 0.60 ～ 0.85 m、深さ 0.08 ～ 0.19 mを測る。断面形状はＵ字形を呈し、底面の標高は南端で 23.50 m、北端で 23.40 mであり、南から北に向かって下がっている。

埋土は２層に分層でき、上層が黒褐＋にぶい黄褐シルト、下層が地山を 15％含む黒褐＋褐シルトである。

遺物は土師器杯（61）、同鉢（62･63）、同甕（64 ～ 68）、須恵器杯（69）、同高杯（70）、同甕（71･72）が出土した。

61 は口縁端部が僅かに外反する。62 は口縁部内面に僅かな稜をもって外反する。63 はほぼ直線的な体部から口縁部に至る。

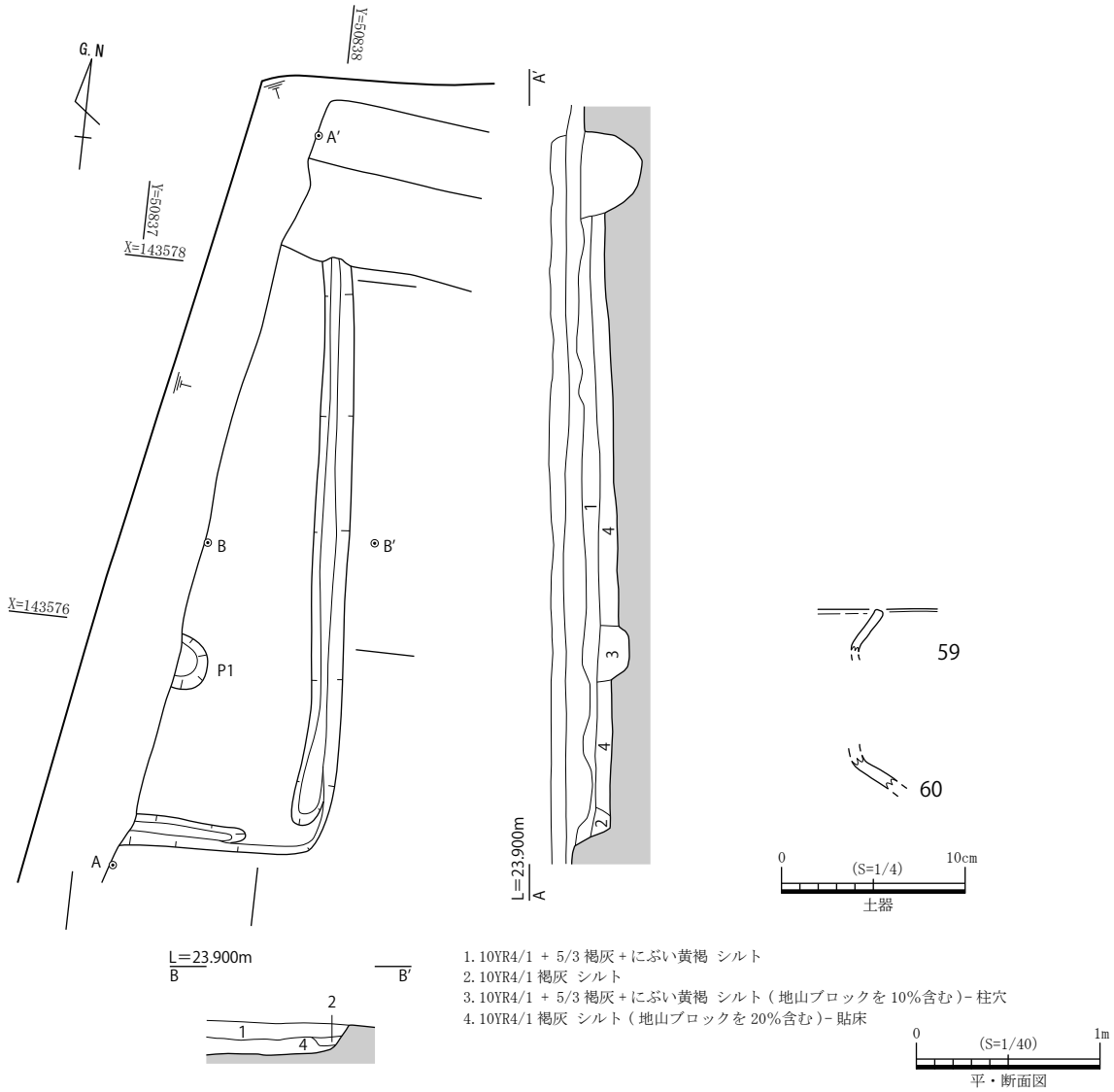


図 36　F2-SI01 平・断面図及び出土遺物実測図

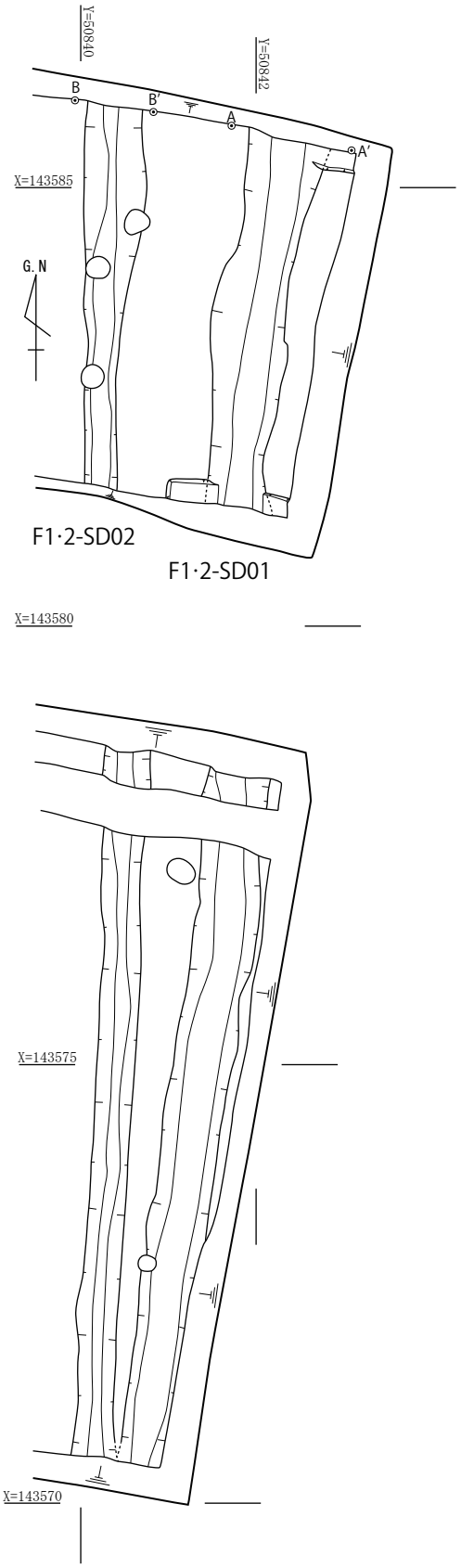
64 の口縁部は緩やかな角度の「く」字形に屈曲し、口縁端部は薄くなる。体部外面はハケが施される。65 の口縁部は「く」字形にやや強く外反し、口縁端部が外に少し肥厚する。66 は体部から口縁部が外反する。口縁端部が下方に少し肥厚し、平坦面を有する。口縁部外面を除きハケが施され、口縁端部直下と口縁部・頸部の境に輪積み痕が残る。67 は体部上位であり、体部外面は斜方向のハケ、内面は横方向のハケが施される。68 は体部上半の小片である。

69 はやや内湾気味の体部から口縁部に至る。70 は体部と口縁部の境に僅かな稜を有する。71 は直線的な口縁部で、口縁端部に平坦面を有する。体部外面は粗いハケが施される。72 は体部中央付近であり、外面にカキメ、内面に青海波タタキが施される。

出土遺物の年代から、飛鳥時代後期～奈良時代前期と考えられる。

F1・2-SD02（第 37・39 図）

Ｆ１・２調査区の中央から東側において検出した南北方向に延びる溝である。Ｆ１・２－ＳＤ 01 とＦ１－ＳＰ 02・03 を切り、Ｆ２－ＳＤ 03 とＦ１－ＳＰ 01 に切られる。溝の方向はＮ－５°－Ｅである。検出した長さは約 12.40 ｍ、幅は 0.35 ～ 0.72 ｍ、深さ 0.08 ～ 0.19 ｍを測る。断面形状はＵ字形を呈し、



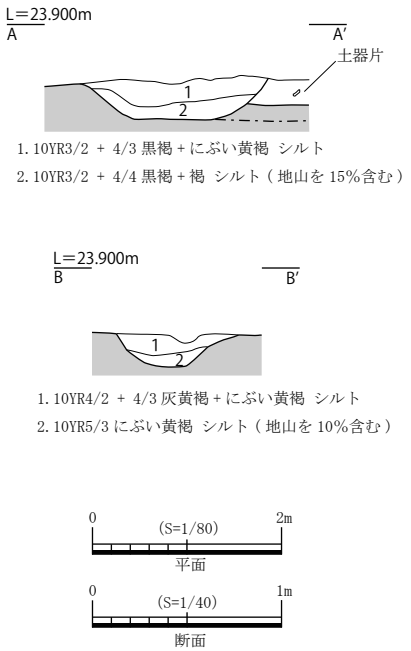


図 37　F1・2-SD01・02 平・断面図

底面の標高は南端で 23.37 m、北端で 23.54 mであり、南から北に向かって下がる。

埋土は２層に分層でき、上層が灰黄褐＋にぶい黄褐シルト、下層が地山を 10％含むにぶい黄褐シルトである。

遺物は土師器杯（73）、同鉢（74 ～ 77）、同甕（78・79）が出土し、図化した以外に須恵器杯の小片がある。

73 は左右非対称な器形であり、外面下半は指頭圧後にナデが施される。

74・77 は僅かに内湾する体部からそのまま口縁部に至る。74 の外面と 77 の内面はハケが施される。75・76 は体部から僅かな稜をもって口縁部が外反する。体部外面は縦方向のハケ、内面は斜方向のハケが施される。

78 は体部上位であり、外面はハケ、内面は指頭圧痕・ハケが施される。79 は体部下位から底部であり、外面はハケ・ヘラナデ、内面はハケが施される。

時期は出土遺物の年代から飛鳥時代後期～奈良時代前期と考えられる。

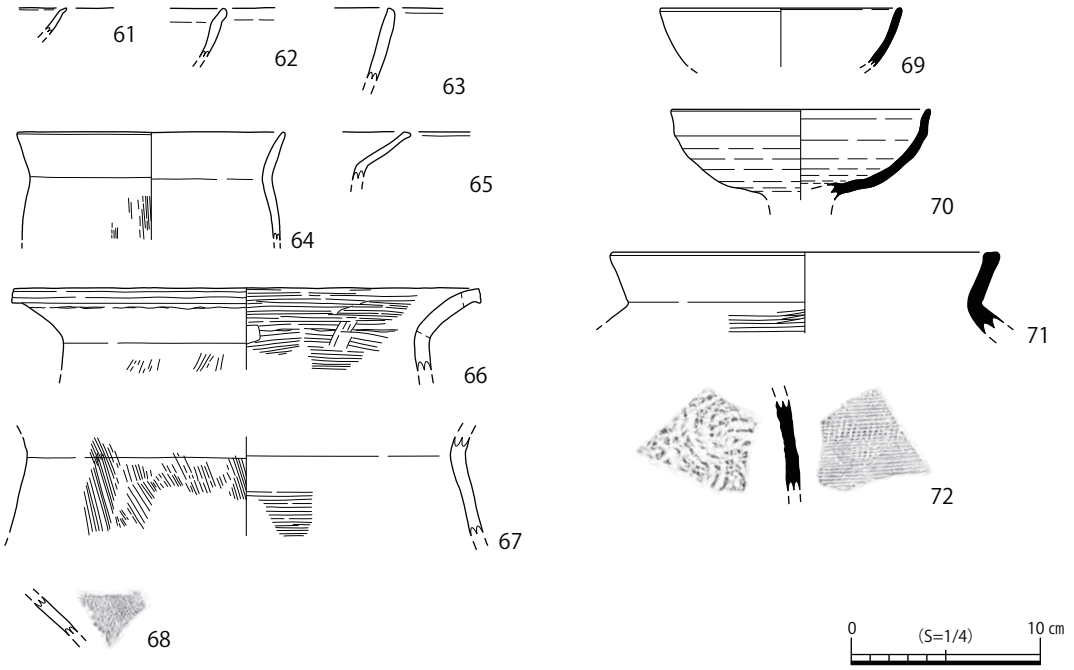


図 38　F1・2-SD01 出土遺物実測図

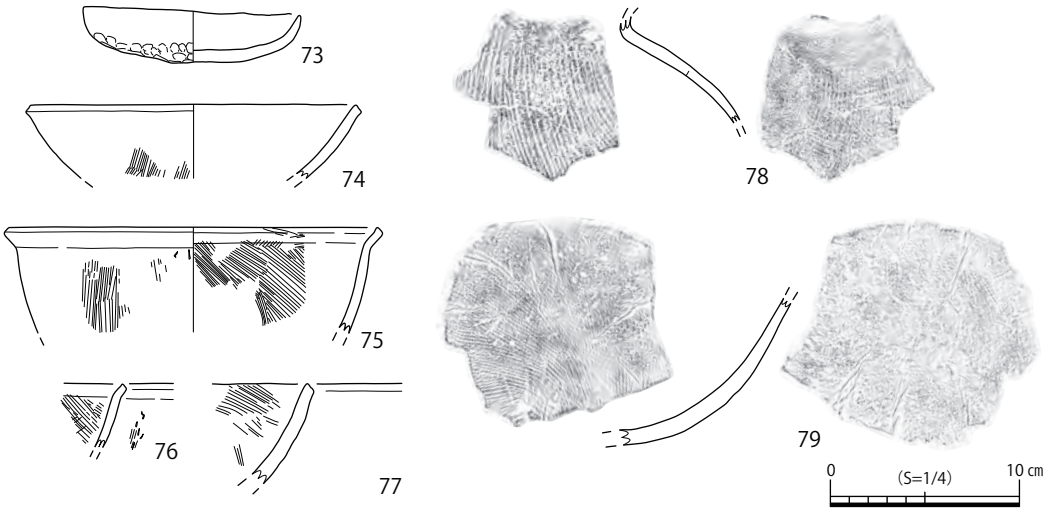


図 39　F1・2-SD02 出土遺物実測図

F1・2-SD03（第 40 図）

Ｆ２調査区の北端において検出した東西方向に延びる溝である。Ｆ２－ＳＩ01とＦ１・２－ＳＤ01・02を切る。溝の方向はＮ－97°－Ｅである。検出した長さは約 4.36 m、幅は 0.55 m、深さ 0.22 ～ 0.30 mを測る。断面形状はＵ字形を呈し、底面はほぼ平坦であり、その標高は 23.30 mである。西側のＢ１調査区では本遺構と同一と思われる遺構は検出できなかった。

埋土は３層に分層され、第１層は灰黄褐シルトを若干含む灰黄シルト、第２層は地山を 10％含む灰黄褐＋灰黄シルト、第３層はブロック状の浅黄シルトである。

遺物は土師器杯、同鍋、須恵器杯、同甕が出土するが、小片であり図化できない。

時期は切り合い関係と出土遺物から飛鳥時代後期以降と考えられる。

（３）ピット

F1-SP01（第 41 図）

Ｆ１調査区の中央西寄りに検出したピットであり､Ｆ１－ＳＤ02を切る。平面形は円形である。規模は直径 0.28 × 0.25 m、深さ 0.30 mを測る。掘り込みは急傾斜である。埋土は灰白シルトの単一層である。

遺物の出土がないため詳細な時期は不明であるが、埋土から近世と考えらえる。

F1-SP02（第 41 図）

Ｆ１調査区の中央北西寄りに検出したピットであり、Ｆ１－ＳＤ02に切られる。平面形は円形である。規模は直径 0.30 m、深さ 0.18 mを測り、断面はＵ字形を呈する。埋土は灰黄褐＋にぶい黄褐シルトの単一層である。

遺物の出土がないため詳細な時期は不明であるが、Ｆ１－ＳＤ02に切られることから、古代以前である。

F1-SP03（第 41 図）

Ｆ１調査区の中央南寄りに検出したピットであり、Ｆ１－ＳＤ02に切られる。平面形は円形である。規模は直径 0.26 m、深さ 0.24 mを測り、断面はＵ字形を呈する。埋土は灰黄褐＋にぶい黄褐シルトの単一層である。Ｆ１－ＳＤ02に切られることから、古代以前である。

F2-SP04（第 41 図）

Ｆ２調査区の北側に検出したピットである。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.45 m、短軸

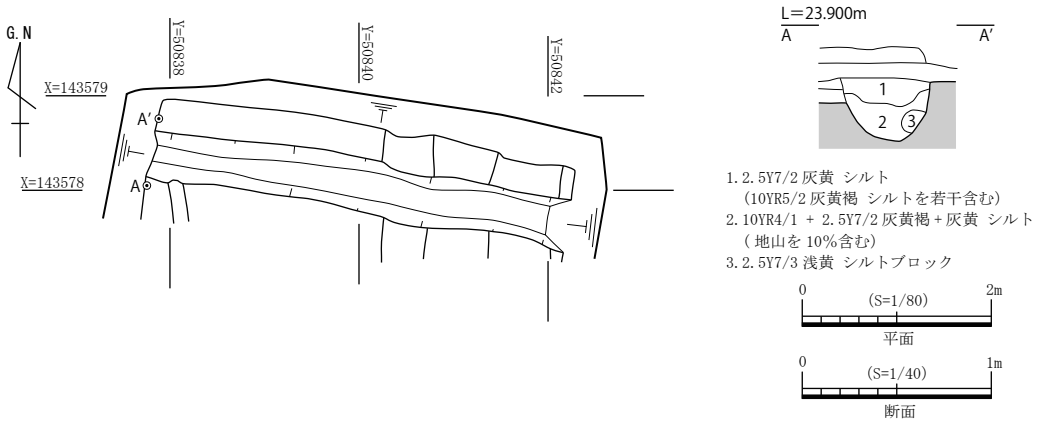


図 40　F1・2-SD03 平・断面図

0.30 m、深さ 0.24 mを測り、断面はＵ字形を呈する。埋土は４層に分かれ、黒褐シルト質極細砂の柱痕が北側に片寄ってみられ、その周囲に褐灰＋にぶい黄褐シルトと褐灰シルトが均等に堆積する。

遺物の出土がないため詳細な時期は不明である。

（４）包含層出土遺物（第 42 図）

80・81 は土師器甕の口縁部であり、大きく外反する。80 は内面にやや粗いハケが施される。82 は土師質土器足釜であり、口縁部の下に小さな鰐が付く。

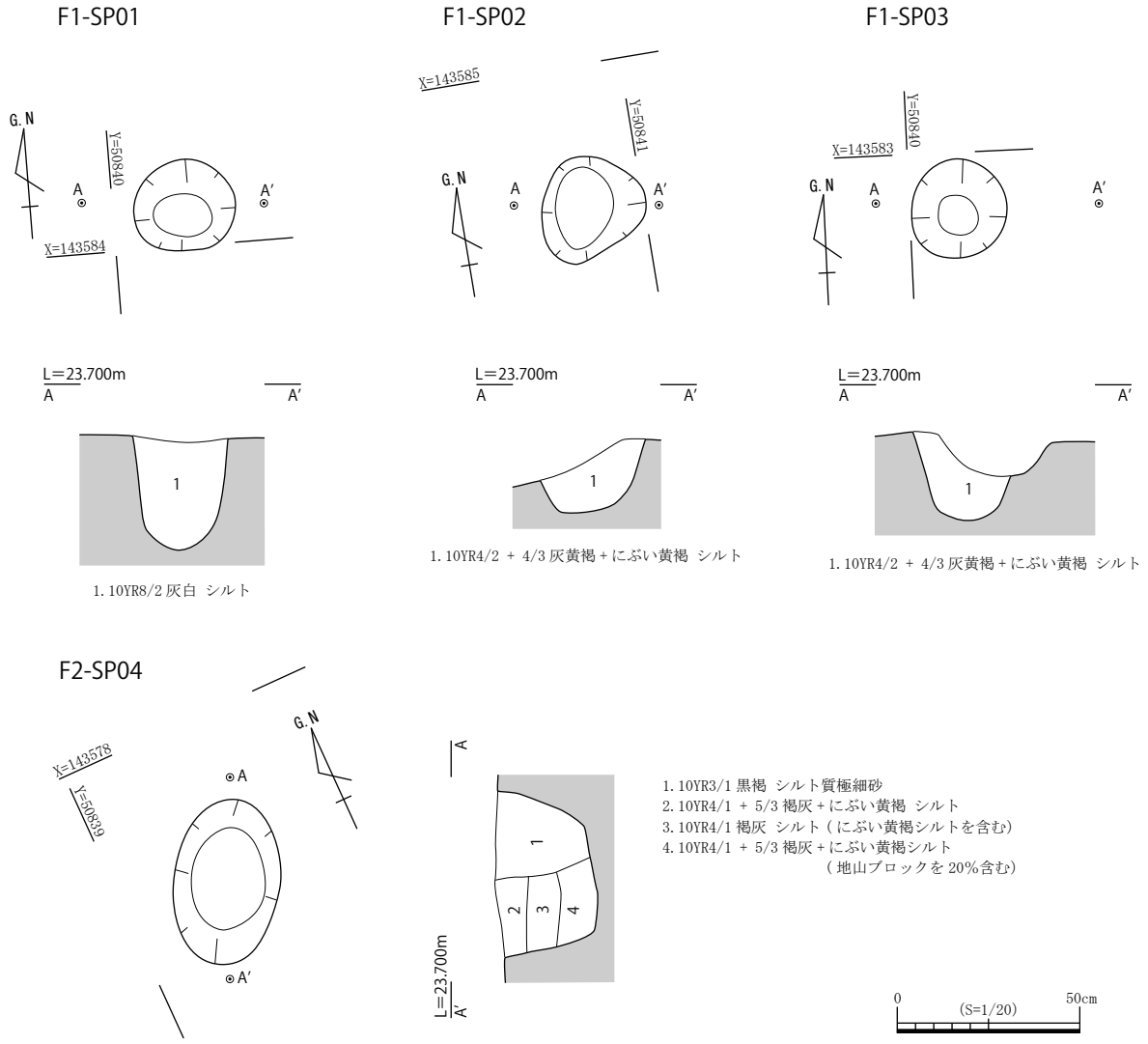


図 41　F1-SP01 ～ 03、F2-SP04 平・断面図

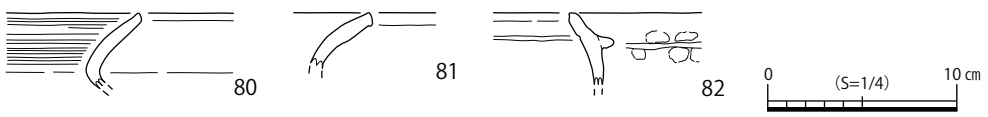


図 42　F1・2 包含層 出土遺物実測図

第４章　　まとめ

第１節　遺構の変遷

今回の松ノ内遺跡の調査では、集落の遺構として竪穴建物２棟、掘立柱建物７棟を検出した。さらに、集落に付属する遺構として柵１列、溝 15 条、土坑４基、ピット 55 基を確認した。調査成果により飛鳥・奈良時代から近世に至る長期間にわたって断続的に人間の営みが行われてきたことが判明した。以下、各時期における遺構の変遷を概観する。

［古代］

遺跡の北東部であるＢ１調査区・Ｆ１調査区・Ｆ２調査区と南西部であるＤ１調査区に遺構が検出される。

飛鳥時代後期～奈良時代前期に比定される遺構は溝のＤ１－ＳＤ01・03、Ｆ１・２－ＳＤ01・02 である。Ｄ１－ＳＤ01 とＤ１－ＳＤ03 は南北方向に延びる溝であり、その位置関係や規模から同一の遺構である可能性が高い。Ｆ１・２－ＳＤ01 とＦ１・２－ＳＤ02 は南北延びる溝であり、切り合い関係からＦ１・２－ＳＤ02 が若干新しい溝である。

竪穴建物であるＢ１－ＳＩ01、Ｆ２－ＳＩ01 は共に一部の検出のみで、その規模や全容は不明であるが、埋土が類似し、主軸方位が同一である。出土した土器が小片のため詳細な時期は確定できないが、古代の範疇に収まると考えられる。2 棟の竪穴建物のみの検出であるが、未調査区域にも竪穴建物が存在すると想定できる。本遺跡の北東側には集落域が拡がると考えられ、本遺跡の北東隅で検出された竪穴建物は南縁近くである。

Ｂ２－ＳＤ04 とＤ１－ＳＤ04 は古代の土器が出土しており、この時期に掘削が開始されたと考えられる。

Ｆ１・２－ＳＤ01・02 とＦ２－ＳＩ01 を切る遺構としてＦ２－ＳＤ03 がある。この溝は直線的に東西方向に延びるが、Ｆ２調査区のみ検出される。Ｄ１調査区においてＤ１－ＳＤ02 が検出される。これらの溝から出土した土器が小片のため詳細な時期は確定できないが、古代の範疇に収まると考えられる。

［中世］

遺跡の北東部であるＡ２調査区・Ｂ１調査区・Ｂ２調査区を中心に遺構が検出される。

12 世紀に比定される遺構はピットのＥ１－ＳＰ01 のみである。

13 世紀末葉～ 14 世紀前葉に比定される遺構は溝のＡ２－ＳＤ01 とＣ１－ＳＤ01、Ｂ１－ＳＤ02、ピットのＢ１－ＳＰ37、Ｂ２－ＳＰ61、Ｂ２－ＳＰ64、性格不明遺構のＡ２－ＳＸ04 である。Ａ２－ＳＤ01 とＣ１－ＳＤ01 は同一の溝であり、直線的に東西方向に延びるが、東端において南東方向に屈曲する。Ｂ１－ＳＤ02 も直線的に東西方向に延びる溝であるが、Ｂ１調査区の中央より東側には延びないで北方へ直角に屈曲してＢ１－ＳＤ01 に至ると思われる。

掘立柱建物のＢ１－ＳＢ01 ～ 05、Ｂ２－ＳＢ06・07 は中世前半に比定される。Ｂ１－ＳＢ03・05、Ｂ２－ＳＢ07 は遺物の出土がないが、建物の方位や埋土から考えて当該時期のものであると思われる。ただし、方位が僅かに違う建物や埋土の異なる建物があり、若干の時間差の可能性も考えられる。調査範囲が狭いために規模が判明したＢ１－ＳＢ02 以外の掘立柱建物は全容や規模は不明であるが、Ａ２・Ｂ１－ＳＢ05 は全長約 6.80 mを測り、最も面積の広い建物である。検出できた範囲ではＢ１－ＳＢ04、Ａ２・Ｂ１－ＳＢ05、Ｂ２－ＳＢ06 の３棟は総柱

である。特に、Ｂ２－ＳＢ06は廂が付いている可能性があり、この集落において中心的な役割を持つ建物であると考えられる。本遺跡において掘立柱建物を検出したのは北東部のみであり、この地域が中世の集落域であることは明確である。古代の集落と比較すると、中世の集落は南西側に大きく広がっている。このことは集落が拡張した、あるいは集落の移動を表している。

Ｂ２－ＳＤ04とＤ１－ＳＤ04は中世においても溝として機能していたと考えられる。

［近世］

遺跡の北東部において検出した溝のＢ２－ＳＤ04とピットのＦ１－ＳＰ01、南西部に検出した溝のＤ１－ＳＤ04と土坑のＣ１－ＳＫ09である。灰白シルトが埋土であるＦ１－ＳＰ01と鳩の土人形を出土したＣ１－ＳＫ09は近世の遺構であり、Ｃ１－ＳＫ09の時期は18世紀前葉以降である。溝のＢ２－ＳＤ04とＤ１－ＳＤ04は南北方向に延びる大規模の溝である。土師器、須恵器、土師質土器、黒色土器、陶器、石臼等が出土することから、この２本の溝は古代（Ｄ１－ＳＤ04には奈良時代後期に比定される須恵器杯蓋が出土）に掘削され、中世を経て近世に最終的に埋没したと考えられる。規模の大きさや長期間溝としての機能を保っていたことから、この２本の溝は条里地割において基幹的な役割を持っていたと思われる。

本報告書には記述していないが、灰白シルトが埋土であり、明確に近世と判断した遺構として、Ｂ２調査区中央付近において検出した南北方向の溝１条、Ｂ３調査区西端において検出した南北方向の溝１条、Ｃ２調査区北側において検出した南北方向と東西方向の溝２条、土坑１基がある。

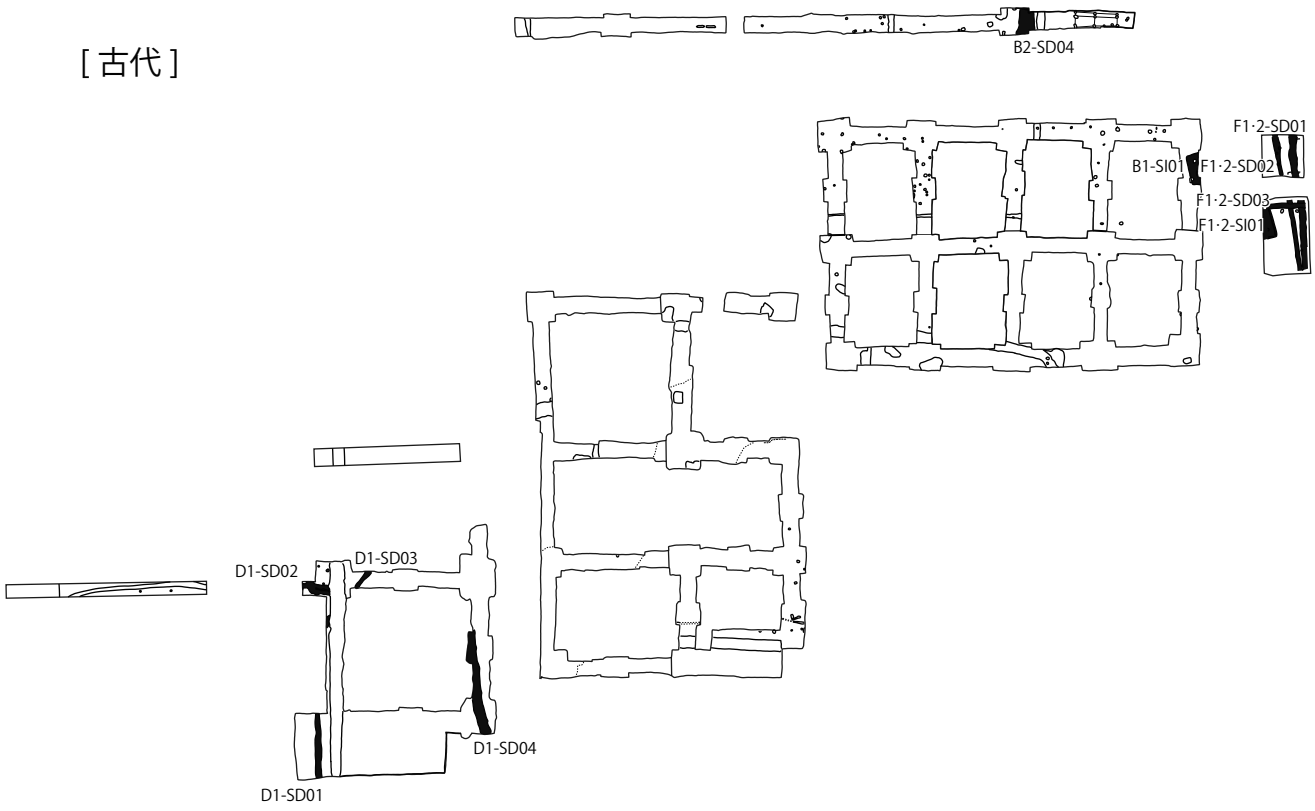
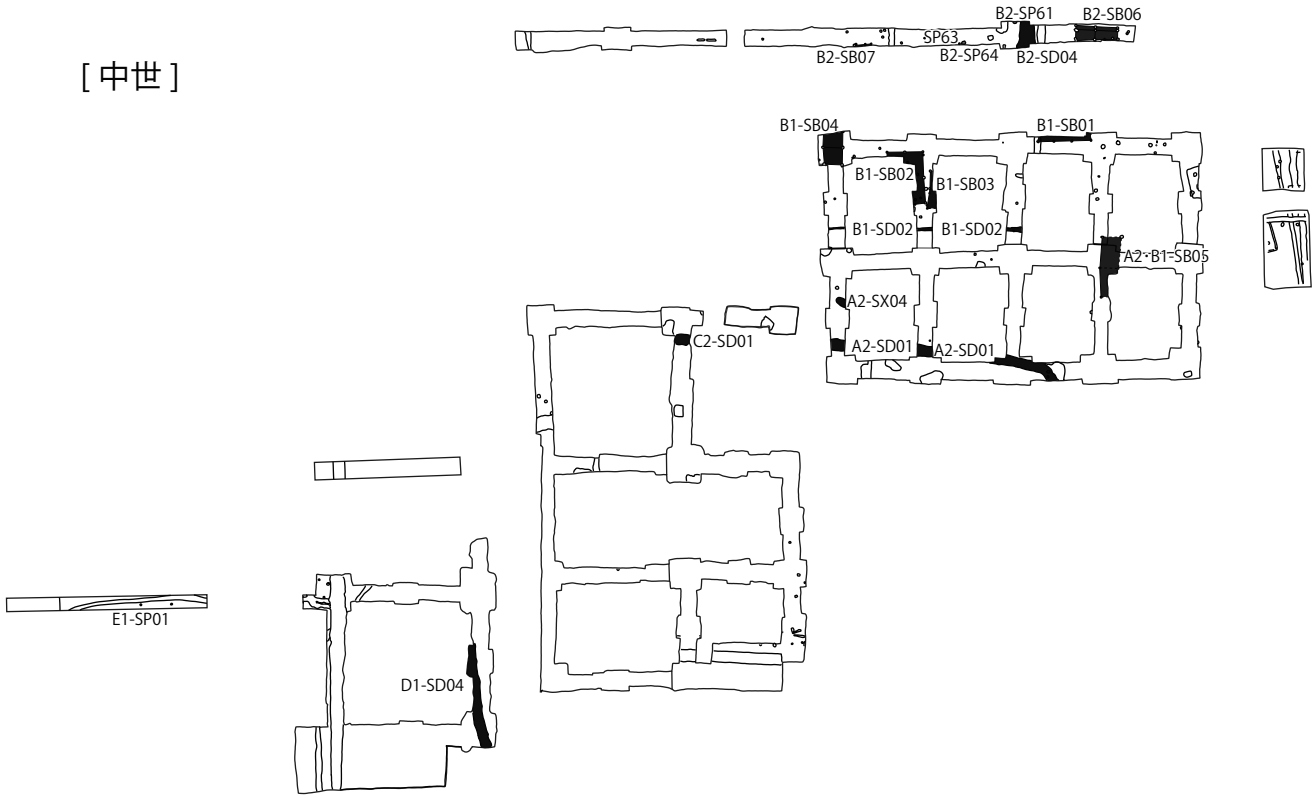


図43　遺構変遷図①

[中世]



[近世]

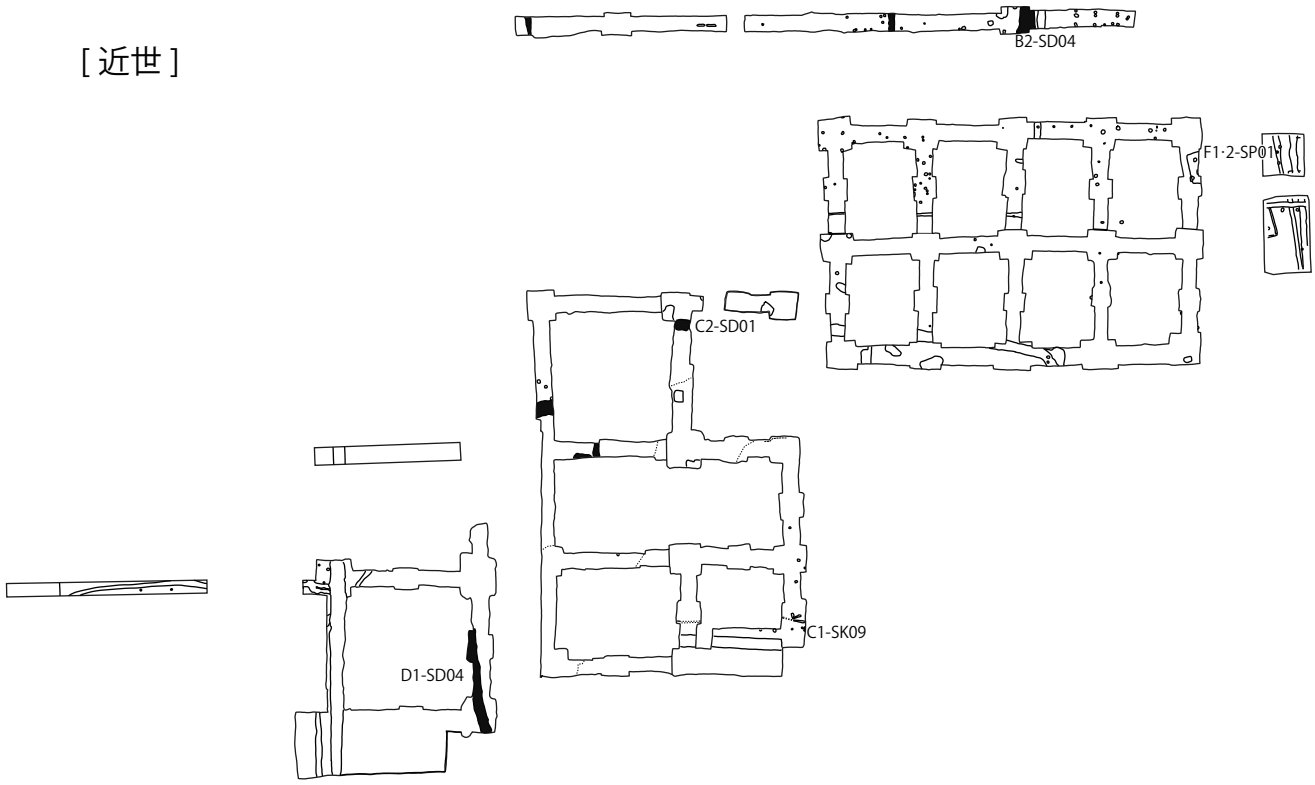


図 44　遺構変遷図②

表１　遺構一覧表

調査区	報告書遺構番号	調査時遺構番号	平面形	直径・幅（cm）	深さ（cm）	埋土	備考
A2調査区	A2-SP02	SK02	円形	21	36	7.5YR3/2　黒褐シルト	
	A2-SP04	SK04	円形	18	13	10YR7/2＋6/2　にぶい黄橙＋灰黄褐シルト	
	A2-SP05	SK05	不整円形	22	4	10YR4/3　にぶい黄褐シルト	
	A2-SP07	SK07	円形	25×20	－	10YR4/2　灰黄褐シルト	土師質土器　（小皿） A2－SD01に切られる
	A2-SP08	SK08	円形	35×28	－	10YR4/2　灰黄褐シルト	A2－SD01に切られる
	A2-SX06	SX06	不整円形	98×〔55〕	11	10YR4/2＋3/1　灰黄褐＋黒褐シルト	
	A2-SX07	SX07	不整円形	〔202〕×〔211〕	24	10YR5/3＋7.5YR6/2　にぶい黄褐＋灰褐シルト 7.5YR6/2灰褐シルト（地山ブロックを5%含む）	A2－SD01に切られる
B1調査区	B1-SP02	SK02	隅丸方形	34×27	8	10YR3/2　黒褐シルト	
	B1-SP03	SK03	不整円形	35	15	10YR3/2　黒褐シルト	土師質土器　（鍋）
	B1-SP04	SK04	楕円形	20×15	11	10YR3/2　黒褐シルト	
	B1-SP05	SK05	楕円形	20×10	10	10YR4/3　にぶい黄褐シルト	
	B1-SP07	SK07	円形	48×42	12	10YR3/2　黒褐シルト	土師質土器　（鍋）
	B1-SP08	SK08	不整円形	41	16	10YR3/2　黒褐シルト	
	B1-SP09	SK09	不整円形	31×27	10	10YR3/2　黒褐シルト	
	B1-SP10	SK10	円形	23	9	10YR4/3　にぶい黄褐シルト	土師質土器　（鍋）
	B1-SP14	SK14	円形	19	33	10YR6/1　褐灰シルト	B1-SD02に切られる
	B1-SP15	SK15	円形	26	33	10YR6/1　褐灰シルト	
	B1-SP16	SK16	円形	19	4	―	土師質土器　（小皿・鍋）
	B1-SP20	SK20	円形	26×21	24	10YR6/1　褐灰シルト	須恵器　（杯）
	B1-SP22	SK22	円形	22×18	17	10YR6/1　褐灰シルト	
	B1-SP24	SK24	円形	15	9	10YR6/1　褐灰シルト	
	B1-SP26	SK26	円形	33	10	10YR3/2　黒褐シルト	
	B1-SP27	SK27	円形	18	32	10YR6/1　褐灰シルト	粘土塊
	B1-SP28	SK28	円形	27×22	27	10YR6/1　褐灰シルト	土師質土器　（杯・小皿）
	B1-SP31	SK31	不整円形	28×22	39	10YR6/1　褐灰シルト	土師器　（杯）、土師質土器　（鍋）
	B1-SP35	SK35	円形	21	9	10YR6/1　褐灰シルト	
	B1-SP37	SK37	円形	20×17	28	10YR6/1　褐灰シルト	土師器　（杯）、土師質土器　（足釜）
	B1-SP39	SK39	円形	22	36	10YR6/1　褐灰シルト	
	B1-SP40	SK40	楕円形	25×21	40	10YR6/1　褐灰シルト	
	B1-SP41	SK41	円形	15	23	10YR6/1　褐灰シルト	
	B1-SP42	SP42	円形	21	15	10YR6/1　褐灰シルト	

調査区	報告書遺構番号	調査時遺構番号	平面形	直径・幅（cm）	深さ（cm）	埋土	備考
B1調査区	B1-SP57	SK57	円形	23	12	10YR3/2 黒褐シルト	
	B1-SX01	SX01	楕円形	〔81〕×41	10	—	
B2調査区	B2-SP44	SK44	円形	22	8	10YR7/3 にぶい黄橙シルト	土師器（甕）、土師質土器（鍋）
	B2-SP45	SK45	楕円形	37×22	14	10YR7/3 にぶい黄橙シルト	
	B2-SP49	SK49	円形	25	7	10YR7/3 にぶい黄橙シルト	
	B2-SP50	SK50	円形	21	15	10YR7/3 にぶい黄橙シルト	土師質土器
	B2-SP63	SK63	円形	18	13	10YR6/1 褐灰シルト	
	B2-SP65	SK65	円形	15	6	10YR6/1 褐灰シルト	
	B2-SP66	SK66	円形	24	11	10YR6/1 褐灰シルト	
	B2-SP67	SK67	円形	24	11	10YR6/1 褐灰シルト	
	B2-SP69	SK69	円形	25	15	10YR6/1 褐灰シルト	
	B2-SP72	SK72	不整円形	20	5	10YR6/1 褐灰シルト	
	B2-SP74	SK74	円形	23	13	10YR6/1 褐灰シルト	
	B2-SP75	SK75	不整円形	22	10	10YR6/1 褐灰シルト	
C1・2調査区	C1-SK10	SK10	不整楕円形	100×21	11	10YR4/2 灰黄褐シルト	
	C1-SP01	SK01	隅丸方形	30×25	7	10YR4/2 灰黄褐シルト	
	C1-SP02	SK02	隅丸方形	28×22	10	10YR4/2 灰黄褐シルト	
	C1-SP03	SK03	不整隅丸方形	50×27	10	10YR4/2 灰黄褐シルト	土師質土器（杯）
	C1-SP11	SK11	円形	18×13	10	10YR4/2 灰黄褐シルト	
	C1-SP12	SK12	不整円形	24×19	6	10YR4/2 灰黄褐シルト	
	C2-SP13	（仮）SP1	円形	36	11	10YR6/2 灰黄褐砂まじりシルト	根石
	C2-SP14	（仮）SP2	円形	30	10	10YR6/2 灰黄褐砂まじりシルト	
	C2-SP15	（仮）SP3	円形	39×35	6	10YR6/2 灰黄褐砂まじりシルト	
	C2-SX01	SX01	不明	〔23〕	8	—	
	C2-SX02	SX02	不整円形	〔160〕×120	30	—	
	C2-SX03	SX03	不整円形	〔145〕×〔75〕	13	—	
D1調査区	D1-SP01	SK01	円形	20	10	10YR4/3 にぶい黄褐シルト	
	D1-SP02	SK02	円形	33×27	8	10YR4/3 にぶい黄褐シルト	
	D1-SP03	SK03	円形	19	8	10YR4/3 にぶい黄褐シルト	
E1調査区	E1-SP02	SK02	円形	20	—	—	

表2　遺物観察表

土器

図版番号	報文番号	出土遺構名	種別	器種名	産地	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	胎土	色調1 (胎土・外面色調)	色調2 (釉薬・内面色調)	色調3 (呉須・上絵)	調整	備考
6	1	B1-SB01 SP11	土師質土器	甕		—	—	〔2.8〕	良	普通	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/3にぶい橙	—	外面：ナデ、摩滅 内面：ナデ、ハケ	口縁部：朱付着
6	2	B1-SB01 SP11	黒色土器　A類	椀		—	—	〔2.7〕	良	普通	10YR8/2灰白	N3/暗灰	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁部：外面に重ね焼き痕
7	3	B1-SB02 SP23	土師質土器	足釜　脚部		長 〔6.3〕	径 3.0	—	良	普通	10YR8/2灰白	10YR7/2にぶい黄橙	—	外面：ナデ 内面：ナデ	
12	5	A2-SD01	土師器	杯		(10.4)	6.8	2.8	良	普通	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	—	外面：摩滅 内面：摩滅	底面：回転ヘラ切り後にナデ
12	6	A2-SD01	土師器	杯		(10.6)	(6.4)	2.6	良	普通	5YR8/4淡橙	7.5YR8/3浅黄橙	—	外面：回転ナデほぼ摩滅、摩滅 内面：回転ナデ	
12	7	A2-SD01	土師器	杯		(10.8)	(7.0)	2.4	良	普通	5YR8/3淡橙	5YR8/3淡橙	—	外面：摩滅 内面：摩滅	
12	8	A2-SD01	土師器	甕		—	—	〔2.1〕	良	普通	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	—	外面：ナデ 内面：ナデ	外面は被熱
12	9	A2-SD01	土師質土器	鍋		(52.0)	—	〔5.7〕	良	普通	5YR7/4にぶい橙	5YR7/6橙	—	外面：指オサエ、ハケ、摩滅 内面：摩滅	外面は被熱のため5YR4/2灰褐に変色している。
12	10	A2-SD01	土師質土器	足釜		—	—	〔4.6〕	良	普通	7.5YR5/3にぶい褐	5YR5/4にぶい赤褐	—	外面：指オサエ、摩滅 内面：摩滅	接合痕
12	11	A2-SD01	土師質土器	足釜		—	—	〔5.5〕	良	普通	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	—	外面：ナデ、指オサエ、摩滅 内面：ナデ	
12	12	A2-SD01	土師質土器	足釜		—	—	〔4.0〕	良	普通	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	—	外面：ハケ、ナデ、指ナデ、指オサエ 内面：ナデ、弱いハケ	外面スス付着
12	13	A2-SD01	土師質土器	足釜		—	—	〔3.3〕	良	普通	7.5YR8/4浅黄橙	5YR7/6橙	—	外面：ナデ、指オサエ、摩滅 内面：摩滅	指オサエに爪の圧痕が残る。鍔の上面にも指オサエの痕跡が残る。
12	14	A2-SD01	土師質土器	足釜		(21.0)	—	〔6.9〕	良	普通	5YR6/6橙	5YR6/6橙	—	外面：指オサエ、摩滅 内面：摩滅	鍔より以下は被熱のためやや黒ずむ。
12	15	A2-SD01	土師質土器	足釜		(22.6)	—	〔4.8〕	良	普通	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	—	外面：指オサエ、ハケ 内面：摩滅	爪圧痕
12	16	A2-SD01	土師質土器	足釜		(22.8)	—	〔7.3〕	良	普通	5YR6/6橙	5YR6/8橙	—	外面：指オサエ、ナデ、ヘラナデ、工具痕 内面：ナデ	スス付着、接合痕、爪圧痕
12	17	A2-SD01	土師質土器	足釜　脚部		長 〔11.1〕	径 2.9	—	良好	粗	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR7/3にぶい橙	—	外面：ナデ、指オサエ 内面：—	下半は薄く剥離する。
12	18	A2-SD01	土師質土器	羽釜		(21.0)	—	〔4.3〕	良	普通	7.5YR8/3浅黄橙	5YR7/6橙	—	外面：ヨコナデ、指オサエ、ハケ、ナデ 内面：ヨコナデ、指オサエ、ハケ	鍔にヘラによる削痕有り。鍔以下は表面があれている。
14	19	B1-SD02	土師器	杯		(7.2)	(4.2)	〔2.25〕	良	普通	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	—	外面：摩滅 内面：摩滅	
14	20	B1-SD02	土師器	杯		(10.6)	(7.8)	2.8	良	普通	5YR8/4淡橙	7.5YR8/4浅黄橙	—	外面：回転ナデ、摩滅 内面：摩滅	
14	21	B1-SD02	土師器	杯		(11.0)	6.2	2.7	良	普通	7.5YR7/1明褐灰・ 7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底面：回転ヘラ切り後に板目
14	22	B1-SD02	土師器	杯		(11.2)	(8.0)	2.3	良	普通	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR7/2明褐灰	—	外面：摩滅(回転ナデ) 内面：摩滅(回転ナデ)	
14	23	B1-SD02	須恵器	高杯		—	—	〔9.1〕	良	普通	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	沈線2条
14	24	B1-SD02	土師質土器	足釜		—	—	〔3.6〕	良	普通	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	—	外面：摩滅、指オサエ 内面：摩滅	外面スス付着
16	25	B1-SK37	土師質土器	鍋		—	—	〔1.5〕	良	普通	7.5YR7/4にぶい橙	10YR7/4にぶい黄橙	—	外面：ナデ、摩滅 内面：摩滅	
18	26	A2-SX04	土師質土器	足釜		(21.2)	—	〔11.7〕	良	普通	7.5YR5/6明褐	10YR6/4にぶい黄橙	—	外面：ナデ、指オサエ、ハケ、格子状タタキ 内面：ナデ	スス付着、接合痕
18	27	A2-SX04	土師質土器	鍋		—	—	〔5.0〕	良	普通	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	—	外面：ハケ、摩滅 内面：ヨコナデ、ナデ	
19	28	B2-SB06 SP46	黒色土器　A類	椀		(14.8)	—	〔4.7〕	良	普通	10YR8/2灰白	10Y2/1黒	—	外面：回転ナデ、指オサエ、ヨコナデ 内面：ヘラミガキ、ヨコナデ	
22	29	B2-SD04	須恵器	椀		(13.6)	—	〔1.7〕	良	普通	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	

図版番号	報文番号	出土遺構名	種別	器種名	産地	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	胎土	色調1 (胎土・外面色調)	色調2 (釉薬・内面色調)	色調3 (呉須・上絵)	調整	備考
22	30	B2-SD04	須恵器	椀		—	(9.6)	〔1.4〕	良	精良	N5/灰	N5/灰	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
22	31	B2-SD04	土師質土器	足釜		—	—	〔3.6〕	良	普通	5YR7/6橙	5YR7/8橙	—	外面：指オサエ、摩滅 内面：摩滅	
22	32	B2-SD04	土師質土器	足釜		—	—	〔3.5〕	良	粗	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	—	外面：ヨコナデ、指オサエ、摩滅 内面：摩滅	
22	33	B2-SD04	土師質土器	足釜　脚部		長 〔7.9〕	径 3.0	—	良	普通	10YR6/3にぶい黄橙	—	—	外面：ナデ、指オサエ、摩滅 内面：—	
22	34	B2-SD04	土師質土器	足釜　脚部		長 〔8.1〕	径 3.1	—	良	粗	7.5YR7/3にぶい橙	—	—	外面：ナデ 内面：—	
22	35	B2-SD04	陶器	鉢	肥前系	—	(7.2)	〔3.3〕		細	7.5Y8/1灰白	5Y7/2灰白	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
23	37	B2-SP61	土師質土器	小皿		(7.4)	(6.2)	1.0	良	普通	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	—	外面：ナデ 内面：ナデ	
23	38	B2-SP61	黒色土器　A類	椀		—	—	〔4.6〕	良	普通	10YR8/3浅黄橙	N3/暗灰	—	外面：ヘラミガキ、ヘラケズリ、摩滅 内面：摩滅	
23	39	B2-SP64	黒色土器　B類	椀		(14.0)	—	〔3.0〕	良	精良	N3/暗灰	N3/暗灰	—	外面：ヘラミガキ、摩滅 内面：ヘラミガキ、摩滅	
23	40	B2-SP64	黒色土器　B類	椀		—	—	〔2.9〕	良	普通	N5/灰	N4/灰	—	外面：ヘラミガキ、摩滅 内面：ヘラミガキ、摩滅	
23	41	B2-SP64	土師質土器	杯		(12.0)	(6.8)	3.1	良	普通	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底面：回転ヘラ切り後にナデ
23	42	B2-SP64	土師質土器	羽釜		(25.0)	—	〔2.9〕	良	普通	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	—	外面：ナデ 内面：ナデ	
23	43	B2-SP64	土師質土器	火鉢		—	—	〔3.7〕	良	普通	5YR5/6明赤褐	10YR4/2灰黄褐	—	外面：ナデ 内面：ナデ	内面被熱
23	44	B2-SP68	土師質土器	杯		—	—	〔2.4〕	良	普通	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/2灰白	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
26	45	C2-SD01	土師質土器	足釜　脚部		長 〔8.2〕	径 2.9	—	良	普通	7.5YR4/3褐	—	—	外面：ナデ 内面：—	スス付着
28	46	C1-SK09	—	土人形(鳩)		長 〔7.3〕	幅 4.5	〔5.5〕	良	普通	10YR8/4浅黄橙	—	—	外面：無調整 内面：無調整	土器の中に直径9mmの土製の球体が残存(土器と同じ色調) 表面にキラ粉付着
30	47	D1-SD01	土師器	甕		(25.6)	—	〔6.4〕	良	普通	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	—	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ、ヘラナデ	
33	48	D1-SD04	陶器	碗		—	—	〔3.7〕		細	5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/2明褐灰	—	外面：回転ナデ、施釉 内面：回転ナデ、施釉	
33	49	D1-SD04	陶器	擂鉢	備前	—	—	〔4.7〕		普通	5YR6/1褐灰・N8/灰白 5YR6/6橙	2.5YR6/6橙 2.5YR5/3にぶい赤褐	—	外面：回転ナデ後指ナデ 内面：回転ナデ、卸目	卸目：8本一単位
33	50	D1-SD04	土師質土器	足釜　脚部		長 〔11.8〕	径 2.7	—	良	普通	7.5YR7/3にぶい橙	—	—	外面：ナデ、指オサエ、摩滅 内面：—	
33	51	D1-SD04	土師質土器	足釜　脚部		長 〔9.1〕	径 2.8x1.8	—	良	普通	7.5YR6/6橙	—	—	外面：ナデ 内面：—	
33	52	D1-SD04	土師器	杯		—	(6.2)	〔1.5〕	良	普通	5YR6/6橙	10YR5/4にぶい黄褐	—	外面：摩滅 内面：摩滅	
33	53	D1-SD04	須恵器	杯蓋		—	—	〔0.8〕	良好	普通	10YR4/1褐灰	N4/灰	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
33	54	D1-SD04	須恵器	鉢		—	—	〔2.7〕	良好	普通	N6/灰	N5/灰	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
33	55	D1-SD04	須恵器	甕		—	—	〔6.0〕	良好	普通	N5/灰	7.5YR5/1褐灰	—	外面：回転ナデ、沈線1条 内面：ナデ、ヘラナデ	接合痕
34	58	E1-SP01	土師器	小型器台		9.2	5.3	2.8	良	精良	10YR8/2灰白	7.5YR8/4浅黄橙	—	外面：回転ナデ、摩滅 内面：回転ナデ、摩滅	底面：回転ヘラ切り後にナデ
36	59	F2-SI01	土師器	甕		—	—	〔2.3〕	良	普通	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	—	外面：ナデ 内面：ナデ	
36	60	F2-SI01	土師器	甕		—	—	〔2.0〕	良	普通	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	—	外面：ナデ 内面：摩滅	
39	61	F2-SD01	土師器	杯		—	—	〔1.4〕	良	普通	7.5YR7/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	—	外面：ナデ 内面：ナデ	

図版番号	報文番号	出土遺構名	種別	器種名	産地	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	焼成	胎土	色調1 (胎土・外面色調)	色調2 (釉薬・内面色調)	色調3 (呉須・上絵)	調整	備考
39	62	F1-SD01	土師器	鉢		—	—	〔2.6〕	良	普通	5YR7/6橙	5YR5/6明赤褐	—	外面：摩滅 内面：ナデ、摩滅	
39	63	F1-SD01	土師器	鉢		—	—	〔3.3〕	良	普通	7.5YR7/4にぶい橙 10YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰 7.5YR7/4にぶい橙	—	外面：ナデ 内面：ナデ	
39	64	F2-SD01	土師器	甕		(14.0)	—	〔5.7〕	良	普通	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/3浅黄橙	—	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	
39	65	F1-SD01	土師器	甕		—	—	〔2.5〕	良	普通	7.5YR6/3にぶい褐	10YR5/2灰黄褐	—	外面：ナデ 内面：ナデ	
39	66	F1-SD01	土師器	甕		(24.8)	—	〔4.4〕	良	普通	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい橙	—	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	輪積み痕2ヶ所
39	67	F1-SD01	土師器	甕		—	—	〔5.3〕	良	普通	10YR8/3浅黄橙	7.5YR8/2灰白	—	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	
39	68	F1-SD01	土師器	甕		—	—	〔1.8〕	良	普通	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白 2.5YR5/6明赤褐	—	外面：ハケ 内面：摩滅	外面に赤色顔料
39	69	F1-SD01	須恵器	杯		(12.8)	—	〔3.1〕	良	普通	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/1灰白	—	外面：摩滅 内面：ナデ	
39	70	F1-SD01	須恵器	高杯		(13.8)	—	〔4.8〕	良	普通	N7/灰白	N8/灰白	—	外面：ナデ、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	
39	71	F1-SD01	須恵器	甕		20.4	—	〔4.3〕	良	普通	5Y7/1灰白	2.5Y8/1灰白	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
39	72	F1-SD01	須恵器	甕		—	—	〔4.8〕	良	普通	7.5YR8/1灰白	2.5Y8/1灰白	—	外面：カキメ、櫛描列点文 内面：青海波タタキ	
39	73	F2-SD02	土師器	杯		11.4	9.6	2.8	良	普通	7.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	—	外面：ナデ、指頭圧痕のちナデ 内面：ナデ、摩滅	
39	74	F2-SD02	土師器	鉢		(17.2)	—	〔3.9〕	良	普通	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	—	外面：ヨコナデ、ナデ、ハケ 内面：摩滅	
39	75	F1-SD02	土師器	鉢		(19.4)	—	〔5.6〕	良	普通	5YR5/6明赤褐	7.5YR6/2灰褐	—	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	
39	76	F1-SD02	土師器	鉢		—	—	〔3.3〕	良	普通	7.5YR4/3褐	7.5YR3/1黒褐	—	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	
39	77	F2-SD02	土師器	鉢		—	—	〔5.3〕	良	普通	5YR5/6明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	—	外面：ヨコナデ、ナデ、摩滅 内面：ハケ、摩滅	
39	78	F1-SD02	土師器	甕		—	—	〔5.7〕	良	普通	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR8/3浅黄橙	—	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、指頭圧痕、ハケ	
39	79	F2-SD02	土師器	甕		—	—	〔7.7〕	良	普通	2.5YR5/8明赤褐	7.5YR7/4にぶい橙	—	外面：ハケ、ヘラナデ 内面：ハケ	黒斑あり
42	80	F1-精査	土師器	甕		—	—	〔4.0〕	良	普通	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	—	外面：ナデ、摩滅 内面：ハケ、ナデ	
42	81	F1-精査	土師器	甕		—	—	〔2.9〕	良好	普通	5YR7/6橙	5YR6/6橙	—	外面：ナデ、摩滅 内面：ヨコナデ、ナデ	
42	82	F2-精査	土師質土器	足釜		—	—	〔3.8〕	良	普通	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	—	外面：ヨコナデ、ナデ、指頭圧 内面：ヨコナデ、ナデ、工具痕	

瓦

図版番号	報文番号	出土遺構名	種別	法量(cm) 全長	法量(cm) 幅	法量(cm) 厚さ	法量(cm) 瓦当厚	焼成	胎土	色調（器面）	色調（断面）	調整	備考
9	4	B1-SB04 SP56	平瓦	〔5.4〕	〔6.9〕	1.5	—	良	精良	凸面：5YR7/6橙 凹面：7.5YR8/4浅黄橙	5YR7/6橙	凸面：平行タタキ、ナデ 凹面：ナデ	
22	36	B2-SD04	平瓦	〔8.6〕	〔9.3〕	1.7	—	良好	普通	凸面：5YR6/4にぶい橙 凹面：5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	凸面：平行縄目タタキ 凹面：布目、糸切り、ケズリ	

石製品

図版番号	報文番号	出土遺構名	機種	法量（cm/g） 長さ	法量（cm/g） 幅	法量（cm/g） 厚さ	法量（cm/g） 重さ	石材	備考
33	56	D1-SD04	石臼(下臼)	直径 (31.0)	—	8.0	〔2510〕	花崗岩	
33	57	D1-SD04	石核	3.6	6.4	1.0	26.9	サヌカイト	

1-1　A2・B1 調査区 完掘

1-2　B2・3 調査区 完掘（西から）

写真図版2

2-1　A2 調査区 完掘（東から）

2-2　A2-SD01 完掘 東端（東から）

2-3　A2-SD01 完掘 西端（東から）

2-4　A2-SD01 土層（東から）

2-5　A2-SD01 完掘 中央（東から）

2-6　A2-SD01 土層（東から）

2-7　A2-SK03 完掘（北から）

2-8　A2-SX04 完掘（南西から）

3-1　A2、B1 調査区 完掘（東から）

3-2　B1-SI01 完掘（南から）

3-3　B1-SI01 P1 土層断面（南から）

3-4　B1-SI01 掘り方（西から）

3-5　B1-SB02 ～ 04 完掘

3-6　B1-SB04 完掘（北から）

3-7　B1-SB04 SP56 完掘

3-8　B1-SD01 完掘（南から）

写真図版4

4-1　B2 調査区 完掘

4-2　B2-SB06、B2-SD03・04 完掘

4-3　B2-SB06 SP51 完掘

4-4　B2-SB06 SP56 完掘

4-5　B2-SD03・04 完掘（南から）

4-6　B2-SD04 土層断面（南から）

4-7　C1 調査区 完掘

4-8　C2 調査区 完掘

5-1　D1 調査区 完掘（南から）

5-2　D2 調査区 完掘（西から）

5-3　E1 調査区 完掘（東から）

写真図版6

6-1　F1 調査区 完掘（南から）

6-2　F2 調査区 完掘（南から）

6-3　F2-SI01 完掘（南から）

6-4　F2-SI01 土層断面（南から）

6-5　F1・2-SD01 土層断面（南から）

6-6　F1・2-SD02 土層断面（南から）

6-7　F2-SD03 完掘（西から）

6-8　F2-SD03 土層断面（東から）

7-1　出土遺物

写真図版8

41

58

46

66

47

45

71

55

48

51

50

73

56

79

8-1　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	まつのうちいせき
書名	松ノ内遺跡２
副書名	複合商業施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第245集
編著者名	香川 将慶・中西 克也
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目８番15号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2023年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査 面積	発掘 原因
まつのうちいせき 松ノ内遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 たひかみまち 多肥上町	37201	11008	34° 17′ 37″	134° 3′ 4″	2021.6.24～9.16 2022.9.12～15	1,600㎡	複合商業施設 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松ノ内遺跡	集落遺跡	飛鳥・奈良時代 古代 中世 近世	竪穴建物、 掘立柱建物、 溝、土坑、ピット	土師器、須恵器、 土師質土器、石造物	

要約	今回報告した松ノ内遺跡は飛鳥・奈良時代から近世にかけての集落遺跡であり、その中心となるのは、古代～中世の竪穴建物・掘立柱建物・溝・ピット等である。遺構は遺跡全域に検出されるが、特に北東部分に竪穴建物や掘立柱建物が集中している。

高松市埋蔵文化財調査報告第 245 集

複合商業施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

松ノ内遺跡２

2023 年３月 31 日

編　集　高松市教育委員会
高松市番町一丁目８番 15 号

発　行　株式会社ハローズ
高松市教育委員会

印　刷　（有）中央ファイリング